

靈界物語 第七卷 靈主體從 午の卷

出口王仁三郎

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七卷』愛善世界社

一九九四(平成〇六)年〇二月〇三日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。

編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

二〇〇九年十一月二〇日修正

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説 そうせつ

第一篇

大臺ヶ原 おほだいがはら

第一章 ひのでさんじゃう
日出山上 〔三〇一〕

第二章 さんしんかいこう
三神司邂逅 〔三〇二〕

第三章 はくりう
白龍 〔三〇三〕

第四章 いはつちびこ
石土毘古 〔三〇四〕

第五章 ひのでがだけ
日出ヶ嶽 〔三〇五〕

第六章 からゑぼり
空威張 〔三〇六〕

第七章 山火事〔三〇七〕

第二篇 白雪郷

第八章 羽衣の松〔三〇八〕

第九章 弱腰男〔三〇九〕

第一〇章 附合信神〔三一〇〕

第十一章 助け船〔三一〇〕

第十二章 熟々盡〔三一〇〕

第三篇 太平洋

第十三章 美代の濱〔三一三〕

第十四章 怒濤澎湃〔三一四〕

第一五章 船幽靈〔三一五〕

第一六章 釣魚の悲〔三一六〕

第一七章 龜の背〔三一七〕

第四篇 鬼門より龍宮へ

第一八章 海原の宮〔三一八〕

第一九章 無心の船〔三一九〕

第二〇章 副守飛出〔三二〇〕

第二一章 飲めぬ酒〔三二一〕

第二二章 龍宮の寶〔三二二〕

第二三章 色良い男〔三二三〕

第五篇 亞弗利加

第二四章 筑紫上陸〔三二四〕

第二五章 建日別〔三二五〕

第二六章 アオウエイ〔三二六〕

第二七章 蓄音器〔三二七〕

第二八章 不思議の窟〔三二八〕

第六篇 肥の國へ

第二九章 山上の眺〔三二九〕

第三〇章 天狗の親玉〔三三〇〕

第三一章 虎轉別〔三三一〕

第三二章 水晶玉〔三三二〕

第七篇 日出神

第三三章 回顧くわいこ〔三三三三〕

第三四章 時の氏神とき うぢがみ〔三三四〕

第三五章 木像もくざうに説教せつけう〔三三五〕

第三六章 豊日別とよひわけ〔三三六〕

第三七章 老利留油らうりるいう〔二三三七〕

第三八章 雲天燒くもてんやけ〔三三八〕

第三九章 駱駝隊らくだたい〔三三九〕

第八篇 一身四面いっしんしめん

第四〇章 三人奇遇さんにんきぐう〔三四〇〕

第四一章 枯木の花かれきはな〔三四一〕

第四二章 分水嶺ぶんすゐれい〔三四二〕

第四三章 神の國かみくに〔三四三〕

第四章 福邊面ふくべづら〔三四四〕

第五章 酒魂くしみたま〔三四五〕

第六章 白日別しらひわけ〔三四六〕

第七章 鯉こひの一ひとはね跳ね〔三四七〕

第九篇 小波丸さざなみまる

第八章 悲喜ひきこもこも交々こもこも〔三四八〕

第九章 乘のり直なほせ〔三四九〕

第十章 三五さんごのつき〔三五〇〕

附録 第三回高熊山參拜紀行歌

〳
〳
〳
〳
〳
〳
〳
〳

序文 じよぶん

節分祭を前に見て、餘す所ただ四日、丹波の名物大江山の鬼の戸別訪問の夕ま
でに、是非々々七つの巻を口述せよと、柎の針のイライラと、何か鱈て呉れむも
のと、「外山」の霞搔別て、鬼の眷族みた如うな、眼をむき出し攻め来る。王仁
は是非なく龍宮館、水に浮びし錦水亭に、温泉歸りの落着かぬ、五尺の糞造器を
横へて、破れたレコードの回轉を、倒け徳利のドブドブと、やつと出口の出放題、
頭ならべて愧を數多かくの如しと云爾。

地震の前の静けさ、神界は時々刻々に急迫を告げ、思想界の鬼や大蛇の跋扈跳
梁激烈を極めて、三界の形勢容易ならざる時機とはなりぬ。然しながら、稻實り
て頭を地に伏すごとく、油斷あらば隙ゆく駒の荒れ狂ひ、數萬年の神界の經綸を
土崩瓦解せむとする邪神輩のテグスネ曳いて松の大本を付け狙ふ。槍の雨、毒舌
の風、柳と受けて今は何事も岩の神、堅く結むで解くに説かれぬ物語、梅花の春
の匂ふときこそ待たれける。三千世界の梅の花、錦の機のおりおりに、心ひそめ

て神意のあるところを味ひ玉はむことを。

花は散り木の實はあとゆ日に夜に
ふとり行くなりそのの白梅

出口王仁識

凡例

一、本巻は岩井温泉より歸綾後、節分祭までの四日間に完成し、その内容は、伊奘諾の大神の御子日の出神が、大臺ヶ原より濠洲すなはち龍宮島を経て、亞弗利加大陸すなはち筑紫の島へ渡り、神の道を宣傳し、世人を救済するとともに各國の守護職を任命さるる物語であります。

一、要するに本巻の總説にもあります通り、この靈界物語は【人智を以て解説】

することは到底出来ませぬから、すべて文字の儘を拜讀し、身魂相應に解釋すれば結構だと思ひます。

大正十一年瑞月祥日

王仁識

總説

神界の示教は、到底現代人のごとく、數理的頭腦の活力を以て窺知することは出来ないものである。神は言靈即ち道である。言葉を主として解すべきものである。神諭の三月三日五月五日の數字についても、現代の物質かぶれをした人士は、非常な論議の花を咲かして居られるさうです。出口教祖の直筆の文句には「明治三十年で世の立替云々」と、明治三十三年ごろになつても、依然として記されてあるのを見て、神界の示教の現代的解釋に合致せないことは明瞭であります。また教祖の直筆は所謂お筆先であり、そのお筆先を神示に隨つて、取捨按配し

て發表したのが大本神諭である。之を經の筆先と稱して、變性女子の緯の筆先と區別し、經は信ずるが、緯は信じないと謂つてゐる人々が、處々に散見される様ですが、經緯不二の真相を知らんと思へば、教祖の直筆をお讀みに成つたら判然するでせう。お筆先そのままの發表は、隨分斷片的に語句が列べられ、かつ一見して矛盾撞着せし文句があるやうに淺い信者は採るやうなことが澤山ある。また教祖が明治二十五年より、大正五年舊九月八日まで筆先を書かれたのは、全部御修行時代の産物であり、矛盾のあることは、教祖自筆の同年九月九日の御筆先を見れば判然します。

變性女子のやり方について、今日まで誤解して居たといふ意味を書いて居られる。その未成品の御筆先しかも變性女子みづから取捨按配した神諭を見て、かれこれ批評するのは、批評する人が根本の緯緯を知らないからの誤りであります。私はもはや止むに止まれない場合に立到つたので、露骨に事實を告白しておきます。要するに教祖は、明治二十五年より大正五年まで前後二十五年間、未見眞實の境遇にありて神務に奉仕し、神政成就の基本的神業の先驅を勤められたのであ

る。女子は入道は明治三十一年であるが、未見眞實の神業は、同三十三年まで全二ケ年間で、その後は見眞實の神業である。靈的に言ふならば教祖よりも十八年魁けて、見眞實の境域に進んでゐたのは、お筆先の直筆を熟讀さるれば判りませう。

三千年と五十一年、三四月、八九月、正月三日、三月三日、五月五日なぞの數字に囚はれてゐた、いはゆる派、派の説明に誤られてはならぬ。五年の五は、嚴の意味であり、十は「火水」、または神の意、一年は始めの年の意味である。要するに三千年（無限の年數）の間の、大神の御艱苦が出現して、神徳の發揮さるる最初の年が、明治二十五年正月からと云ふ意義である。九月八日の九はツクシであり、月はミロクであり、八は開く、日は輝くの意味で、梅で開いて松で治めるといふ意義である。九月とは松で治める意義、八日とは梅で開く意義である。また正月三日の正は、一と止と合した意味であり、月は月光、三は瑞または榮え、日は輝くことで、神徳の完全に發揮されることを、正月三日といふのである。故に神諭の解釋は容易にできない。また筆先と神諭の區別も辨へて

讀よんで貰もらはねばなりません。

この靈界物語れいかいものがたりも、人智じんちを以もつて判斷はんだんすることは出来できませぬ。たとへ編輯人へんしふにん、筆録ひつろく者の解説かいせつといへども、肯定こうていしては成なりませぬ。ただ單たんに文句もんくのまま、素直すなほに讀よむのが、第一安全だいいちあんぜんでありますから、一寸書加ちよつとかきくはへておきます。

大正十一年瑞月祥日

於瑞祥閣 王仁識

第一篇 大臺ヶ原おほだいがはら

第一章 日出山上ひのでさんじやう〔三〇一〕

千歳の老松杉林

檜雑木苔蒸して

神さび立てる大森林

麓を廻る中國一の大高山

東南西に千波萬波の押寄する

大海原を控へたる

雲井に高く神徳も

大臺ヶ原の中央に

雲つくばかりの大岩窟あり

盤古神王自在天

自由自在に世の中を

思ひのままに掻き亂し

萬古不動の礎を

建てむとしたる立岩の

【をぐら】き窟の奥深く

探り知られぬ其の企み

天津御神の勅以て

豊葦原の中津國

淡路島なる聖域に

天降りましたる伊奘諾の

神の光の四方の國

暗夜を開く大道別命の分靈

日の出神は朝露を

踏み分け登る宣傳使

漸う岩窟の前に辿り着く

彼方此方に鳴き渡る

百鳥千鳥の鳴く聲は

岩戸の前に百神の

囁く如く聞ゆなり
折から深き山奥より
天地も崩るるばかりなる
大音響の物凄く
火焰の舌を吐きながら
溪間を目がけ降りくる
八岐の大蛇を先頭に
數限りもなき大蛇の群
巖窟を指して進みくる
その光景の凄じさ
心震ひ魂縮まる許りなり
日の出の神は默然と
瞑目靜坐不動の態。

忽然として現はれたる白髮異様の老神、
右手に赤銅の太き杖をつき、左手に玉
を捧げながら、日の出神に向ひ鏡の如き
兩眼を刮と見開き聲をかけ、
何者なればこの神山に斷りも無く
登り來るか。抑も當山は、盤古神王
鹽長彦命の御娘神、鹽治姫神の永久に
鎮まりたまふ神界所定の靈山なり。
一刻も早くこの
場を立ち去れ。早く早く
と【せき】立てたり。

日の出神は、【むつく】とばかり立ち上り、
實に心得ぬ汝が今の言、盤古神王とは彼れ何者ぞ。兇惡無道の常世彦命に擁立
され諸越山に住所を構へ、畏れ多くも國祖國治立命をして窮地に陥れしめたる大
逆無道の根元神、今は僅かにエルサレムの聖地に割據し、螢火のごとき微々たる
光を照らし、漸くにしてその神威を保續し、神政を布くといへども、暴力飽くま
で強き大國彦神の神威に壓迫され、部下の諸神司は日に夜に反覆離散し、神政の
基礎はなはだ危し。さはさりながら、いま汝の述べ立つる盤古大神は、果してエ
ルサレムの城主鹽長彦命の娘神鹽治姫命には非ざるべし。察する所アーメニヤの
野に神都を開く、偽盤古神王ウラル彦神の一味の邪神、この神山に身を遁れ諸神
を偽り、時を待つて天教山を占領し、己れ代つて盤古神王たるに非ざるか。エル
サレムに現はれ給ふ盤古神王は、眞の鹽長彦命なれども、現在は仔細あつて地教
の山に隠れ給ひ、エルサレムに在す盤古神王は、勢力微々たる國治立命の從神紅
葉別命、今は盤古神王と故あつて偽り、天下の形勢を觀望しつつあり。汝が言ふ
ところ事實に全く相反し信憑すべき事實毫末もなし。盤古神王をエルサレムに迎

へ奉り、かつまた地教山に遷し奉りしは斯く申す日の出神なり。この上尚ほ答辨あるか」

と刀の柄に手をかけ、返答次第によつては容赦はならぬと詰め寄れば、白髪異様の老神は、大口開けてカラカラと打笑ひ、

「われは大事忍男神なり。盤古大神が娘鹽治姫命の御隠れ家と言擧げしたるは眞赤な偽り。もはや是非なし。汝に看破されしこの上は、破れかぶれの我が活動、

いまに吠面「かわく」な。汝いかに武勇絶倫にして、たとへ獅子王の勢あるとも、この嶮しき神山にただ一人分け入り、いかに千變萬化の智勇を揮ふも、汝一人の

力におよばむや。すみやかに兜を脱いで我が前に降参するか、ただしは汝が携へもてる鑄刀を以て、潔く割腹するか、返答如何に」

と百雷の一時に轟くごとき怒りの聲、天地も割るるばかりであつた。山中俄に騒がしく、峰の頂谷の底一度に高き関の聲、大蛇や悪鬼を始めとし、異様の怪物雲

霞のごとく一度に押寄せ、咆哮怒號するさま身の毛も竦立つ許りなりけり。日の出神は、少しも屈せず立岩を脊に、刀の柄に手を掛けて、

「たとへ幾億萬の強敵きたるとも、斬つて斬つて斬り捲り、やむを得ざれば屍の山に、血潮の河、全山ことごとく唐紅に染めなさむ、いざ來い勝負」と身構へたり。

大事忍男神と自稱する白髮異様の妖神は、この勢に辟易し巖窟めがけて一目散に逃げ入り、押寄せきたる惡鬼邪神の姿は煙のごとく消え失せて、後には溪間を流るる水の音、松吹く風の響、面を撫でる春の陽氣も美はしかりける。溪間に轉る百鳥の聲は、たちまち天の原雲路を分けて降りくる。天女の奏づる音楽かと疑はるる許りなりける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 外山豊二録)

第二章 三神司邂逅〔三〇二〕

山の頂より涼しき聲聞えて、

世は常闇となり果てて 黄泉國に出でましし
 國の御柱大神の 見立て給ひし八尋殿
 眞木の柱の朽果てて 倒れかかりし神の世を
 起し助くる康代彦 心も堅き眞鐵彦
 天津御國に現はれて 瑞の御魂と諸共に
 この世の元を固めむと 天津誠の御教を
 天と地とに隈もなく 行き足らはして神の世を
 いと平けく安らけく 親の位を保ちつつ
 漂ふ國を彌堅に 締め固めたる大事の
 忍男神の現れまして 神政成就し遂ぐる
 吾らは神の御使ぞ 千代に八千代に日の本の
 礎堅く搗固め 神世の長と成り出でて
 教を四方に敷島の 吾は康代の司なるぞ
 吾は眞鐵の司なるぞ いま汝が前に現はれて

大事忍男神と云は

ウラルの山に蟠る

八岐大蛇の化身にて

今より十年のその昔

この神山に立籠り

瑞穂の國の中國の

神の胞衣をば打破り

この世を亂す深企み

これの深山に隠るひて

數多の邪神を狩集め

再擧を圖る淺間しさ

天の御柱大神は

魔神の企みを悉く

覺らせ玉ひて現世を

千代に八千代に康代彦

堅磐常磐に眞鐵彦

造り固めて浦安の

日出づる國の礎を

照らす日の出の大神ぞ

仕組も深きこの山に

導き玉ふ雄々しさよ

東南西に海原を

控へて聳てるこの山は

難攻不落の鐵壁ぞ

汝が命はこの山に

堅磐常磐に鎮まりて

天津日嗣の皇神の

御位を守り奉れ

吾^{われ}は左^さ守^{もり}の司^{かみ}となり
 大^{やま}和^{としま}島^ね根^ねの神^{かみ}國^{くに}を
 眞^ま鐵^{がね}の彦^{ひこ}の彌^{いや}堅^{かた}に
 彌^{いや}常^{とこ}久^{とは}に搖^{ゆる}ぎなく
 治^{をさ}めてこ^こに立^{たち}岩^{いは}の
 深^{ふか}き企^{たく}み^を打^{うち}破^{やぶ}り
 曲^ま神^がの悉^{しつ}平^{へい}げむ
 康^{やす}代^よは右^う守^{もり}の神^{かみ}となり
 荒^あ浪^{らな}猛^{また}ける浮^う島^{しま}を
 神^{かみ}の稜^{みいづ}威^づに搗^{つき}固^{かた}め
 康^{やす}代^よの彦^{ひこ}の神^{かみ}となり
 浦^{うら}安^{やす}國^{くに}の心^{こころ}安^{やす}く
 千^ち代^よに八^や千^ち代^よに守^{まも}るべし
 朝^あ日^{さひ}の直^{ただ}刺^さす神^{かみ}の山^{やま}
 夕^ゆ日^{ふひ}の直^{ただ}刺^さす神^{かみ}の峰^{みね}
 百^も山^{やま}千^ち谷^{ちだに}のそ^な中^{なか}に
 聳^そり立^たちたる大^{おほ}臺^{だい}が
 原^{はら}の御^{みやま}山^まと永^{とこ}久^{しへ}に
 日^ひの出^で神^{のかみ}と現^{あら}はれて
 天^{てん}教^{けう}地^ち教^{けう}の神^{かみ}々^{がみ}の
 教^{をしへ}を^{まも}る朝^あ日^{さひ}子^この
 日^ひの出^で神^{のかみ}と成^なりませよ
 日^ひの出^で神^{のかみ}と成^なりませよ
 日^ひの出^で神^{のかみ}と成^なりませよ

と歌^{うた}ひながら、巖^{がん}窟^{くつ}の前^{まへ}に立^たてる日^ひの出^で神^{のかみ}の傍^{そば}近^{ちか}く進^{すす}み來^{きた}る。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 高木鐵男録)

第三章 白龍〔三〇三〕

水より清く風よりもいと爽かに、月にも擬ふ明かさ、その顔容は花よりも婉麗なりし姫神は、忽焉として巖窟の前に現はれた。姫神は日の出神を始め二柱の神の前に両手を「つかへ」、いと懇慇に會釋しながら物をも言はず、小暗き巖窟の穴深く進み入りける。油斷ならじと日の出神は雙手を組みて、頭を傾け思案に暮れて暫し言葉もなかりしが、康代彦命は、襟を正し容を更め、雙手を拍ちて天地に祈願を始めた。拍手の聲は大峽小峽に響き渡り、時ならぬ山彦の、彼方此方に手を拍つ有様、百千人の一時に手を拍つ如くなりけり。

三柱の神は、虎穴に入らざれば虎兒を獲ず、怪しき底ひも知れぬこの巖窟を探険し、果して善神の住處か、惡魔の巢窟か、探険せむと先を争ひ進み入る。行けども行けども際限なく、右に折れ左に曲り、或は上り或は下り、漸うにして天井高く横巾廣き巖窟の中に到達したり。

訝かしや、目の届かぬ許りのこの巖窟は、次第に展開して、處々より朦朧たる

光ひかりを現あらはし、殆ほとんど朧おぼろ月夜つきよのごとき光景くわうけいなり。

日ひの出神でのかみは立止たちとどまり、二神にしんにむかひ、

「二柱神ふたはしらかみ、彼方かなたの一方いっぽうを熟視じゆくしされよ」

と示しめし給たまへば、二神にしんは眼めを凝こらし、指ゆびさす方かたを見み、目めを轉てんずれば、莊嚴さうごん譬たとふるに物ものなき宮殿きうでん現あらはれ居ゐたり。二神にしんは思おもはず、

「ヤア」

と驚愕おどろきの聲こゑを張上はりあげながら、前後ぜんご左右さいうに心こころを配くばり、宮殿きうでん目めがけて進すすみゆく。

天あまの岩戸いはとか仙境せんきやうか 右みぎも左ひだりも前まへうしる

岩戸いはとを岩いはにて固かためたる 堅磐かきはと常磐ときはの巖窟がんくつは

石土いはつち毘古びこの穿うがちたる 神かみの造つくりし神仙しんせん境やう

天人てんにん天女てんによの時ときならぬ 來きたりて百ももの音おん樂がくを

奏かなづる許ばかり思おもはれて 心こころも勇いさみ足あし進すすむ

進すすむ三柱みたりの神人かみびとは 漸やつやうここに着つきにける。

近ちかよりて見みれば、またもや堅けんこ固こなる石門いしもん築きつかれあり。而さうして石門いしもんの頂いただきに聳そびえ立たつたる朱塗しゆぬりの宮殿きうでんは、巍ぎぜん然ぜんとして巖窟いはやの天井てんじやうを壓あつするばかりなりき。

日ひの出神でのかみは、金剛こんがうりき力を發揮はつきし、力ちからを籠こめて、岩戸いはとの扉とびらを押開おしひらかむとするに、中なかより何神なにがみの聲こゑとも知しれず、

「汝日なんぢひの出神でのかみ、我々われわれが計略けいりやくに甘々うまうまと乗のせられ、勝かちに乗じやうじてこの巖窟いはやの中なかに忍しのび入いり「おほけ」なくも八頭やつがしら八尾やつをの八岐やまたの大蛇をろちの御住居所おんすまんどころ、迷まよひ來きたりしその果敢はかなさよ。斯かくなる上うへはもはや汝なんぢらは袋ふくろの鼠ねずみ、釜中ふちうの魚うを、締め殺ころさうと、焼やき殺ころさうと、炙あぶつて喰くはうと煮にて食くはうと、こつちの心次第こころしだい、天運てんうん盡つきし憫あはれさよ」

と銅鑼どらこゑ聲こゑを張はりあげてカラカラと笑わらふ。三柱みはしらの神かみは齒はがみをなし、眼尻まなじりを釣つりあげ、刀かたなの柄つかに手てをかけ、四方しはう八方はつぱうに眼まなこを配くばるをりからに東天紅とうてんくれないを潮てうして、四邊あたりは俄にはかに晝ひるの如ごとくなり來きたりぬ。怪あやしき巖窟がんくつの奥深おくふかく、日ひの神かみの現あらはる可べき道理だうりなし、何なに者の變へんげ化げぞと、三柱みはしらは齊ひとしく光ひかりに向むかつて眼まなこを注そそぎける。

眞鐵彦まがねひこは石門いしもんの柱はしらに手てをかけ、金剛こんがうりき力ちからを出だして、門柱もんばしらを力ちから限かぎりに捻ねぢ上げければ、門もんはメキメキと音おとを立てたてその場ばに倒たふれたり。門内もんないには幾百千いくひやくせんとも數かぞへ難がたき大蛇だいじやの

群むれに包つつまれて、嚮さきに現あらはれし美うつくしき女性ぢよせい、端たん然ぜんとして控ひかえみたり。日ひの出での神かみは聲こゑ
を張はり上あげて、

八や岐またの大を蛇ろちのひそみたる 堅かたき岩いはと戸むら肝きもの

眞ま鐵がねの彦ひこの眞ま心こころに 打うち碎くだかれて門もん柱ばしら

ても心こ地ちよく淡あは雪ゆきの 消きゆるが如ごとく除のぞかれぬ

神かみに任まかせし眞ま心こころの 誠まことの力ちからはどこまでも

世よは永とこ遠しへにのび開ひらく 數かずへつきせぬ曲まが神がみの

大を蛇ろちの棲すみ處かを突つき止とめて 誠まことを貫つらぬく三み柱はしらの

劍つるぎの鏑さびとなりひびく さしもに堅けん固この岩いは山やまの

不ふ動どうの岩いはも朽く木ちき如なす 風かぜにもまれ倒たふるごと

誠まことを貫つらぬく劍つるぎ刃はの 十と束つかの劍つるぎに斬きりはふり

石いは土つち毘び古この司かみとなり この世よの曲まがを拂はらはなむ

世よは烏う羽ば玉たまの暗くらくとも 日ひの出での神かみの現あらはれて

八岐の大蛇を寸断し

百の曲神を悉々く

吾言靈になびけなむ

刃向ひ來らむ者あらば

來れよ來れいざ來れ

御國を守る眞心の

劍に刃向ふ敵はなし

この世を救ふ眞心の

神に刃向ふ刃なし

たとへ天地は變るとも

大地は海となるとても

誠の力は世を救ふ

救ひの神の現はれし

日の出神の生魂

康代の彦の幸魂

眞鐵の彦の荒魂

三つの魂と現はれて

神素盞鳴の神となり

大蛇の頭を始めとし

その尾の眷族も悉く

斬りはふりなむ覺悟せよ

打滅さむ覺悟せよ

と大音聲に歌ひ始めたるに、容色端麗なりし曲津神はこの歌に感じてや、忽ち白龍と化し、蜿蜒として、三柱の神の前に現はれ來り、歸順歡迎の意を表し、長き

尻尾しつぽの先さきを前後左右ぜんごさいうに振廻ふりまはしつつ消え失せけり。四邊あたりを見れば今いままで莊嚴さうごんを極めたる宮殿きうでんは跡形あとかたもなく、數十百の大蛇をろちの群むれも何處どこへやら、もとの朧夜おぼろよに四邊あたりは化し去りにける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 松村仙造録)

第四章 石土毘古いはつちびこ(三〇四)

日の出神でのかみは白龍はくりうに向ひ、

「いま汝なんぢが我が前まへに正體しやうたいを現あらはし、歸順きじゆんの意いを表へうしたるは何故なにゆゑぞ。汝なんぢには最もつとも深ふかき謀計ぼうけいあらむ。一旦いつたん歸順きじゆんと見みせかけ、神々かみがみが心こころを緩ゆるませ、その虚きよに乗じやうじて我々われわれを亡ほろぼさむとするか。その手ては喰くはぬぞ、有體ありていに白狀はくじやうせよ」
と三方さんぽうより詰つめ寄よれば、白龍はくりうは兩眼りやうがんに涙なみだを湛たへ、頭かしらを大地だいちに摺すりつけ絶對ぜつたい歸順きじゆんの意いを表へうするにぞ、眞鐵彦まがねひこは長劍ちやうけんを揮ふるつて、電光石火でんくわうせきくわ、白龍はくりうの頭部とうぶを目めがけて斬きり

つくれば、一條の血煙上空に向つて立ち昇るよと見る間に、白雲濛々として起り、咫尺を辨ぜざるに到りぬ。やや暫くありて、濛々たる白雲の中より以前の女性茫然と現はれ來り、聲も微に語るやう、

「妾こそは、天の御柱神の御子にして、石巢比賣と申すものなり。我夫は石土毘古と申し侍る。常磐堅磐の松の世の礎たらしめむとしてわが父大神は、この御山に巖窟を作り我ら夫婦を此處に住はせたまふ。然るにアーメニヤのウラル彦に憑依せる八岐の大蛇は、如何にしてこの仙郷を探りたりけむ、數多の邪神を引き連れ當山に襲ひ來りて我ら夫婦を亡ぼし、自ら代つて當山の主たらむとしたりしを、妾は伴つて彼が味方となり、汝ら救ひの神の來るを待ちつつありしが、今や天運循環してこの喜びに遇ふ」

と初めて語る巖窟の祕密、三柱の神は言葉を揃へて、

「貴女は噂にきく石巢比賣に御座せしや、思はぬところにて不思議の對面、これぞ全く幽界に鎮まりたまふ、野立彦神の御引き合せ、嬉しや忝なや」
と四柱一緒に手を拍つて神言を奏上したりける。この時前方より一人の男慌しく

走りきたり石巢比賣に向ひ兩手をつきながら、

「一大事が出来いたしたり。石土毘古は今や八岐の大蛇のために虐殺されむとしままふ。我はその惨状を見るに忍びず、貴女に報告に参りたり。すぐさま來らせたまへ。」

と云ふより早く、ひらりと體を躲し一目散にもと來し道を走り行く。

ここは巖窟の最も奥深き一室にして、幾百丈とも知れぬ大瀑布が落ちぬたり。瀑布の傍には大小無數の鐘乳石よりなれる自然の石像、數限りなく停立し、かつ一方瀑布の左側には、水晶の母岩針のごとく立ち並び、あたかも氷の刃を立てたる如くなりき。傍の高座には白髪異様の大男、大蛇の變化は、數多の部下を従へ石土毘古を高手小手に縛め、従者共をして石土毘古の身體を氷の刃の上に、どつとばかりに投げつけ、またもや之を頭上に差し上げ、再び投げつけ、終つて大瀑布に投じ、浮み來るを見るや再び刺股をもつて前後左右より瀧壺に押し込み、虐待の限りをつくし、再び大蛇の前に引き据ゑきたつて嚴酷なる訊問を始めたり。

その中の大男の一人は、

「汝は石土毘古ならずや。今まで大臺ヶ原の龍神と侘り我らを籠絡し、日ごろの大望を破壊せむとする惡逆無道の敵なり。表面歸順せし如く見せかけ、汝が妻の石巢比賣と共に我に近く仕へ巖窟の祕密を探り、これを聖地の日の出神に密告せしならむ。すみやかに白状におよべ。この上一言にても詐言をなさば汝を首途の血祭りとなし、妻も同じく虐殺し、次で日の出神を亡ぼし、直に天下に躍り出て葦原の瑞穂の國を我意のごとく蹂躪せむ。汝いかに勇猛なりとも、敵中に陥り如何に焦慮するも衆寡敵せず及ばぬ忠義立をなさむよりは、今より我に降服し、心底より我に従ふか。返答次第によつては汝夫婦の生命は風前の燈火、所存は如何に」

と嚴しく責め問ひけるに、石土毘古は些も恐れず、
「いかに衆寡敵せずとは雖も、我ら夫婦は神伊奘諾命の御子にして當山の主たり。惡魔の張本八岐大蛇の如き素性卑しき惡神に、如何でか降服せむや。汝今より惡を悔い善に移り、我々に従つて神業に参加せざるか。神は一切の神人を愛したまふ。徒に惡神を殺すは、我の欲するところに非ず。もはや今日は日の出神、康代

彦、眞鐵彦の三柱の勇將、巖窟の奥深く進み來れり。我こそ實に鬼に鐵棒なり。
汝惡神の運命はもはや盡きた。鶏卵をもつて巖より堅きわが石土毘古に抵抗する
は、自ら滅びを招くものぞ、汝速かに悔い改めよ』
と手足を縛られながら説き諭せば、八岐大蛇は大に怒り、
『いまは』の際に何の繰言。皆の奴ども彼を突け、彼を打て、斬れよ』
と厳しく命令すれば、

『アイ』

と答へて數多の部下は、各自に柄物を携へ、四方八方より攻圍む。一人の伴の奴
は何思ひけむ、一目散にこの場を駆け出し、行衛をくらしける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 加藤明子録)

第五章

ひのでがだけ
日出ヶ嶽 (三〇五)

日の出神、石巢比賣、その他二神の前に、息【せき】切つて現はれきたり、石土毘古の危急を報じたる男は、舊と龍宮城の從屬なりし豆寅なりける。

豆寅はその名のごとく、豆々しく何れの神人にも、よく仕ふる男なり。善惡正邪の區別なく、その旗色の善し惡しを見て、波のごとく漂ふ輕卒なる【ハシタ】者なり。常に神業の妨害のみ不知不識の間に爲しつつありしが、彼の本心は極めて正直なりける。

大國治立の大神の御代より、この男の行動を看過し給ひしも、彼が心中には一片の惡意なかりし故なり。諺にも「腐り繩にも取り得あり、棒杭も三年経てば肥料となる」との筆法にて、至仁至愛の神は之を寛恕し給ひたるなりき。

この時、豆寅は八岐の大蛇のあまりの暴虐に驚き、石土毘古を虐ぐるを見るに忍びず、驚いて本心に立ちかへり、その妻神の石巢比賣に、この危急を報告したるなり。四柱神は豆寅を先頭に、巖窟の奥深く進みいりけるに、隔ての岩戸は堅く閉され一歩も進むこと能はざりしかば、四柱は止むを得ず、岩戸に耳をすりつけて様子を聞き入るに、邪神の囁く聲、大蛇の唳鳴る聲、石土毘古の怒り聲、手

にとる如く聞えけり。

されど、岩戸は堅く閉ざれて開くこと容易ならざりしが、この時、康代彦は祝詞を奏上し、拳骨を固めて門戸を打ちたたけば、門は意外に脆く左右にサツと開きぬ。日の出神はその勇氣を賞し、我が神名の一字を與へて大戸日別と稱へしめたまひぬ。

日の出神を先頭に四柱は、なほも奥深く進み入りぬ。流石に弱き豆寅も、四柱神の勇神猛將の力を藉り、虎の威を藉る狐のごとく、禿げた頭に捻ぢ鉢巻きをしながら、瓢箪を逆様にしたやうな面を「ヌツ」と突き出し、眞先に進み劫託を竝べ、

「こらやいこらやい八岐大蛇 今日^{けふ}は命^{いのち}の正念場^{しやうねんば}

この方を何と心得る 酒酌^{ささく}め豆寅汗^{まめとらあせ}拭^{ぬぐ}け豆寅^{まめとら}

肩^{かた}もめ豆寅腰^{まめとらこし}うて豆寅^{まめとら} 豆^{まめ}な俺^{おれ}ぢやと思^{おも}ひやがつて

今まで俺^{おれ}を酷^{こきつ}使^{つか}ひ 大事^{だいじ}の大事^{だいじ}の秘密^{ひみつ}まで

サツパリ明あかした【うつけ】者もの 俺おれを何なんぢやと心得こころえる
 日ひの出神でのかみの一いちの乾兒こぶん
 そのまた乾兒こぶんの豆狸まめだぬき
 俺おれの頭あたまを知らしないか
 俺おれの頭あたまにや日ひの出神でのかみが
 八岐やまたの大蛇をろちの偉えらさうに
 鳥とりなき里さとの蝙蝠かummoriか
 豆寅まめとらさまのこの腕うでで
 掴つかみ潰つぶして食くてやるか
 弱よわい者もの虐いぢめの曲津神まがつかみ
 曲津まがつの神かみも一ひとつ掴つかみ
 岩戸いはとの中なかへと逃にげ込こんで
 宿やどつて御座ござるが知しらないか
 目玉めだまも光ひかるがよよく光ひかる
 サアサアサア返答へんたふ返答へんたふ』

と、【シヤチコ】張ばりゐる。

大蛇をろちは噴ふき出いだし、

塵ちりに等ひとしき【ヤクザ】共とも、劫ごう託たくひろぐな』
 と言いふより早はやく、鐵拳てつけんを堅かためてポカリと打うてば、豆寅まめとらは三みつ四よつ中ちゆう空くうを水車みづぐるまの如ごと

く、【くる】くると廻つて、傍の巖窟に腰を打ちつけ、

「イ、イ、イツタイ」

と泣き出す。曲津共は此方を目がけて一齊に詰め寄り來たる。

眞鐵彦は眞先に進み出で、臍下丹田より息を吹きかくなれば、忽ち巖窟の中は狭

霧に包まれ、四邊を辨ぜざるに致りぬ。天地も破るばかりの音聞ゆると共に、

巖窟の屋根は落ちて、たちまち天上の青雲あらはれ來り、大蛇は數多の部下を伴

ひ、黒雲を捲き起し、西方の天を目がけウラルの山指して一目散に逃げ歸りけり。

日の出神は眞鐵彦に天吹男神といふ名を與へたまひ、自分は東方の山巔に登り、

天津日の神に感謝の祝詞を奏上したまひけり。この山を今に日の出ヶ嶽とぞいふ。

大事忍男神は大臺ヶ原の守護神となり、石土毘古、石巢比賣は、この巖窟を住

家とし、國土を永遠に守護し玉ふ事となりける。日の出神は大戸日別、天吹男を

伴ひ、悠々として大臺ヶ原山を下り行く。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 櫻井重雄録)

第六章 空威張（三〇六）

日は西海に没せむとして、海面には金銀の波漂ふ。

港に向つて集まり来る百舟千船の眞帆片帆、眼下に眺めて四五の旅人、坂路に腰うちかけ談に耽り居るあり。

田依彦「あゝ今日も貰ふのかナ」

芳彦「貰ふつて何を。俺らに呉れる奴は何にもありやしない。呉れると云つたら、俺らの行る事が何ンの彼のと吐かして、大屋毘古が怒つて、ちよいちよい拳骨を呉れる位のものだよ」

田依彦「くれると云つたら、日が暮れることだ。それで、【くれる】なら貰ふかと云つたのだイ」

時彦「馬鹿、貴様は何時も水の中で屁を放いた様なことばかり云ひよつて、まるで猿猴が池の月を取る様な考ばかり起して、貰ふ事ばかり考へてゐるが、それほど貰ひたけりや乞食にでもなつたがよいワイ。田依彦と云へば、ちつとは頼

りにもなりさうなものだのに、何時^{いつ}とても頼^{たよ}りない事^{こと}をいふ奴^{やつ}だなあ。便^{たよ}り渚^{なぎさ}の
捨てをぶね 捨^{すて}小舟^{こぶね}、取^とりつく島^{しま}も無^ないわいなだよ、イヒ、、、

田依彦^{たよりひこ} 何吐^{なにぬか}しよる、是^{これ}でも元^{もと}は龍宮城^{りゅうぐうじやう}の立派^{りつぱ}な御方^{おかた}さまだぞ

芳彦^{よしひこ} 玉^{たま}とられ男奴^{をとこめ}が

田依彦^{たよりひこ} 貴様^{きさま}はなんだい。八尋殿^{やひろどの}の酒宴^{さかもり}に竹熊^{たけくま}の計略^{けいりやく}にかかりよつて、負^まけぬ氣^き
を出^だして、玉^{たま}を奪^とられよつた張本人^{ちやうほんにん}ぢやないか

時彦^{ときひこ} もー玉^{たま}の談^{はなし}は止^よさうかい

田依彦^{たよりひこ} 時彦^{ときひこ}、貴様^{きさま}はア、メニヤの野^ので古狸^{ふるたぬき}に「つままれ」よつてナ

時彦^{ときひこ} もー云^いふな、玉^{たま}の談^{はなし}はこれ退^きりだ。もう玉^{たま}切^ぎれだよ

芳彦^{よしひこ} 「たま」らぬだらう

時彦^{ときひこ} フン、「たま」つたものぢや無^ない。「たま」たま持^もちは持^もちながら

田依彦^{たよりひこ} 冗談^{ぜうだん}ぢやないぞ。それよりもこのごろ大^{おほ}事^{こと}忍^{おし}男^をさまの御布令^{おふれ}が廻^{まは}つたが、

聞^きいてるかイ

時彦^{ときひこ} 何^なンぞ大^{だい}事^じが起^{おこ}つたのかい

田依彦「いや、神さまの名だ。時彦の欺されよつたアーメニヤの野で、【くれる】彦とか【くれぬ】彦とか、田依彦の好きな神さまが現はれよつてな「飲めよ騒げよ一寸先や闇だ」なんて判つた事を云ひよるぢやないか」

芳彦「さうだ、よう判つたことをいふね。「萬劫末代この玉は、命に代へても渡しやせぬ、五六七神政の曉までは、たとひ火の中水の底」なんて、氣張つてをつた時彦でも玉を奪られるのだから、ほんとに一寸先は闇雲だ。闇雲といつたら此頃の大臺ヶ原の神さまぢやないか。毎日日彼方の人を奪り、此方の人間を奪り、甲も喰はれた乙も吞まれたと、喰はれたり、吞まれたり、引張られたりする噂ばかりだ。ぐづぐづして居ると玉どころの騒ぎぢやない、命までも奪られて了ふぞ。それで昔から無い大事、命は惜いなり、そこで大事忍男と云ふのだよ。どえらい悪神ぢやて」

玉彦「馬鹿云へ。大事忍男さまと云ふのは、それは何んな大事變があつても、大艱難が出てきても、大臺ヶ原の山のように泰然自若として能く忍び、世界のために盡してくださいさると云ふことだよ。お前たちの忍ぶと云ふことは、自分より強い者

が出てきて、怖さに堪へ忍ぶのであつて、實際は屈するのだ。吾々はそんな忍びとは違ふ。大事忍男さまの大御心を心として、いかなる艱難辛苦をも能く堪へ忍びて、一言の小言もおつしやらぬのだよ」

時彦「ハ、ア、それで嬢に呆けよつて、玉を奪られて、屈するのでなくつて能く忍ぶのだな、偉いものだ。併しこのごろ日の出神とか云ふ、偉い宣傳使がこの邊を廻つてをるぢやないか。なんでも大臺ヶ原の大事忍男さまを亡ぼすと云つて、ただ單獨山を登つて行つたさうぢや。どうせ、飛んで火に入る夏の蟲がなア。ともかく、時の天下に従へ。時節にや叶はぬ。なんぼ力の強い神だつて大勢と一人では叶はない。お負に大きな巖窟の中に構へてをる魔神さまに向つて戦つたところ、勝敗は見え透いてゐる。どれどれ早く歸のかい」

芳彦「おい、田依彦、貴様とこの姉婿の豆寅は、たうとう巖窟の中へ引張られて行つたぢやないか、きつと今頃にや喰はれて了うて居るぜ。引張られよつてから殆ど十年になるが、何の音沙汰も無いぢやないか」

田依彦「音信しやうにも、言傳しやうにも巖窟の中では仕方がない。それよりも

早はやう歸かへつて草くさ香か姫ひめにな、機き嫌げんでもとつてやるがよからう。それもう、そこらが暗くらくなつて來きたぞ、歸いのう歸いのう』
と立たち上あがらむとする處ところへ、豆まめ寅とらは日ひの出で神かみ、大おほ戸と日び別わけ、天あま吹の男ふぎをの三み柱はしらと共ともに宣せん傳でん歌かを歌うたひながら、現あらはれ來きたり。

豆まめ寅とらは勢いきほひよく肩かたを聳そびやかしながら、

☐ 日ひは黄たそ昏がれとなりぬれど

光ひかり眩まはゆき禿はげ頭あたま

豆まめ寅とらさまが現あらはれて

日ひの出で神かみの御ご家けらい來いと

なつたる今日けふの嬉うれしさは

死しンでも生いきても忘わすられぬ

千せん年ねん萬まん年ねんたつたとて

この嬉うれしさが忘わすられよか

巖いは窟やの中なかを逃のがれ出でて

漸やうく此こ處こへ歸かへつてくるは來きたもの

一いつぺん草くさ香かの顔かほ見みたい

十じふ年ねん振ぶりでさぞやさぞ

女にょ房ぼうの草くさ香かは喜よろこんで

やにはに飛とびつき獅しが噛み付つき

【まめ】であつたか豆まめ寅とらさま

嬉うれし嬉うれしと泣なくである

それに付けても何時までも 音信の無いは田依彦

玉を抜かれた玉彦や 死んでも【よし】の芳彦や

胸も【とき】とき時彦を 【けなり】がらして【いちや】ついて

一つ吃驚させてやる あゝ面白い面白い

面白狸の腹鼓 山が裂けよが倒れよが

びくとも致さぬ豆寅の 一つ度胸を見せてやれ

やれやれ嬉しい嬉しい

と手を振り足を奇妙に踊らせながら、この坂路を下りきたる。

路傍に憩へる田依彦以下の四人は、暗がりくらに光る豆寅まめとらの頭あたまに向つて、傍かたはらの木きの枝えだを取つて光ひかりを目當めあてに、【ぴしやり】と投げつけたれば、豆寅まめとらは「アツ」と叫さけんでその場に仆たふれ、

「でゝゝ出た出た、ばゝ化物ばけもの。ひゝゝ日ひの出神でのかみ、おゝお助けお助け」

と聲こゑをかぎりに泣なき叫さけぶこそ可笑をかしけれ。

第七章 山火事〔三〇七〕

このとき暗中あんちゆうに聲こゑあり、

☐ 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立別たてわける

身み魂たまを磨みがけよ立替たてかへよ

身みの行状をこなひを立直たてなほせ

この世よを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

ただ何事なにごとも人ひとの世よは

直日なほひに見直みなほせ聞直ききなほせ

身みの過あやまちは宣のり直なほせ

と歌うたひながら豆寅まめとらに構かまはず、ドシドシ進すすみ行ゆく。豆寅まめとらは、

モシモシ日の出神様、大戸日別様、天吹男様、しばらく待つて下さいナ。腰が
抜けました、頭を割られました。助けて助けて
と嘸鳴りゐる。

宣傳使の聲はだんだん遠くなり行くのみなりき。

豆寅奴が家を出て

草香の姫は喜んで

嬢が表に現はれて

御膳を据ゑて玉彦に

目玉を剥いて立替へよ

身の行ひはさつぱりと

善から悪に立替へた

この世を造つた肝心の

目玉も光る鬼神は

夜でも光る豆寅の

頭を【びつしやり】と打叩き 日の出神は【さつ】さつと

跡白浪と走り行く なにほど頭は光つても

心は暗の豆狸 狐狸に魅まれて

巖窟の内へと引込まれ 目から火の出神が出て

暗に倒れた腰抜けよ」

と歌ひ出したる者あり。豆寅はその聲に何處ともなく聞き覚えがあるので、

「やい、暗がりには俺の頭を【しばき】よつて、目から火を出させよつて、びつく

りさして腰を抜かした奴は誰だい」

と呼べば、暗から、

「腰を抜かしたのは、豆寅ぢやないか」

と叫ぶ者あり。豆寅は大地に「へたばり」ながら、

「何だか聞き覚えのある聲の様だが、俺の嬢が、玉彦の奴に御膳を据ゑたとか云

うたなあ」

「善は急げぢや、善因善果、悪が變じて善となり善が變じて悪となる。どちらも

玉の磨き合ひの玉彦さまだぞ」

時彦「馬鹿ッ」

玉彦「馬鹿つて何んだ。玉奪られ奴が」

ときひこ 時彦「玉取られとは貴様のことぢや、嬪取り奴が。貴様の嬪に密告しようか」
たまひこ 玉彦「まあ待て、同じ穴の狐、貴様も密告するぞ」

たよりひこ 田依彦は火打袋より火打石火口を取出し、「かちかち」と打はじめ傍の木の葉
かれえだ 枯枝を暗がりには掻き集めながら火を点けたれば、火は炎々として燃え上り一同の
かほ 顔は始めて明るくなりし。折からの烈風に煽られて、見る見る火は四方に燃えひ
ろがり、轟々と音を立てて忽ち四邊は晝のごとく明るくなりぬ。火は次第に燃え擴
がり、全山を殆ど焼き盡さむ勢となり來たりたれば、日の出神一行にはかに四
り 邊の明くなりしに驚き、後振り返り見れば、全山ほとんど火の山と化しある。三柱
いはつちびこ は石土毘古、石巢比賣の消息を氣遣ひ、一目散に後に引返し、急いで山を登り來
たりぬ。

このとき山上目がけて登りくる宣傳使ありき。此は黄金山の三五教を天下に宣
傳する、國彦の三男梅ヶ香彦なりき。全山ほとんど焼きつくして已に立岩の麓に
燃え移らむとする時しも、梅ヶ香彦は満身の力を籠め、伊吹戸主神に祈願を凝ら
し、燃え擴がる焰に向つて息吹かけたるに、風はたちまち方向を變じ、山上より

暴風吹き来りて、瞬く間にぴつたりと消えうせにけり。

時しも夜は漸く明け放れ、山の八合目以下は全部灰の山と變りぬ。山麓にある

神人の住家は全部焼け落ちければ、山麓の住民は何人の所爲ぞと四方八方に手配

りをなし、山の谷々を隈なく尋ね廻りみたりける。豆寅、田依彦、時彦、芳彦、

玉彦は餘りの大火に膽を潰し腰を抜かし、一と所に首を鳩めて慄ひ戦きみたり。

住家を失ひし數多の人々はこの場に現はれ来り、口々に、

「この山を焼きよつたのは大方貴様ならむ。元の通りに建てて返さばよし、さ

なくば汝等を縛つて歸り、酋長の前にて火炙りの刑に處せむ」

と怒りの顔色物凄く唝鳴り立てたるに、豆寅は周章てて、

「わゝゝゝ、わしは、ちゝゝゝとゝゝゝしゝゝゝ」

大勢の中よりは、

「この瓢箪」

と云ひながら携へ持てる棒千切をもつてポンと叩けば、豆寅は聲を揚げて泣き出

し、右手の二の腕にて兩眼を擦り乍ら、

「今日は如何なる悪日ぞ、折角日の出神に助けられ、早く歸つて戀しき妻の草香姫に取付き、互に抱いて泣かむものと思ふ間もなく、今此處で泣いて死ぬとは情ない。日の出神に助けられ、今度は火の出に殺されるか。草香姫【いまは】の際に唯一目、やさしい顔を見せて呉れ。死ぬるこの身は厭はぬが、後に残りし草香姫、これを聞いたたら泣くであらう。思へば悲しい憐らしい」

群衆の中より、

「エイ、【めそめそ】と吼面【かわき】よつて、そんな事は聞き度は無い。誰が火を出したのか、確かに返答せ」

四人は黙然として俯向き居るのみ。豆寅は、

「たゝゝゝ確かに田依彦が致しました」

と云はむとするや、田依彦は、

「こら馬鹿ッ」

と云ひながら、またもや豆寅の頭を棒千切を以て【がん】と叩く。このとき日の出神は山上より降り来りこの態を見て、

「やあ豆寅か、頭は如何した。何を泣いて居る」

豆寅は地獄で佛に逢うたる心地して、

「まあまあ、よう来て下さいました」

と立上り、

「やいら田依彦、時彦、芳彦、玉彦、その外みな奴らよつく聞け。この方は勿體なくも日の出神の一の御家來、そのまた家來のその家來、もうちつと下のその家來、豆寅彦さまだぞ、無禮を【ひろい】だその罪容赦はならぬ」

と章魚の跳る様な姿になつて肩肱怒らしにはかに元氣づく。衆人はこの見幕に或は恐れ或は噴き出し、無言のまま言ひ合した様に大地に平伏したり。これは日の出神をはじめ梅ヶ香彦、大戸日別、天吹男の威嚴に何んとなく打たれたる故なりき。豆寅は自分に降伏したものと思ひ、ますます鼻息荒く、

「やい田依彦、貴様は最前何と云うた。玉彦が俺の留守中に、俺の嬢をちよるまかしたと吐かしただらう、本當か白状いたせ。貴様は嬢の兄弟ぢやと思つて、許してやりたいは山々なれど、神の道には親子兄弟他人の區別はない。やい玉彦返

答はとうだ」

と威張りだす。日の出神は又もや宣傳歌を歌ひながらこの場を見捨てて行かむとす。豆寅は、

「もしもし家來を捨てて何處に御越し遊ばす。夫れはあんまり胴欲ぢや」と袖に縋つて泣き付く。

日の出神は梅ヶ香彦に、風木津別之忍男と名を與へてその功勞を賞し、豆寅以下の下四人を山麓の酋長なる大屋毘古の身許に預けて、焼け失せたる人々の住家を新に造らしめたり。豆寅はここに久々能智といふ名を與へられける。日の出神は山を下り海を渡り四柱ここに袖を分ちて、東西南北に何處ともなく、宣傳使として進み行きける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 高木鐵男録)

(序) 第七章 昭和一〇・二・二一 於島根縣地恩郷 王仁校正)

第二篇 白雪郷

第八章 羽衣の松〔三〇八〕

日の出神を乗せたる大船は、熊野の浦を漕ぎ出で、折から吹き來る順風に眞帆を揚げ乍ら、東に向つて進ませたまへり。

さしもに高き天教の九山八海の山は、白扇を逆様に懸けたる如く東海の波に、その影を映す長閑さ。夜を日について進み來る浪路も遙かに遠江。忽ち浪は天上に向つて立ち上り、船は木の葉の如くに漂ふ危ふさ。一同の乗客は、叶はぬ時の神頼み、各自に手を拍ち大海原の神に向つて、厚き祈願を駿河灣。天教山は何時しか雲に包まれにけり。

この難風を避けむとて、向ふに三保の松原や、天の羽衣の老木の松を目標に、船は漸う岸に着きたり。一行の顔はあたかも死人のごとく色蒼白めて、立つ勇氣

さへも無くなりてみたり。

日の出神は、眞先に上陸し、續いて人々は生命からがら白砂青松のこの島に辿り着き、ほつと息を吐きけるが、風はますます烈しく、浪は猛り狂ひて羽衣の松は、ほとんど水に没せむとするの勢なりける。

この島に救ひ上げられたる日の出神をはじめ、數多の人々は島の小高き處に駆け登り、海の凧ぎ行くを待ちつつありし時しも微妙の音楽天上より聞えて、馨しき色々の花を降らせ宛然花莖を布き詰めたる如くなりける。

暫時ありて男女の二神は、雲に乗つてこの場に降り來り、日の出神に會釋しながら流暢なる聲張り上げて、天女の舞の歌を舞ひ始めたりける。

これや此の世界にほまれ駿河富士 よしや此の世は愛鷹の

山より高く曲事の 積れば積れ天教の

山に坐します木の花姫の 神の命の御光に

世は照妙の薄衣 天の羽衣纏ひつつ

瑞穂の國は千代八千代 芽出度き國と舞ひ納め

治めて清き神の國 村雲四方に塞ぐとも

赤き誠の心もて 誠の道を麻柱つ

誠を通せ誠ある 神の日の出の宣傳使

荒風猛り吼ゆるとも 浪は險しく立つとも

わが日の本は神の國 木の花姫の鎮る限り

世は永久に心安き 神世を三保の松原や

松も千歳の色添ひて 緑添ひなす三保津彦

三保津の姫は今ここに 現はれ出でて汝が前途

清く守らむ沫那岐の 神の命や沫那美の

神の命の守ります 大海原も安らげく

常世の國に渡りませ ウラルの山に現はれし

魔神は今に常世國 日の出ヶ嶽を立出でて

再び御國を襲ひ來る 今や經綸の最中なり

今や經綸の最中なり
神の守りにすすくと
早や出でませよ宣傳使

沫那岐彦や沫那美の
早や出でませよ宣傳使

と聲も涼しく歌ひ、中空に舞ひながら天教山に向つて、その姿を隠したまひける。
この沫那岐、沫那美の二神は、いま現はれたる三保津彦、三保津姫の分靈なり。
是より日の出神は、種々の苦しみに堪へ、遂に再び常世の國に渡りける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 外山豊二録)

第九章 弱腰男〔三〇九〕

日の出神はそれより天教山に登り、青木ヶ原の木の花姫宮に致りて今までの神
教宣傳の経過を詳細に物語りしが、木の花姫は深く感賞し、再び常世國に出發を

命じたまひける。日の出神は撞の御柱の神および天の御柱の神に謁し、種々の神勅を蒙り、欣然として再び宣傳の途に就きにける。

田子の浦より今や常世國に向つて出帆せむとする常世丸の船客となりぬ。船中には數多の人々、あるひは唐國へ、あるひは常世國へ通ふべく滿乘しあたり。波は靜かに風凪ぎわたる海原を西へ西へと進み行く。靜けき海に漂ふこと數十日、遂に青雲山のある月氏國の濱邊に到着し、此處に一同は上陸して船路の疲れを休めける。この船は風の吹き廻しの都合により一ヶ月ばかりこの港に碇泊するの止むを得ざるに立ちいたりぬ。日の出神は無聊に苦しみ山深く分け入りて此地に宣傳を試みける。

此處は青雲山の山つづき、白雪山といふ小高き山の麓にして、山野は青々と種々の草木の花は所狭きまでに咲き亂れ居り、胡蝶の花に戯る姿、鳥の梢に飛び交ひて唄ふ聲、實に長閑さの限りなり。日の出神は長き日を終日宣傳歌を歌ひ、遂に草臥れて眠氣を催し、路傍の草花の中に身を横へ腕を枕にしながら、淡き雲の散り行くを眺めつつありぬ。ここは白雪山の山口なりき。かかる所へ二三の里人と

見えて息を喘ませながら走り來り、路傍に横臥せる宣傳使の姿を見て兩手をひらげ大口を開け、

「アツ」

とばかりに仰天し、その場に打ち倒れける。日の出神は怪しみて、

「汝なに故なれば、わが姿を見て驚くか」

と尋ぬるに、

甲「貴下はウラ、ウラ、ウラル彦の、カ、神様の御家來の宣傳使様ではありませぬか。どゝどゝどうぞ此場は見逃して下さいませ。私は何も彼も包み隠さず申上ります。先つ頃より此村に三五教の宣傳使祝姫と云ふ、それはそれは美しい女性の宣傳使が現はれて、色々のことを教へて呉れまして、わが里の酋長をはじめ、老若男女は一人も残らずこの山奥の岩神の前に寄り集まり、その女性を中に、種々の結構な話を承はりつつありました。酋長夫婦はすっかりその言葉に感心いたして白雪郷は一人も残らず三五教の神様を祭る事となりました。今日もその祭を行つて居ります所へ、ウラル彦の宣傳使が現はれ、その女性を掠奪つて山の奥へ連

れて行つてしまひ、私らの酋長夫婦は大木に縛りつけられて了ひました。さうして逃げるなら逃げて見よ、皆の奴共、この山はウラル彦の宣傳使が取り巻いてをるから、今この場ですつかり三五教を捨てて、大中教の神を祭ればよし、違背に及ばば、酋長を始め皆の奴を亡ぼして了うと、「いかい」眼を剥いて吠鳴られました。私はやうやくに虎口を逃れて此處まで來ることは來ましたが、たうとう大中教の宣傳使様に見つけられました。どうぞ命ばかりはお助け下さい」と立ち上り、と涙を流して泣き入るを、日の出神は驚いて、「むつく」と立ち上り、
「我は三五教の宣傳使なり。これより汝らの里人を救ひ與へむ。疾く案内せよ」と云ひつつ再び宣傳歌を歌ひ始めたるに、甲乙丙の三人は俄に元氣づき、
乙「サアもう大丈夫だ。それだから酋長様が、どんな事があつてもこの神様に離れな、叶はぬ時は「きつと」助けて下さると仰有つたぢやないか。それに何だよ貴様は最前も最前とて、肝腎の宣傳使は引攪はれてゆく、信仰の強い酋長夫婦は木に縛られて居つても、三五教の神様は助けて呉れやしない、やはり長いものに捲かれよと云ふことがある、今までの信仰を「サラリ」と止めて、大中教に入

らうぢやないかと、たつた今泣き面【かわいい】て【ほざき】よつた癖に、今の元氣たら何のことだい」

丙「そりや貴様のことだよ、現にいま貴様さう云つたぢやないか。宣傳使様に告げられたら耐らぬと思ひよつて、俺が云つたやうに宣傳使様に思はせやうたつて、そんなことは生神様ぢや、よく御存じだぞ」

乙「先ずれば人を制す。貴様が喋らぬ間に俺の方から先鞭をつけたのだ」

甲は低い聲で、

「オイ貴様ら、さう喜んだつて先方は多勢、此方は一人の宣傳使だ。何程強いかつて高が知れて居る。この宣傳使も女性のやうに【ふん】縛られて、山奥に連れて行かれる連中であらうも知れぬぜ。あまり喜ぶな考へものだぞ」

乙丙溜息を吐きながら、

「さうかなあ、困つたものだよ。しかしお手際をまだ拜見せないのだから、そつと見えかくれに跟着いて行つたらどうだい」

日の出神は、

「オイ、三人の者、何を分らぬ事をいつて居るか。早く先に立つて案内をせよ。」

心が焦く

甲 「貴神、大丈夫ですか。それはそれは【オトロ】しい奴が澤山をりますぜ」

と指をつき出しながら、

「この山をツーとかう行つてかう曲つて、又かう曲つて、かう、かう、かう、ツー

とお出なさいましたら其處に皆が縛られて頭を【はら】れたり、突かれたり、猿

が責められたやうに、キヤツキヤツ云うて居ます。その聲を便りにとつとお越

しやす。左様なら」

と尻引きからげ逃げむとする。日の出神は、

「オイ待て」

と云ひながら襟髪を【むんづ】と掴みける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 加藤明子録)

第一〇章 附合信神〔三一〇〕

日の出神は、ビクビク顫ふ三人を先頭に立て山深く進みけるが、先頭に立てる甲は忽ち「キヤツ」と一聲、その場に仆れたり。

乙は驚いて抱き起さうとするを、甲は眼を塞ぎ首を左右に振りながら、

「おい最う【こらへ】てくれ、ドエライこつちや。今それ、健寅彦の宣傳使が仰

山乾兒を連れて此方へ来るぢやないか。それッ」

と目を塞ぎながら前方を指さしてブルブル顫へて言ふ。

「何にも來やあせぬぢやないか。猫一匹居りはせぬのに、貴様何だい、大方幻で

も見たのだらう」

「此奴は何時もビツクリ蟲を腹の中に【やつと】飼うとるからな。此奴と歩くと

俺までが顫ひ出すわい。こんな腰拔は歸なしてやつた方がよからう。モシモシ宣

傳使様、こんな奴を連れて行つては足手纏ひになつて大變な御迷惑をかけるかも

知れませぬ。我々二人がお供をしますから、此奴はもう歸してやつて下さい。お

い、もう除隊だ。勝手に歸つて留守の家で鼠と一緒に仲ようせい。貴様の嬢アは今ウラル彦の宣傳使に喰はれて了つてるかも知れぬぞ。早う歸つて線香でも立てやれ。俺は斯ういふものの獨身者だから、脛一本、ラマ一本だ。しかし貴様や甲になると、さういふ譯には行かぬから氣の毒なものだ。それだから、三五教の宣傳使様が荷物を輕うして置けと仰有つたのだよ」

丙「馬鹿な事を言ふない。貴様だつてあのお照を嬢アにすると言つたぢやないか。そのお照は今ごろ宣傳使に殺されとるぞ。あまり大きな聲で太平樂を言ふない」

「おい、好い加減に話を切り止めて案内せぬか」

「ハイハイ、今案内いたします」

と拳を握り人指し指をニユーツと出して、

「モーシ、宣傳使様、如何にも斯うにも足が向ふへ出ませぬ。かう行つて、かう曲つて、かう寄つてツーとお出なさいませ」

「そんなことを言つたつて分るか、この深山が」

「俺だけ、それなら堪へて呉れるか。家まで送つてくれ。丙は俺の後について乙

は前まへになつて俺おれの所ところまで送おくつた上うへで、宣傳使せんでんし様のお供ともをしてくれ』

『コラコラそんな悠長いうちやうな事ことではない。貴様きさまはそんな弱よわいこと何どうするのか。苟いざしくも三五教あななひけつの教をしへを聞きいた者もののする所作しよさか』

『ハイ、私わたくしは何なんの事ことぢやかテンと分わかりませぬが、酋長しうちやう様が拜をがめと仰おつしや有あるので拜をがまぬと叱しかられますからなア。邪魔じやまくさいけれどイヤイヤ祭まつつとりますので』

『この郷さとの奴やつは皆みなそんな信しん仰かうか』

『ハイ』

と言いひかけて、首くびを振ふり、

『イエイエそれは私わたくし一人ひとりのことです。他たの奴やつ共どもは何どんな信しん仰かう有あつとるかテンと分わかりませぬ。何なんだか知しれませぬが、【しぶとい】信しん仰かうを持もつとります。ウラル彦ひこの宣傳使せんでんしにエライ目めに遇あはされても信しん仰かうは變かへぬといつて氣張きばつてます』

『たとへ殺ころされてもこの神様かみさまには離はなれぬと言いつてますぜ。命いのち知らずですなア。ほんとに馬鹿ばかですなア。私わたくしらの思おもふのには、敵かなはぬ時ときに助たすけて貰もらうための信しん仰かうなの殺ころされてまで信しん仰かうする馬鹿ばかがあるものか。トンと合が点てんが行ゆかぬがなア』

「何ッ、殺されても信仰を變へぬというか。エライ奴だ。見込みがある」

「へー殺されても信仰するつて幽霊になつて信神するのですか。ケタイな神さま

ですなア」

日の出神は大喝一聲、

「馬鹿！」

と言つたその聲に三人は驚いて、兩手をひろげ口を開けて、思はず知らず、二三尺飛び上る。日の出神はこれらの弱蟲に目もくれず、ドシドシと又もや宣傳歌を歌ひながら、山奥さして進み行く。

（大正一一・一・三〇 舊一・三 櫻井重雄録）

第一章 助け船〔三一〕

岩神の祠の前に健寅彦と云ふ大中教の宣傳使は、數多の従者と共に酋長夫婦を

木に縛りつけ、右手に劍を持ち左手に徳利を握りながら、一口呑んでは、
「呑めよ騒げよ一寸先や暗よ、暗の後には月が出る。」

おい酋長、貴様は如何しても三五教を思ひ切らぬか。左様な邪教を貴様が率先して信仰をいたすものだから、白雪郷の奴等は残らず呆けるのだ。さあ、俺の歌を唄つてこの酒を喰らへ。結構な醍醐味ぢやぞ。之を呑めば生命が延びる、氣分が晴れ晴れする、大中教がこんな結構な酒を吞まして、その上に面白い歌を唄うて遊べと云ふのに、貴様は何が氣に入らぬか。夫が嫌ひなら此劍の尖で突いて突いて突き捲り、「なぶり」殺しにしてやらうか。おい、よく考へて見る、結構な酒を喰らつて鼻歌唄つて、この世を天國淨土のやうにして勇みて暮すがよいか。肩の凝るやうな苦しい歌を唄つて、甘い酒も好う吞まず、甘い物も碌に食はず、善と悪とを立別けるなどと仕様も無い。ちと考へてみよ。こんな事は子供でも善悪が解りさうなものだ。斯うして縛りつけた上は、活さうと殺さうとこの健寅彦の宣傳使様の手の裡にあるのだ。返答聞かう」

と左の手に酒を満たした徳利を持ち、酋長の唇の邊に押付け、一方には鋭き劍を

眼の前まへにひらつかせ乍なら、返答へんたふ如何いかにと待ち構かまへ居ゐる。

酋長しうちやう夫婦ふうふは目めを閉とぢ、口くちを結むすびて聞きえぬふりを爲なし、心中しんちゆうに深ふかく野立のたち彦命ひこのみこと、野立のたち姫命ひめのみことの救すくひを祈願きぐわんし居ゐたり。この時とき向むかふの方ほうより木靈こだまを響ひびかせ乍なら、

「神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立別たてわける」

との宣傳歌せんでんかを歌うたつて進すすみ來くるものあり。健寅たけとら彦ひこはこの聲こゑを聞きくと共ともに、手てに持もてる劍つるぎと徳利とくりを思おもはずバツタリと落おとし、頭あたまを拘かかへ顔かほを擡しかめてその場ばに縮ちぢみけり。健寅たけとら彦ひこの從者じゆじや共どもは、同おなじく目めを閉とぢ頭あたまを拘かかへて大地だいちに蹲踞しゃがみ震ふるひ居ゐる。

この場ばに悠々いういうとして現あらはれたる宣傳使せんでんしは、擬まがふ方かた無なき日ひの出神でのかみなり。日ひの出神でのかみは大樹だいじゆに縛しばりつけられたる酋長しうちやう夫婦ふうふを始はじめ、その他たの人々ひとびとの縛いましめを解ときしに、健寅たけとら彦ひこの一派いっぱは息いきを殺ころして縮ちぢみ居ゐるのみ。日ひの出神でのかみは聲張こゑはり上あげて宣傳歌せんでんかを歌うたふ。酋長しうち夫婦ふうふもつづいて宣傳歌せんでんかを頻しきりに歌うたひはじむる。この場ばにありし白雪郷はくせつきやうの老若男らうにやくなん女にょは、またもや一齊いっせいに宣傳歌せんでんかを唱となへ出だしたるに、健寅たけとら彦ひこは堪たまり兼かね鼠ねずみの如ごとくなつ

て數多の從者と共に、山頂目蒐けて【こそ】こそと身を隠しける。

日の出神は酋長夫婦の固き信仰を激賞し、これに面那藝神、面那美神の名を與へたまふ。面那藝神は、妻の面那美神に白雪郷を守らしめ、自ら宣傳使となつて天下に道を弘めたりける。

この時谷の奥に當つて騒々しき物音聞えたり。酋長面那藝神は、日の出神に向ひ、三五教の女宣傳使祝姫は彼らの一味に捕はれ、山奥に誘ひ行かれし事を涙と共に物語れば、日の出神は聞くより早く、二人を後に隨へ、山奥指して足早に進み行く。

後に残りし白雪郷の老若男女は、口々に日の出神の救援を喜び合ひける。

甲「やつぱり信心はせならぬものだ。俺はもう逆も此奴は叶はぬと思つたので、一杯呑まされてやらうかと思つた。さあ、さうすると喉の蟲奴が御苦勞さま、御苦勞さまと唸りよつてな。如何にも斯うにも堪つたものぢやない。けれども肝腎の酋長が、彼の甘さうな酒も吞まずに、殺されても信神は止めぬと仰有るのだもの、俺一人が裏切る譯にはゆかず、どうして好からうと思つてゐたが、さ

あ今九分九厘と云ふ所で女宣傳使の仰有つたやうに結構な神さまが出て救けて下さつたのは、有り難いのう」

乙「あゝ、俺も結構だつたが、しかし八に鹿に六はどこへ行きよつたのだらうか。白雪郷の掟として生るも死ぬるも酋長様と一緒にせなくてはならぬのに、彼奴め中途で飛び出しよつて仕様の無い奴だ。孰れ見せしめに三人の奴らは、酋長からどえらい罰を被るかも知れないぜ」

丙「いや、そんな心配は要らぬよ。三五教は大慈大悲の教だから何事も「直日に見直せ、聞直せ、身の過ちは詔り直せ」といふ信條がある。彼れ丈の信仰の強い酋長さまは、そんなことの判らぬ御方ぢやない。況して日の出神様の御弟子となつて面那藝とか、浦風とか云ふ名まで頂かつしやつたぢやないか。エーン」

甲「浦風なんて、そんな恐ろしい名は御免だ。ウラル彦の名を思ひだすよ。「うら」の所の難儀になるやうな、そんな名は替へて欲しいものだなア」

丁「浦風ぢやない。好う聞いて置かぬかい二度も三度も仰有つたじやらう。この方の酋長さまは面那藝の神さま、奥様は面那美の神さまとなられたのだよ」

甲 「そらまあ、何といふ辛い難儀な名を貰はつしやつたものだナア。奥さまも奥さまぢや、辛い涙の出るやうな名を貰つて、勇むで行かつしやつた。なんぼ宣傳使さまだつて、そんな名は、俺らは御免だよ」

乙 「おい、心配するな。貴様らには滅多にそんな名は下さらぬワ。面那藝といふ事はなあ、貴様らが皆難儀な面をさらしよつて、もうウラル彦の宣傳使の方につかうかと云つて、涙を流して吠面かわいてみたのを、それをば神さまに祈つて助けて下さつた御名だ。それで面那藝、面那美と申上げるのだよ」

斯かる所へ「つま」らぬ顔をして恐々ながら、八と六と鹿とは現はれ來たりければ、一同は、

「やい、腰ぬけ野郎」
と口々に嘍鳴りける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 外山豊二録)

第一二章 熟々盡〔三一二〕

八「本當にだよ、たうとう腰抜かしよつたナ。併しながら俺が腰を抜かしたお蔭で、貴様たちは助かり、【コシ】て安心して居れるのだよ。【コシ】コシ云ふない、腰拔野郎奴」

鹿「〔シカ〕し、健寅とか云ふドエライ目を剥いた宣傳使は何處へ逃げたのかい、酋長さまは居らつしやらぬじやないか」

甲「只今ナ、天から日の大神様とか日の入の神様とかいふお方がヒヨツクリコと現れて三五教の宣傳歌を歌はれたのだ。さうするとウラル彦の乾兒の健寅彦奴が、あの大きな目をサツパリ閉ぎよつて、【デカイ】頭を拘へて縮こまつて了つて、終ひには野鼠のやうに小鼠と一緒に山の奥へ逃げて行きよつたよ。そして酋長さま夫婦に日の暮とやらの神様が、ウラナギとかウラナミとかいふ名を下さつて酋長さま夫婦は喜んで、この山へドンドンお出で遊ばしたのだワ」

鹿「何ツ！、【ウラ】那藝？ ウラル彦の爲に【ナギ】な目に會つたのでウラナ

ギといふのかい」

甲「知らぬわい」

乙「知らぬなら言うてやらうか。【ウラナギ】ぢやない、【ツラナギ】ぢやぞ。

その名の因縁はマア、ザットこの方の申す通りだ。エヘン、【ツラ】ツラ惟みるに【ツライ】この世に【ツライ】目して蛸を【ツラ】れて聞き【ツライ】宣傳歌を聞かされて好い【ツラ】の皮ぢや。俺アもう首でも【ツラ】ねばならぬかと思ふほど【ツラ】かつた。それを【ツライ】とも思はずにジツとして耐へて御座つて、酋長さまは【ツラ】イ【ナンギ】を辛抱し、外へ落す涙を内へ溢して素知らぬ顔して飲みたい酒も吞まず、鋭い刃を目の前へ突きつけられ、【ツラ】を晒されても何の【ツラ】からうといふやうな【ツラ】構へをしてござつたのぢや。それで【ツラナギ】の神、【ツラナミ】の神さまだ。分つたか」

鹿「へー、【ツラ】ツラと大きな面をしよつて何劫託を【ツラ】ねさらすのだい。そんな事を聞かされるのも良い【ツラ】の皮だ。ヤイ、そこいらにウラル彦の宣傳使が酒でも忘れて行きよりやせぬかなあ」

一同四邊を見まはして、

「おゝ彼處にも此處にも澤山徳利を置いてるわい。【口八】の酒なら呑んでやる

かい」

甲「ヤイヤイ、おけおけ、それを呑む位なら俺達は、こんな辛い目はしやせぬのだよ」

乙「きまつた事だい。彼奴の前なり、酋長の前だから、氣張つてゐたが、健寅彦の居らぬ後なら何ぼ飲んだつて分らぬぢやないか。宣傳使の前で飲むのは剛腹だからなア」

丙「それでも神さまは見てござるぞ。おけおけ」

斯く言つて口々に喋てゐるところへ、現はれたのは酋長の妻面那美の神なりき。面那美の神は一同に向ひ、

「お前達は神様の教を守つてよく忍むでくれた。これからは妾が酋長となつて、お前たちを守つてやる。我が夫は今日より三五教の宣傳使となつて、世界の人民を助けにお廻り遊ばすのだよ。今までは此の小さい白雪郷だけ守つてゐたが、も

はやそんな時期ではない。こんな郷位は妾一人で澤山だから、今日限りこの郷を御出立遊ばすのだから、お前たちもお暇乞ひにこの山奥まで出てくるがよい。ウラル彦の宣傳使のやうに酒ばかり飲むことは出来ぬが、今日は門出の祝だから、充分に酒も飲むがいい」

乙「それ見たか、今日は飲んでもいいつて最前から俺が言つたじやらう。そこいらにウラル彦の宣傳使が残した酒がある。みんな飲んでやらうかい」

一同は先を争うて、その徳利を拾い上げて飲みはじめたるを、面那美の神はこの光景を見て顔をしかめ、

「人間といふ奴は口卑しいものだなア。あゝこれでは夫の留守番も【なか】なか大抵ぢやなからう。兔も角何ごととも神様にお任せするより外に仕方がない」

と獨り言を言ひながら小聲になつて宣傳歌を歌ひ、もと來し道へ引返し行く。老若男女は片手に徳利を抱へながら、姫神の後に従つて山奥に進み入るに、少し平坦なる處に、日の出神は酋長と共に美しき女性の前に端坐しゐたり。この女性は前に述べたる祝姫の宣傳使なり。祝姫は健寅彦の數多の弟子共に取り圍まれ、酒

と劍とを以てこの酋長のごとくに責められたりしが、少しも恐れず、諄々として、三五教の教理を説き諭しければ、一同は大いに怒りて祝姫を今や打殺さむとなす折しも、日の出神現はれ來りて大音聲に宣傳歌を歌ひたる。その聲に何れも縮み上り、コソコソと四方八方に姿を潜めし際なりける。

ここに日の出神、面那藝の神、祝姫の三柱は白雪山を下り、一たん白雪郷の酋長の家に一泊し、歡びを盡して宣傳に出發したりける。

(大正一一・一・三〇 舊一・三 櫻井重雄録)

(第八章 第一二章 昭和一〇・二・二二 於増田分院 王仁校正)

第三篇

太平洋

第一三章 美代の濱〔三一三〕

烏羽玉の暗世を照らす宣傳使、日の出神の宣傳に、四方の曲津も祝姫、心も清き白雪郷、澁紙面の面那藝の、神と現れにし宣傳使、面那美姫を後にして、暗きこの世を照らさむと、別れに臨み門出を祝する酒宴は開かれたり。白雪郷の老若男女は、三柱の宣傳使の出發を見送るべく、酋長の家に一人も残らず集まり來り別れを惜む。

振舞の酒に舌鼓を打ち、感極まつて泣くもの、酔うて笑ふもの、中には惡酒の癖ある男はブツブツ怒り出したたりける。

牛公「ヤイ皆の奴、一體酋長てな奴は、譯が判らぬぢやないか。ウラル彦の宣傳使が來をつて、酒を飲めと言ひよつたその酒は、【とてつ】もない味の好い酒だつたが、それをば死んでも飲まぬ、神様の信仰は止めぬと氣張つてな、俺らにまでその甘い酒を飲まさずに、エライ目に逢はされたが、それに酒は飲まな飲まぬで判つて居るが、今日の振舞は一體何の事だい。飲めば神様の信仰にならぬと云

つて居るくせに、今日は宣傳使になつてその門出の祝に、酒を飲ますとは一體全體譯が判らぬじゃないかい。これからこんな甘い酒の味を知つたら、もうよう忘れぬ。ウラル彦の宣傳使について飲んで飲んで飲倒してやるかい」

乙「貴様の云ふことは「ヒヤ」ヒヤするワ。黙つて居れ、物には裏と表があるのだ。酋長さまは酒は飲んだら悪いぞと、表で眼を剥ながら小さい聲で「チツトは飲めよ」と仰有る謎ぢや。貴様のやうに物は堅うなるといけなないよ」

牛公「何が堅うなつたのだい。「しようも」ない酒を澤山飲ましょつて堅くなつた處か、骨も魂もグニヤグニヤになつてしまひ、足もろくに立ちやしない。ほんたうに人を馬鹿にするのも程があるぢやないか。エーン」

丙「コラコラ牛、貴様は、もつたいないことを吐かす奴ぢや、ババ罰が當るぞ」と目を拭ふ。

牛公「貴様は泣いて【けつ】かるな。泣く様な酒なら飲まぬが好いわ」

丙「よう思つて見よ。酋長さまは俺らを何時も可愛がつて下さつたが、今日は結構な身の上を捨て、色の白い奥さまを後に残して、千里萬里の海を越え、常世の

國とやらへお越し遊ばすと云ふじやないか。それも俺らを捨て俺らはどうでもよいと云ふのじやない。世界の人間を助けたさの御出立。奥さまは奥さまで、アノ色の黒い目許の涼しい口許のキツと締つた立派な夫に別れ、留守番をして今迄のやうに俺らを庇つて下さるといふ仕組だ。さうでなければ戀しい夫婦、奥さまと手に手を取つて一緒に御出發なさる筈だが、それもせないで一人で、御出で遊ばす事を思へば、俺はモウ有難くて涙が溢れる」

と又メソメソと泣く。

面那美の神は立上り、この一行を送る可く歌を唱ひ始めたり。

久方の天津御空は蒼々と 山野は清く花笑ひ

鳥は梢に歌ひつつ 神の御國を祝ふなる

白雪郷を立出でて 光も強き日の出神

世の村雲を永遠に 伊吹き祝の姫司や

戀しき夫の面那藝の 神の命の三柱は

常世の闇を晴らさむと

汐の八百路の八汐路の

汐掻き分けて渡ります

嗚呼天地の大神よ

嗚呼海原の大神よ

この三柱の宣傳使

恙も無しに送らせて

太しき功績を後の世に

建てさせ給へ百の神

吾れは女のただ一人

白雪郷に止まりて

郷の諸人守りつつ

孱弱き女の一筋の

髪に引行く千鈞の

重たき岩のその如く

朽たる綱に荒獅子や

虎狼を繋ぐごと

實にも危き吾務め

守らせ給へ百の神

嗚呼三柱の宣傳使

また逢ふことも嵐吹く

風の朝や雨の夜に

君に恙もあらせじと

祈る面那美真心の

妾は留まり守るなり

稜威は高し天の原

恵みは深し太平の

海の底ひも白浪の

世^よ人^{びと}を救^{すく}ふ宣^{せん}傳^{でん}使^し
救^{すく}ひの舟^{ふね}に棹^ささして
浮^う瀨^{きせ}に惱^{なや}む人^{ひと}々^{びと}を
神^{かみ}の御^み國^{くに}に渡^{わた}せかし
神^{かみ}の御^み國^{くに}に渡^{わた}せかし

と歌^{うた}ひ終^{をは}つて別^{わか}れを告^つげたりければ、三^み柱^{はしら}は名^な殘^{ごり}はつきずとこに改^{あらた}め神^{かみ}言^{こと}を奏^{そつじ}
上^{やう}し、集^{あつ}まる諸^{もろ}人^{びと}に一^{いち}場^{ぢやう}の訓^{くん}戒^{かい}を與^{あた}へ、白^{はく}雪^{せつ}郷^{やう}を後^{あと}に見^みて遂^{つひ}に美^み代^よの濱^{はま}の埠^ふ頭^{とう}に
着^つきにける。

(大正一一・一・三一 舊一・四 谷村眞友録)

第一四章 怒濤澎湃 (三一四)

船^{ふな}戸^{など}の神^{かみ}はガラガラと錨^{いかり}を釣^{つり}上^あげたり。折^{をり}から吹^ふき來^くる東^{とう}風^{ふう}に眞^ま帆^ほをかかけ風^{かせ}
を孕^{はら}まして、果^{はて}しもなき大^{おほ}海^{うな}原^{ばら}を船^{ふな}底^{ぞこ}に鼓^{つづみ}を打^うたせながら、波^は上^{じやう}靜^{じゆう}かに迂^{すべ}り行^ゆく。

日は西の海の端に舂きて水面を金色に彩りぬ。東の山の端より昇る玉兔の光に照されて日は海に隠るとも、その名は光る日の出神。この世の幸を祝ふ祝姫、連なる浪の面那藝彦、空は一面の星光粗らに輝き、月光波間に浮き沈み、常世の春の波の上、夜を日に踵いで進み行く。この船には三人の宣傳使を始め國々の澤山の人々が四方山の話に耽り、波路の憂さを拂ひ慰めてゐたり。船中の一方より白髪交りの長髪の大男、赤黒き面を又ツト出し、

「おい船頭、ここは一體なんといふ處だ」

「此處かい、ここは海といふ處だよ」

「海は極つて居るワイ。何ンといふ海ぢや」

「此處かい、ここは乳の海ぢや」

「フン分つた。生の父上母さまは何處に如何して御座るやら、生命の際に唯一目、會うて死にたい顔見たい、といふ海かい」

「何處の奴か知らぬが縁起の悪い事を吐かすない。一寸下は水地獄だぞよ」

「貴様こそ縁起の悪いことを云ふ、水地獄なんて俺は大の嫌ひだ。瑞の靈が探險

して來たやうな恐ろしい處が、この海の底の方に在るかと思へば、船乗も嫌になつてしまふワ」

このとき船の一方より涼しい女の歌ふ聲聞えきたる。

山より高き父の恩 海より深き母の恩

山と海との恩忘れ この海原を打ち渡り

常世の國に身を隠す 戀しき男に會はむとて

此處まで來たは來たものの 長き浪路に倦き果てて

もと來し國へ歸り行く その術さへも波の上

父母棄てて戀慕ふ 男に付くか戀慕ふ

夫を捨てて海山の 深き恵みの父母の

御側に歸り村肝の 心をつくし仕ふるか

善と惡との國境 進むも知らに退くも

成らぬ苦しき海の上 月は御空に輝けど

妾は思案に暮の鐘

故郷を思ふ戀しさの

心の空も掻き曇る

吁如何にせむ千尋の

深き海路に身を投げて

親に背きしこの罪を

天と地との神々に

心の底より謝罪せむ

と歌ひ始むるや、長髪の男はその女の手をグツト握り、

「オイ待て。今の歌で様子は判つた。俺の悴は貴様の爲に結構な白雪郷に居る事

も出来ず、たうとう里人より勿ね出されて仕舞つて、この前の月に常世の國に逐

電し、夫れがために俺のところは大變な迷惑だ。大切な悴は白雪郷の規則を破つ

て、村は逐ひ出され、俺も浮世の義理で勘當はしたものの、如何しても忘れられ

ぬは親子の情愛だ。年寄つた俺が遙々この浪路を渡つて悴の後を追ふも子故に迷

ふ親心、俺の女房は夫れを苦にして死んで了ひよつたぞよ。お前も夫れほど俺の

悴を慕つて、この海原を渡つて行かうと云ふ親切は、俺が悴を思ふも同じことだ。

思へば實に有難い。清いお前の志、俺の可愛い悴を愛して呉れるお前と思へば、

如何したものが今までの腹立もスツカリと水の泡沫のやうに消えて了つて、今は一層憐なやうな心持がして來た。何ンでも堅い約束をして居るのであらう。お前に聞けば常世の國の何處に居るといふことは判つて居らう筈、どうぞ包まず親ぢやと思つて、俺に逐一知らして呉れ。俺が何ほど山野を驅廻つて探したとて、この海よりも廣いダダツ廣い常世の國を、十年や二十年探したとて、探し當らるものではない。悴の在處を聞かして呉れたら、俺もお前と親子に成り、親子三人睦まじう、常世の國の何處の端でも厭はず、暮す考だ[□]とさしも頑丈の荒男も、子ゆゑの暗に鎖されて四邊かまはず蠶豆のやうな涙をボロボロと溢すその憐さ。

今までさしも晴朗なりし大空も忽ち黒雲蔽ひ、一望模糊として電光閃々、雷鳴轟き、凄然として風荒れ狂ひ、雨は沛然として降り來り、怒濤澎湃實に慘澹たる光景となりぬ。今まで四方山の話に喧噪を極めたる一同の乗客は、顔色蒼白となり得もいはれぬ不安の念に満たされけるが、アツと一聲叫ぶよと見る間に、麗しき女の姿は荒れ狂ふ浪に向つてザンブと許り身を投じたり。長髪の男は聲を限り

に、

「ヤアわが娘、いな他處の女、何故に投身したぞ。助ける術は無いか、皆の者救へ救へ」

という聲も、猛り狂ふ浪の音に遮られて、一同の耳には通はざりける。男は天に向つて合掌し暫し何事か祈ると見えしが、またもや身を跳らして海中にザンブとばかり飛込み、水煙を立てて姿は跡白浪と成りにける。心なき海の面は怒濤の山嶽凄じく、船を木葉のごとく翻弄するのみ。

黑白も分かぬ深黒の海面に、一道の光明船を目がけて射照し來るあり。天には電光時々閃き渡り、雷鳴轟き慘また慘。一同何れも決死の覺悟。否ただ口々に忍び忍びに何物をか祈りみたりけり。

浪風荒き海原も

虎狼の咆き叫ぶ

荒野の原も何のその
神の教に任す身は
心も安き法の船
御世を救ひの宣傳使

風も吹け吹け浪荒れよ

鳴る雷も轟けよ

假令この身は海底の

藻屑となりて果つるとも

などや恐れむ龍宮の

尊き神の御守りに

開く稜威も高天原の

聖地に救はれ永久に

春の彌生の花の頃

心の清き益良夫が

暗路を光り照すてふ

日の出神の宣傳使

風も悪魔も祝姫

荒き海面那藝の

凧て目出度き和田の原

凧て目出度き和田の原

千尋の海に身を投げし

吾身の罪を久比奢母智

姫の命の眞心は

天と地とに貫きて

今に海原凧ぎ渡り

鏡のごとく成りぬべし

實にも尊き神の道

神の恵みは彌廣き

大海原の如くなり

大海原の如くなり

と暗中より聲も涼しく宣傳歌響き來たりぬ。

(大正一一・一・三一 舊一・四 高木鐵男録)

第一五章 船幽靈〔三一五〕

虎吼え龍哮ぶ、さしも凄慘たりし海原も、日の出神の宣傳歌、その言靈の功績に、今は全く凧はてて、世は太平の海の上。彼方此方に島影の、疎らに浮けるその中を、眞帆に春風孕ませつ、御空に清き月影を、力に進む長閑さよ。天津御空の星の影、以前の如くに輝きて、影を沈むる波の底。銀河は下りて海底に、北より南に横はる、今打渡る天の河、深きは神の心なり。

今まで虎狼に出逢ひし羊兔の如く、惛伏して弱り切つたる人々は、またもや元氣を恢復し四方山の談に花を咲かせける。

甲 先刻妙な女が妙なことを吐かすものだから、大綿津見神さまも御立腹と見え

て、どえらい浪を起したり、風を吹かしたり、お月様を隠したり、雷さまが吠鳴つたり、ぴかりぴかりと光つたりして、俺らの肝玉を大方潰しよつた。俺ア、もう「おつ」魂消て生きて居るのか死んでるのか、夢だつたか幻だつたか、ほんたうに譚が判らなかつたよ。恐い夢もあればあるものだと思つたが、やつぱり夢では無かつたか。それだから三五教の宣傳使が「言靈は慎まねばならぬ。善い言を云つて勇んで暮せば、善いことが来る、悔めば悔むことが出来る」とおつしやつたが、本當に實地の學問をしたではないかエー」

乙「本當にさうだよ。山より高き浪が立つとか、海より深い「ばば」垂れ腰とか、何んだか譚の判らぬこと吐きよつて、池かなんぞのやうに思ひ、鯉だの鮒だのと吐くものだからな、こんな目に逢ふのだよ」

丙「貴様は間違つてゐる。山より高き父の恩、海より深き母の恩と云つて、父と母との恩は有難いものだと言ふ事を云つたのだよ。貴様は耳が悪いから困るナア」

甲「それでも貴様、彼奴が喋つてから波が高くなつたり、命辛々の目に逢うたのじやないかい」

丙へい「それあ時節じせつだ、とは云いふものの貴様きさまの精神せいしんが悪わるいからだよ。船ふねの上うへは慎つつしまねばならぬと宣傳せんでん使しが云いつたじやないか。それに今いま出でると云いふ時ときに、嬢かかあと掴つかみ合あひをしよつて、喧譁けんくわをさらすものだから、こんな目めに逢あふのだ。貴様きさまの嬢かかあが出でるときに何なんと云いつた。「私わたしを捨すてて好すきな【ブク】さまの傍そばへ行ゆくのなら、私わたしはたつて留とめはせぬ。その代かはりに私わたしを今いま此處ここで殺ころして置おいて行いつて下ください。私わたしは船幽靈ふないうれいとなつてお前まへの船ふねを【ひつくり】覆かへしてやる」と、恨うらめしさうに吐ほいたじやないか。それを貴様きさまは「土手南瓜どてかぼちやの【しち】お多福たふく奴めが、何なにを吐ぬかしよるのだ。貴様きさまの面つらを見てゐると嘔吐へどが出るでる。それよりも美うつくしい【ブク】の顔かほを見て、一生いっしやうを暮くらすのだ。常世とこよの國くには遠とほいと云いつても、寢ねて居をつたら行ゆけるのだ。貴様きさま死しにたけら勝手かってに死しね」と吐ぬかして、おまけに拳骨げんこつを呉くれて船ふねに飛とび乗のつたじやらう。きつと貴様きさまの嬢かかあは「嗚呼ああ残念ざんねんや口惜くやしい、たとひこの身みは身みを投なげて死しぬるとも私わたしの魂魄こんぱくは爺おやぢの船ふねに止とどまつて、仇討かたきうたいで置おかうか」と吐ぬかしてな【どんぶ】と飛とび込こみよつたに違ちがひないぜ。その時ときの渦うづが段々だんだんと擴ひろがつてきて、こんな大おほきな浪なみになつたのだよ。さうして彼の雷かみなりは、貴様きさまの嬢かかあの唼どな鳴なり聲こゑが段々だんだん大おほきくなつて響ひびいたのに

違ひないぞ。嬬を「おかみ」といふが、「おかみ」が吠鳴つたので雷さまぢや。

それ貴様の後に嬬の幽霊が現はれたワ

甲は「キアツ」と云ひながら、目を塞いで頭を抱へる。乙は大口を開いて、

「アハ、ハ、ハ、弱蟲だ、臆病者だなあ」

と笑ひ倒ける。

乙「しかし世の中に鬼は無いとか、神の守る世の中だとか、よく宣傳使に聞いた

が、本當に神さまは在るらしいなあ。いま暗がりから何でも日の出神とか、何と

か云つて、歌はつしやつた。あれあ人間ぢやない、きつと天の河から船に乗つて

降つて来た神さまらしい。も一遍あの神さまの御聲が聴きたいものだ。何とも云

へぬ清々しい心持がしたよ」

甲「あゝいやいや。あんな聲を聞くと頭はガンガン吐かすし、胸は槍で突かれる

様になつてきて、苦しくて堪つたものじゃないワ。蓼喰ふ蟲も好き好き、辛い

「えぐい」煙草にさへも蟲が生く時節だから、彼んな「えぐい」強い言葉でも、

貴様には有難く聞えるのだ。雪隠蟲は彼の汚い糞の中を、天國淨土のやうに思つ

て、【あた】汚い糞汁を百味の飲食の様によるこびて喰ひ、下から人間の尻の穴を拜んで、結構なお日天さまが黄金の飲食を降らして下さると云うて、暮す様なものだよ。貴様は雪隠蟲か、糞蟲だなあ

乙 「何馬鹿を【たれ】よるのだイ」

と云ひながら、鐵拳を固めて前頭部を目がけて、【ばかり】と打つ。

甲 「何んだ、喧嘩かい。喧嘩なら負けやせぬぞ」

乙 「針金の幽霊のやうな腕を振り廻しよつて、喧嘩にや負けぬなんて、ヘン喧嘩が聞いて呆れるは」

又もや俄に暴風吹き荒び、浪猛り狂ひ、四邊は咫尺を辨ぜざる光景とはなりぬ。

(大正一一・一・三一 舊一・四 井上留五郎録)

第一六章 釣魚の悲 (三一六)

再び暴たる光景に船の諸人はまたも不安の念に驅られ、猫に逐はれし鼠の如く頭を垂れ呼吸を凝し、戦慄き伏して「チウ」の聲も擧げ得ざりける。
この四邊は大小無數の岩石水面に起伏して危険極まる區域なり。一つ違へば船は忽ち破壊覆没の厄に遭ふ地點にして、地獄の釜の一足飛び、人々の生命は恰も轍迹の魚か石上の累卵か、危険刻々に迫り來たりける。このとき船の一方に聲あり。

禍多き人の世は

飯食ふ暇も附け狙ふ

情嵐の吹き荒び

何の容赦も荒浪の

涙の淵に沈みたる

世の諸人を天津日の

神の恵に救はむと

黄金山に現はれし

三五教の宣傳使

日の出神と現はれて

波風猛る荒海を

渡りてここに太平の

神世を修理固成めむと

常世の國に進み行く

心も廣き海原や

神の恵の彌や深く

大御稜威は久方の

天津御空にそそり立つ

天教山も畜ならず

神徳高き照妙の

衣を捨てて蓑笠の

服装も輕き宣傳使

重き罪人救はむと

教の船に棹さして

闇の海原進み行く

黑白も分かぬ暗の夜に

苦しみ迷ふ人々の

心の波は騒ぐとも

魂の月は曇るとも

天津日の出の宣傳使

光り輝く言靈に

眠を醒せ眼を開け

眠を醒せ眼を開け

神が表に現はれて

善と悪とを立て別る

この世を修理固成りし神直日

心も廣き大直日

ただ何事も人の世は

直靈に見直し聞き直せ

身の過は宣り直せ

神の御子なる人草は

恵も深き神の前

祈りて效驗あらざらめ

祈れよ祈れ諸人よ

神は汝と俱にあり

神は汝と俱に在り

心の岩戸を押開き

鬼や大蛇を逐ひ出し

三五教の神の教

心の倉に隙間なく

充たせ足らはせ諸人よ

充たせ足らはせ諸人よ

世は紫陽花の七變り

月日は落つる世ありとも

海の底ひは乾くとも

千代も八千代も變りなき

神の恵を力とし

大神光を目標に

波風高き荒海の

潮踏み分けて世を渡れ

神は汝と俱にあり

光り輝く言靈の

天津祝詞の太祝詞

聲も涼しく宣れよ人

聲も涼しく宣れよ人

この世を救ふ埴安彦の

神の命や埴安姫の

神の命の開きたる

三五教の教理をば

耳の戸開けて菊の秋

四方の山々紅に

錦織りなす眞心は

神に通へる心ぞや

神に通へる心ぞや

吾は日の出神なるぞ

わが言靈は常世行く

暗を照らして世の中の

百の曲事祝姫

長閑な海面那藝の

嚴の息吹に凧ぎて行く

實にも尊き神の恩

實にも尊き神の徳

と歌ひ終ると共に、またも海面は風凧ぎ、波静まり、月は中天に皎々として輝き始め、さしも頑強なる船の人々も思はず手を拍つて天地の神の洪徳を感謝したりける。

船客の中より色淺黒き、口元の締りたる中肉中背の男、日の出神の前に現はれ、
恭しく手を突きながら、

『一度ならず二度までも、この遭難を救ひ、吾らに清き美はしき教を垂れさせ玉ひしことを有り難く感謝いたします』

と云ひつつ涙を拭ひ、

「さて、宣傳使にお尋ね申したきことがあります。お聞き届け下されませうや」と恥かし氣にいう。日の出神は、

「吾は世界を導く宣傳使、何事なりとも問はせ給へ」と快く答へたまへば、彼の男は、

「私は實は白雪郷の者であります。ふとしたことより郷の女と戀に落ち、白雪郷を追ひ出され常世の國に遁げ行かむと致しました。然るに唯一足違ひにて、船は常世の國へ出帆いたし、次の船を待つて、今や常世の國に渡らうと致して居ります。然るに吾が戀しき女はわが後を追ひ、同じ船に如何なる因縁か乗ることとなりました。しかし彼の女は私の此の船に乗つて居ることは夢にも知りませぬ。私も亦その女の船に乗つて居ることは毫も氣が付かなかつたのです。時しも船の一方に當つて、歌を唄ひ始めた女あり、よくよく視れば、私の日頃戀ひ慕ふ彼なれば、噫、彼は一旦約したる言葉を守り、遙々遠き波の上、我を搜ねて來りしか、嗚呼、愛しの者よ、と自ら名乗りを擧げ、相擁して泣きたく思ひました。傍を見

れば豈計らむや、我が父の儼然として船中に控へて居るに氣が付きました。思ひ
は同じ一蓮托生の身の上、【とつおいつ】、吐息を漏らす折からに、彼の女は遂
に何思ひけむ、深き千尋の海に身を投げて、泡と消えゆく哀れさ。亦もや我が父
の後を追ひて海の藻屑となりしを見る我身の苦しき。私もその時彼と父との後を
追ひ、この海原へ身を投げむやと決心はいたしたものの、何となく腹の底より
「マア待て、マア待て。愛する彼の女と恩深き父の弔ひは誰人がなす。天にも地
にも親一人子一人の汝、身投げは思ひ止まれよ」と頻りに私語きます。我身の不
覺より、彼の女を殺し、大恩ある我父の生命まで水の泡となせしは私の罪咎、千
尋の海よりも深きを思へば立つてもも居られませぬ、何卒わが心の迷ひを照
らさせ給へ、日の出神の宣傳使さま」
と涙と共に物語るを、日の出神は莞爾として、事も無げに、
「世の中は老少不定、會者定離だ。一切萬事人の運命は神の御手に握られて居る。
生くるも神の御慮、死するも神の御慮ぞ。唯何事も人の世は、直日に見直せ聞き
直せ、身の過は宣り直せ。また來る春に相生の、松も芽出度き親子夫婦の再會を、

かなら
必ず得させ玉はむ。汝はこれより本心に立ち歸り、三五教の教を守り、天地の神
を眞心より讚美し奉れ」
と教へ玉へば、彼は熱き涙を湛へながら、日の出神に感謝し、直に宣傳歌を聲高
らかに歌ひはじめたり。日の出神は手を拍つて彼の男に向ひ、
「彼方を見られよ」
と指さしたまふ。波の彼方に、浮きつ沈みつ、何かのせられたる男女の影見え
たり。この男女は果して何人ならむか。

(大正一一・一・三一 舊一・四 廣瀨義邦録)

第一七章 龜の背〔三一七〕

夜は漸くに明け離れ、東海の浪を割つて昇る朝暉の光は、さしもに廣き海原を
忽ち金色の浪に彩り、向ふに見ゆる島影は、ニウジールランドの一つ島、大海原彦

の鎮まりぬます、眞澄の玉の納まりし、國治立大神の穿たせ玉ひし沓島。浪の間に間に浮きつ沈みつする様は、莊嚴身に迫るの思ひあり。

怪しき船に跨がりて、浪に漂ふ男女の影は、船を目掛けて近より来る。よくよく見れば豈圖らむや、猛り狂ふ浪間に身を投げ捨てたる白雪郷の若き女と、白髪交りの長髪の男の二人なりき。日の出神は靡き「來れ、來れ」と呼ばはれば、男女を乗せたる怪しき影は、やうやう船に近寄りきたるを見れば巨大なる龜なりき。二人は直ちに船に飛び乗りぬ。巨大の龜は日の出神に打ち向ひ、熟々顔を見交はしつつ又も姿を海深く没したりける。嗚呼この龜は何神の化身ならむか。

二人は此處に再生の思ひをなして再び船中の客となり、日の出神に打ち向ひ、涙を湛へながら各自の經歷を物語り、且つ、

海中に身を投ずる折しも、何處よりともなく一道の光明が現はれて來ました。妾はその光を眼當に浪に漂ひ、浮きつ沈みつ參りました。私の後より一人の男又も追っかけ來り、「そうかう」するうち、光は消えて眞の暗、身は何物かの上に二人とも乗せられて居ました。さうして日の出神様の宣傳歌は、猛り狂ふ風の音、

浪の響きを透して手に取る如く聞えました。私はその歌について共に合唱いたしました。不思議や天津御空は晴れ渡り、風凧浪静まり、長閑な春の浪の上に比類稀なる大龜の背に救はれ御船に助けられたる嬉しさを、いつの世にかは忘れませう。實に有難き大神の深き恵みや
と、嬉し涙に暮れて二人は交る交る感謝する。

一人の名は國彦と云ひ、この女は奇姫と云ふ。國彦は傍らに默然として俯き居る男の顔を横目に見て、

「ヤアお前は高彦か」

と叫べば、若き男は、

「ア、父上様か、若氣の致り、尊き親の恩を忘れ、【えらい】苦勞をかけました。お赦し下さいませ。ただ何事も今までの罪は見直し聞き直し、宣り直しを願ひます」

と涙と共に語る。國彦は兩眼に涙を浮かべ、

「ア、高彦、天にも地にも親一人子一人、如何してお前を憎もうぞ。老先短い我

が命一人の我子に生き別れ、この世に生きて詮もなし、たとへ汝の行方が一生知れぬとも、汝の渡りし常世の國のせめて土になりたいと思ひ定めて、此處まで来た親の心、どうしてお前が憎からう、心配するな。お前が里の規則を破り白雪郷を追放せられたその後は、後に残りし老の身の明暮涙の袖を絞るばかりであつたが、如何なる神の御引き合せか渡る世間に鬼は無い。それにも一つ嬉しいは、お前の慕うた彼女はいま此處に来てをる。俺がこれから仲媒して、天晴親子夫婦の契を結ばせやう。オイ高彦、可憐の女に、よう来たと柔しい言葉をかけてやれ。廣い世の中に親となり、子となり、女房となるも昔の神代から神の結びし深い因縁、同じ船の一蓮托生」

と嬉し涙にかき曇る。此處に親子夫婦の契を結び、三人手に手を取つて宣傳歌を歌ひ神に感謝を捧ぐる殊勝さよ。船の一方には、

甲「オイ、馬鹿にするじやないか。お安くないところを見せつけよつて、俺もかうはして居るものの、國に歸れば、皺だらけの父母もあれば、頗る別嬪の女房もあるのだ。それで近所の奴等あ、俺の事を歌に唄ひよつて「よい嬢持ったが一生

の徳だよ、近所も喜ぶ、爺も喜ぶ、お婆も喜ぶ、第一熊さま喜ぶ、熊さまどころか、倅も喜ぶ」とこんな歌を唄ひよるのだよ」

乙「オイ、涎を拭かぬか、見つともない」

熊「あまり嫉妬ない、あまり【やく】と色が黒くなるぞ」

乙「貴様とこの嬢は、あれでも別嬪だと思つて居るのか、笑はしやがる。鼻は獅子舞、眼玉は猫で、菊石だらけで、おまけに跛者と来て居るのだから、悪い事に

かけたなら完全無缺だ。ウンその【尻】で思ひ出した、貴様の嬢は村中にない大きな

な【だん】尻をぶりぶりさしよつて、歩く態つたらありやしないよ。それでも貴

様は【みつちや】も笑靨、獅子鼻も却つて優らしい、歩く姿は品がよい位に思つ

て居るだらう。ほんとにお目出度い奴だよ」

熊「オイ、小さい聲で云はぬかい、人の前だぞ。此處に居る奴は俺の嬢のことを

知りやしない、それだから別嬪らしう俺が云つて居るのに貴様が大きな聲で素破

抜きよつて、あまり氣が利かぬぢやないか。些と心得て呉れぬと困るよ」

乙「困るたつて、事實は事實ぢやないか。貴様とこの嬢は【どて】南瓜の七お多

ふ

福くで、おまけに菊石面あはたづらで、ど跛者ちんぱで大きな「だん」尻しりをぶりぶりさして歩いて居ゐる姿すがたたら見みられた態さまぢやないぞ。それで俺おれのところの村むらの名物めいぶつだ」
と態わざと大きな聲こゑで吠鳴どなるを、熊公くまこうは「シツ」と低い聲こゑで制せいしてゐる。
乙おつ「貴様きさま」「シツ」なんて俺おれを牛うしでも追おふやうな扱あつかひをしよるのか、俺おれが牛うしら貴様きさまは熊くまだ。黒熊くろくま、嬢かか大明神あだいみようじんばかり拜をがむで居をる赤熊あかぐま穴熊あなぐまさまだよ」
と自暴や自棄け氣味きになつて喋しゃべりたてて居ゐる。かく話はなす中うちに船ふねは沓島くつしまの港みなとに無事ぶじに着つきけり。

高彦たかひこは天久比奢母智司あまのくひざもちのかみの前身ぜんしんにして、奇姫くしひめは國久比奢母智司くにのくひざもちのかみの前身ぜんしんなりける。

(大正一一・一・三一 舊一・四 加藤明子録)

第四篇 鬼門きもんより龍宮りうぐうへ

第一八章 海原の宮（三一八）

船は漸くニュージールランドの沓島の港に着きぬ。この島は人々の上陸することを禁じられありき。唯この島より湧き出づる飲料水を船に貯ふる爲に寄港したるなり。

日の出神は、天津祝詞を奏上し、且つ宣傳歌を歌ひながら、二人の宣傳使を伴ひ上陸し、海原彦神の鎮まります宮に詣で、海上の無事を祈願し、風波の都合にてこの島に一月許り避難する事となりける。

船中の人々は無聊に苦しみ、又もや珍らしき話を互に始め出し、國々の自慢をなしめたり。

中に二三の色黒き大男と、顔の細長く脊の高き大の目を剥ける男と、少しく脊の低き瘦顔の三人の男が、チビリチビリと酒を呑みながら話に耽り居る。

「おい、時彦、あんまり酒を喰うと大臺ヶ原に出會した日の出神が乗つとるぢやないか、見付けられたら大變だぞ」

「芳彦、構ふない。今、日の出神は山へ上つて行つたぢやないか。その間に精出して貴様も呑め、俺も呑むのだ。おい、田依彦。そんな大きな目ばかりギロつかさずに呑め呑め」

「貴様規則を破ると、俺が承知せぬぞ。俺は酒は香ひを嗅ぐのも嫌ひだのに、両方から俺を困らせようと思ひよつて、また酒を喰ふのか。今度こそは日の出神さまに言うて「こます」。この長い海の上をアタ世間の狭い、酒を喰ひたいものだから、名乗も上げずに、何時も俯向いて顔を隠して貴様だけなら好いが、俺まで俯向かせられて堪つたものかい」

時彦「業が湧くぢやないかい。若い男と女奴が海に飛び込みたり、上つたりしよつてな、終には氣の良い宣傳使を、「ちよるまか」して夫婦になるなんて、馬鹿にしとるぢやないか。俺らは遙々とこの波の上を、常世へ行くのも、ウラル彦さまの乾兒となつて、甘い酒を鱈腹吞まして貰うためだ。國の御柱の神さまが根の國とかへ遁げて行つたと云つて、宣傳使とやらが騒いでゐるが、根の國とか、夜見の國とか云ふのは、常世の國のことだい。きつと酒に浸つて酒池肉林といふ、

贅澤三昧を遊ばして御座るのよ。俺らもその酒池肉林に逢ひたさに、可愛い女房を捨てて行くのぢやないかエーン

田依彦は丸い目を剥き出し、口を尖らせ、

「貴様はいよいよ怪しからぬ奴だ。常世の國に稚櫻姫命が現はれ遊ばして、神政を再び御開き遊ばす。夫れに就て昔の龍宮の家來は、元のごとくに使うてやらうとおつしやるのだから、一時も早う行かうじやないかと、俺を此處まで誘ひ出しよつたのは嘘だつたな」

時彦「今頃に貴様嘘に氣が付いたのかい。田依ない奴ぢや。夫れで頼り無い彦と皆が云ふのだよ。頼りに思ふ女房を玉を奪られた玉彦に玉なしにされて其上に玉を奪られたこの時彦に、魂を奪られて何の態。貴様の性念玉は氣の毒ながら腐つて居るよ。併しなんぼ腐つて居ても仕様が無い。貴様と一緒にかうして暮さにやならぬ腐れ縁だもの」

田依彦は、

「何、馬鹿吐かす」

と云ふより早く鐵拳を固めて、時彦の横面をポカンとやる。

時彦は酒が廻り、舌は纏れ、足はひよるひよるなりき。口ばかり達者なるが、身體の自由は一寸も利かぬ。船の人々は、

「喧譁だ喧譁だ」

と總立になつて眺めてゐる。日の出神は宣傳歌を歌ひながら、海原の神の宮を後にして、この船に向つて歸りきたる。

時彦、芳彦は蝸々蟲のやうに縮まつて、船の底に平太ばりぬ。田依彦は、むつくと立上り、

「もしもし日の出神様、私は田依彦であります。大臺ヶ原で御別れ致し申しましてから、豆寅は久々能智と云ふ立派な御名を頂戴して、大屋毘古と一緒に家造りをやつて居ります。それはそれは偉い鼻息で、私らは奴扱ひにされて堪りませぬので、たうとう貴下の後を慕つて参りました。何卒私にも結構な名を命けて下さい。何時までも田依彦でも頼るところがなければ仕方ありません。と、目をギョロギョロさせながら頼み入る。」

「あゝさうか。夫れに相違なければ感心な男だ。しかし其處に平太ばつて居る二人は、時彦と芳彦では無いか。頻りに、酒の香ひがするなア。その徳利は誰のだ」
「ハイ、これはト、ト、ト、ト、ト、ト、トもう解りませぬ。トキドキこんな事がありません」

「それは芳彦のじやないか」

「ハイハイ、田依彦はヨ、ヨ、ヨ、ヨ、ヨ、ヨ、ヨの人かと思ひます。ヨ、ヨ、ヨ、酔うて居ります」

「なんだ貴様は、俄に吃になつたのか」

「ハイ、ド、ド、ド、ド、ドウもなりません。時や、芳が私の云ふことを聞かぬものだから、私も共々にイヤもう何うもかうも申上げやうはありませぬ。何卒神直日に見「のがし」、聞「のがし」て下さいませ。併し、此奴は爛直日で無うて、冷酒で呑んでゐます。私も側に居つて、貴下に見つかりやせぬかと思ひまして、ヒヤヒヤアブアブしたりしました。私は性來の酒嫌ひですから、一つも呑みませぬ。時彦や、芳彦は、たとひ何うならうとも私だけは赦して下さい。日の出

神さま^{かみ}」

「馬鹿言ふな、貴様だけが助かつたら好いのか」

「イーエ、成る可くは貴様も、時も、芳も救けて貰ひたいものです。おい時、芳、面を上げい。日の出神さまだぞ。目から火の出るやうな目に一遍逢はされて見い、酒も酔も醒めるだらう。今なんと吐かした。國の御柱の神さまは、常世の國へ酒呑みに行かつしやつたなんて云うただらう」

日の出神は微笑しながら、

「好い加減にせよ。今船が出る。船の中で悠久と油を搾つてやらうかい」
船は又もや錨を捲き揚げ、順風に帆を上げて龍宮島さして進み行く。

（大正一一・一・三一 舊一・四 外山豊二録）

（第一三章）第一八章 昭和一〇・二・二三 於徳山 王仁校正）

第十九章 無心の船（三一九）

船は纜を解いて、國治立大神の御冠になりませる龍宮島に向つて進み行く。暗礁點綴の間、何時船を打破るかも知れぬ難海路なり。日の出神は海上の無事を沫那藝沫那美の二神に祈りつつ、又もや宣傳歌を歌ひたまふ。

國の御祖とあれませる

國治立大神は

蓮華臺上に現はれて

その御冠をとりはづし

海原目がけて投げ給ふ

御魂は凝りて一つ島

冠島となりにけり

冠島は永遠に

鎮まりゐます豊玉姫の

神の命や玉依姫の

貴の命の御恵みに

御船も安く進み行け

荒浪猛る海原も

闇より暗き世の中も

朝日夕日の照り映えて

神の御魂の凝りて成る

天と地との大道の

教を開く宣傳使

日の出神と現はれて

恵を頭に冠島

天地をまつる祝姫

辛き憂き世を面那藝の

神の御心に憐れみて

常世の國に恙なく

渡らせ給へ天津神

神伊奘諾の大御神

月の大神野立彦

野立の姫やあら金の

土を守らす要の神

浪路を守る綿津神

常世の闇を晴らせかし

常世の闇を晴らせかし

と、歌ひつつ進み行く。田依彦は、

「オイ、時彦、早く日の出神様にお詫をせぬか。一生お酒は飲みませぬ。目出

度い時に限つてお神酒を頂かして貰ひます」と言つて、お辭儀をせぬかい。芳彦

貴様もその通りだぞ

時彦「俺アもう雪隠の火事だ。【やけくそ】だ。嬢アよりも飯よりも好きな酒を

止めるなら、誰がこんな常世の國へ行くものかい。ア、飲みたい飲みたい

芳彦「時彦、貴様は如何しても改心できぬのかなア、困つたものだよ」

時彦「貴様も改心すると吐してから、一體何年になると思ふ。八尋殿の酒宴に、酔ひ潰れて、竹熊の計略に罹り、イの一番に玉を奪られて、それからと云ふものは、ア、酒は慎まねばならぬ、俺は酒で縮尻つたと吐かして、毎日日蒼い顔して、小さくなつてゐたのも、僅かに二月か三月、ソロソロ地金をほり出して、今の今まで酒を喰つてよい程酔うて、舌もロクに廻らぬやうになつた上に、俺は改心したもないものだ。また酔が醒ると、貴様の喉がヂリヂリと焼きついて、太い腹の中から結構な副守護神が飛び出して、「オイ芳彦、酒は飲んでもヨシ彦ぢや、規則は破つてもヨシ彦、飲めよ騒げよヨシ彦、一寸先あ暗でもヨシ彦、暗の後から月が出てや尚々ヨシ彦だ」と吐してな、勧めるのだろ。そこで貴様の喉は焼けるし、元から口汚い、口卑しい性來だから、何でもヨシヨシと吐かして又しても食ふのだ。今一寸のあひだ改心したつて、何にもなりやしない。改心するなら、萬古末代變らぬやうに改心せい……俺らはそんな柔弱な事は嫌ひだ。一生涯酒だけは改心せぬ心算だよ」

田依彦「エ、貴様たちは仕様のない奴らだナ。何でそんな辛い、【えぐい】物が

好きなのだ。貴様も最前船客の言つてゐた雪隠の蟲か蓼喰ふ蟲の仲間だナ」
時彦「オイオイ、よい加減にせぬか、日の出神様に聞えるぞ」

田依彦は大きな聲を出して、

「聞えるやうに云ふのだ。如何しても止まぬか、ウラル彦の處へどうしても行き
たいか」

と故意と大聲に呶鳴り立てる。時彦と芳彦は兩方の耳を閉いで縮こまりゐる。

田依彦「貴様は自分の耳を押へて何をするのだい」

時、芳「日の出神に聞えぬやうに、蓋してるのだい。貴様があまり大きな聲を出

すからナ」

田依彦「耳を蓋して鈴を盗むやうな馬鹿な眞似をしたつて、日の出神さまの耳に

はよく分つてるぞ。ソレソレこつちを今向いて恐い顔してゐらつしやる。綺麗、

サツパリと改心すると吐せ」

この時、傍の船客のなかに幽かな聲を搾つて、

飲めよ騒げよ一寸先や暗よ 暗の後には月が出る

とかく此の世は色と酒 酒が無ければ世の中は

面白可笑しく暮せない 泣いて暮すも一生なら

笑つて暮すも一生ぢや 一升徳利首に懸け

二生も三生も夫婦ぢやと 誓うた女房も何のその

お酒は私の女房ぢや 酒より可愛妻あるか

酒より甘いものあるか 酒を嫌ひと吐す奴

變チキチンの馬鹿者か この世に生れて來た上は

酒と肴と心中して 死んで地獄へ落ちたとて

酒の嫌ひな鬼はない 恐い鬼めに徳利を

見せてやつたらニヤリと 忽ち相好を崩すだる

この世もあの世も神の世も 酒でなければ渡られぬ

お神酒あがらぬ神はない 酒を嫌ひと吐す奴

神には非で狼か 顔色悪い貧乏神

【シミタレ】神がみの腐くされ神がみ

日ひの出で神かみとはそりや何なんぢや

酒さけが無なくては日ひが照てらぬ

肴さかな無なくては夜よが明あけぬ

ドツコイシヨのドツコイシヨ

ドツコイシヨのドツコイシヨ

トツクリ思案しあんをして見みれよ

さした杯さかづきやクルクル廻まる

廻まる浮世うきよは色いろと酒さけ

ドツコイシヨのドツコイシヨ

と、小聲こゝろに歌うたひ出だしたるものあり。

時彦ときひこ、芳彦よしひこは耐たまらなくなり、情なさけなささうな聲こゝろを出だして、

時とき、芳よし、あゝア、酒さけは止やめなら止やめもしよ 飲のまぬとおけなら飲のみもせぬ

それでも天地てんちの神かみさまは お神かみ酒さけあがるが俺おれア不ふ思し議ぎ

酒さけを飲のむのが悪わるいなら 俺おれはこれからサツパリと

改心かいしんいたして神かみ酒さけを飲のむ 改心かいしんいたして神かみ酒さけを飲のむ

と調子に乗つて歌ひ始め、踊り狂ふ。

田依彦は眼を丸くし、又もや鐵拳を振つてポンポンと続け打ちに二人の横面をイヤといふほど喰はしける。

無心の船はこの囁きを乗せてドンドンと龍宮島指して進み行く。

(大正一一・一・三一 舊一・四 櫻井重雄録)

第二〇章 副守飛出(三二〇)

龍宮見たさに沓島越せば、龍宮送りの風が吹く

と節面白く船頭は歌ひ始めたり。長閑な春の海面に幾百千とも知れぬ白き帆の往來する様、春の野に胡蝶の群の飛交ふ如き美々しき光景なり。

船は漸くにして潮満、潮干の玉の隠されたる冠島の岸に着きぬ。又もや船の諸人は一人も残らずこの島に上陸し、龍宮の宮に詣でける。

日の出神は、祝姫、面那藝二人に、船客に向ひ宣傳を命じ置き、自らは田依彦、時彦、芳彦を伴ひ、當山の奥深く姿を隠しける。田依彦は道案内として先に立ち、日の出神はその後に随ひ行く。時彦、芳彦は屠所に曳かるる羊の如く、悄然として恐る恐る追従する。

芳彦「オイ時公、貴様あまり頑張るものだから、たうとうこんな山奥に引張り込まれるのだ。どんな目に遭はされるか知れやしない。貴様の胸を見い、大きな波を立てて胸をどきどきどきどき彦ぢやないか」

時彦「ヨ、芳公、そんな事は止しにしてくれ。俺やもう一足も歩けない。アイタタ」

とバツタリ谷道に倒れてしまった。田依彦は後振り返り、「オーイ、早く来ぬかい。何をグツグツしてるのだい。【なめくじ】だつて、もつと足が早いぞ。この山の奥には結構な甘い酒が、泉の如くに湧いて居るのだ。そこで貴様らに飲んで飲んで飲堪能さしてやるのだから喜んで来い。何事も神直日、大直日に見直し、聞き直して、宣り直す三五教の教だ。喜ばして改心さして

遣らうと仰しやるのだ。何も恐いことはない。酒ぢや酒ぢや早う來ぬかい」

時彦は酒と聞かや、俄に元氣回復し、

「ヤアヤア有難い。ほんたうかい」

と云ひながら走り出し、どんどん進んで山奥の谷間に屹立する大岩の麓に付く。

何とも言へぬ、馨しき匂ひのする酒が天然に湧き出て居るのを見て、時彦は鼻蠢

かし咽をクウクウ言はせながら、直に掬つて飲まむとするを、田依彦はこれを遮

り、

「待て待て、この酒は無茶苦茶に飲んだら、命が無くなる。マア神さまに御願ひ

した上の事だ」

時、芳「死んでもよいから早く飲まして呉れ、モウ堪らぬ堪らぬ」

日の出神は時彦の顔をギロリと睨みけるに、時彦は睨まれて縮み上がり打ち伏

しぬ。

田依彦「ここは酒の瀧といふ所だ。龍宮の乙姫さまがお造り遊ばした酒だから、

祝詞を上げてお祓をしてそれから事だ。サア貴様は被戸になれ、俺は齋主にな

つてやらう。芳彦、貴様は神饌係だよ」

「神饌係だつて、何をお供へするのだい」

「貴様の持つて居る魂を御供へするのだよ」

芳彦、時彦一度に、

「玉を供へたつて折角拾うた玉は、竹熊に奪られてしもうたではないか」

田依彦は、

「その玉なら俺も奪られたのだ。貴様の魂を供へる事だよ。貴様が酒が飲みたい飲みたいといふ副守護神の魂を綺麗サツパリ御供へせいと云ふ事だい」

時彦「何時も酒を見るとクウクウ云つて、臍の下あたりから上がつて来よるあの

魂が副守護神と云ふのか、それなら俺は四つばかりあるわい」

芳彦「俺も二つほど持つて居る」

田依彦「時彦の持つて居る四つの魂と、芳彦の持つて居る二つの魂をお供へする

のだ。皆なその副守の魂奴が酒を喰つて貴様の魂や身體をわやにするのだ。綺麗

サツパリと御供へしてしまへ」

ときひこ 時彦「御供へせよと言つたつて咽まで出て来ても口へは出て来ぬのだもの。俺の腹を切つたつて出て来やしないし、どうすれば好いのだ。ア、甘さうな酒だな、飲みたい飲みたい」

ひのでのかみ 日出神「早く御祭を始めぬかい」

「ハイハイ今始めます。一寸手を洗うて手水を使ひまして嗽を致します。待つて下さい」

たよりひこ 田依彦「貴様らは狡猾い奴だな。嗽するなんて、酒を飲まうと思つて、早くしないかい」

「ハイハイ友達の好みで、チツト許り大目に見て呉れても。好ささうなものだなあ」

よしひこ と芳彦は時彦の耳に口を寄せて囁く。かくして祭典は無事に済みけるが、肝腎の御供へ物の魂はどうしても出て来ない。

ときひこ 時彦「サア御祭が済んだ。約束の通り御神酒を頂かして貰はうかい」

たよりひこ 田依彦「まだまだ待てまで、俺のいふ通りにして魂を出すのだ」

と云ひながら日の出神に目配せした。日の出神は時彦を後手に廻し堅く縛り上げた。たまふ。田依彦は芳彦の手を後に廻し、是れまた同じく縛り上げたり。二人は泣き聲を出しながら、

「オイ田依彦、アンマリじゃないか。田依彦、頼りに思ふこなさまはナンデこの様に無情いぞよ。アーン アーン アーン」

田依彦「貴様らは狂言をするのか馬鹿ッ！ 飲みたけりや飲まして遣らう」
と言ひながら、匂ひの高い甘さうな酒をこの瀧壺から大の柄杓に汲み上げて、二人の口先に交る交る突付ける。二人は舌を出して飲まうとする。田依彦が、

「ドッコイさうは行かぬ」

と後へ引く。また杓を出す。舌を出す。また後へ引く。突出す。舌を出す。杓を引く。忽ち時彦は「カツ」と聲を出した矢先に、卵の如き焼け石が飛出し瀧壺の中に「ジュン」と音を立てて落としみける。芳彦の咽からもクワツクワツといふ音がして、二つの焼石が飛び出し瀧壺の中に落としみける。芳彦は、
「アア俺もう酒の匂ひを嗅ぐのも嫌になつたよ。酒は嫌ひだよ、酒は嫌ひ 嫌ひ」

と首を振りだす。田依彦は、

「今迄アレほど好きな酒を嫌ひといふことがあるか、飲め 飲め」

と杓を突出す。芳彦は悲しさうに泣き出しける。

「そんなら好し」

と田依彦は芳彦の縛を解く。芳彦は目を、ギロギロさせながら恨めしさうに酒の

瀧壺を眺め居る。田依彦はまた杓に酒を汲んで今度は時彦の鼻の先に突出す。時

彦は舌を出す。田依彦は、

「オツトドツコイそれやらならぬ」

と杓を後へ引く。また杓を出す。舌を出す。また後へ引くと俄に「クワツクワツ

クワツ」と三聲叫びしその途端に咽から焼石三箇一度に飛び出し、酒の瀧壺の中

に「ジュンジュンジュン」と音をさせて落ち込みにける。田依彦は、

「サア時彦御祭は済んだ。御供物も是れで終ひだ。何ぼなと酒を飲め」

と杓に酒を汲んで口の邊へ持つて行く。時彦は目を塞ぎ口を閉ぢ、首を左右に振

つて、

「もうもう酒は匂ひを利くのも嫌だ。酒は嫌ひだ、勘忍々々」
と頭を左右に振る。日の出神は時彦の縛を解きけるが、是れぎり二人は酒の匂ひを嗅ぐのも嫌になりたりける。ここに時彦、芳彦は龍宮島の宮の造營を命ぜられ、「久久神、久木神」といふ名を貰つて住家を造る役目となりぬ。
(大正一一・一・三一 舊一・四 谷村眞友録)

第二章 飲めぬ酒(三二一)

またもや海面は波荒く猛り狂ひ、出帆を見合はすの止むなきに致り、風を待つこと殆ど一ヶ月に及びける。

この島は潮満、潮干の玉を祕めかくされ、豊玉姫神、玉依姫神これを守護し給ひつつありしが、世界大洪水以前に、ウラル彦の率ゆる軍勢の爲に玉は占領され、二柱の女神は遠く東に逃れて、天の眞名井の冠島、沓島に隠れたまひし因縁深き

島なりける。

その後にはウラル彦の部下荒熊別といふ者、この島を占領し、數多の部下を集め、酒の泉を湛へて、體主靈從のあらむかぎりを盡しめたり。然るに天教山に鎮まり給ふ神伊邪那岐神はこの島の守護神として眞澄姫命を遣はし給ひぬ。それより荒熊別は神威に怖れ、夜陰に乗じて常世の國に逃げ歸つたりける。その時の名残として、今に酒の泉は滾々と湧き出て居たるなりき。

日の出神は眞澄姫命の神靈を祭る可く、久々神、久木神に命じ、大峽小峽の木を伐り、美しき宮を營ましめたまふ。是を龍宮島の龍の宮といふ。而して田依彦をこの島の守護神となし、名を飯依彦と改めしめたまへり。

久々神、久木神はこの島の人々をかり集め、宮殿造營の棟梁として忠實に立働きぬ。島の谷々には木を伐る音、削る音、人の叫び聲盛んに聞えける。

日の出神は海邊の見はらし佳き高殿に昇りて、海上の靜まるを待ちぬたまひぬ。山の奥には彼方にも此方にも、斧鉞の音丁々と聞え盛に伐木しめたり。

「おい、皆一服しやうじやないか。いま久々神があちらへ行きよつたで、叔母の

死しんだも食じき休やすみと云いふ事ことがあるよ。鬼おにの様やうな大將たいしやうが彼方あつちへ行いつた留守るすの間まに、鬼おにの來こぬ間まの洗せん濯たくだ。おいおい、休やすめ休やすめ

「おい皆みなの奴やつ、一いっ緒しょに休やすまうかい」

「それでも休やすむと音おとが止とまるから、また吠どな鳴なられるよ」

「休やすんで、そこらの木きを叩たたいて居をればよいワイ」

「一いっ體たい、宮みやを建たてるとか云いつて、まるで吐と血けつの起おこつた様やうに、夜よさにも俺おいらを寢ねさ

さずに、ひどく酷こきつ使つかひよるじやないか。結けつ構こうな酒さけはあーして湧わいて居をるのに、飲の

まれぬなどと吐ぬかしよるし、堪たまつたものじやない。合あひ間まには酒さけ位くらゐ、ただ湧わいて居を

るのじやもの、飲のまして呉くれたつてよかりさうなものじやないか。一いっ體たいこりや何なん

の宮みやだらう」

「酒さけを飲のまさぬから、お前まへ達たちア腹はらが立たつ、その腹はらを立たてさせぬため、神かみさまを祭まつ

らすのだ。それで何なんでも、腹はらが【たつよ】姫ひめとか、眞ます澄み姫ひめとか柀ます吞のみ姫ひめとかいふ神かみ

さまじやさうだよ」

「【けたい】な神かみさまだね。立たつものは腹はらばかりぢやない。疝かん癪しゃくも立たつし、鳥とりも

立つし、立瘡姫の神やら、立鳥姫の神も祭つたらどうだらう」

「馬鹿いふない。それまた彼處へ痛い奴さまが来たぞ。それぞれ釘の神さまだ」

「釘ぢやない。久木神さまといふのだい。なまくらをして居ると、首きりの神さまにならつしやるぞ」

かかる處へ久木神は廻り來たり、

「オー、皆の者御苦勞だな。酒が飲みたさうな顔をして居るが、酒はあまり飲ま

ぬがよいぞ。俺も今まで酒が好きだつたが、たうとう嫌ひになつて了つた。好き

なもの無理に止めよと云つても、止むものぢやない。お前たちは充分に酒を飲

んで満足したら、しまひには舌がもつれ口が痺れ副守が飛出して酒が飲めなくな

るかも知れぬぞよ。飲みたい飲みたいと思つて辛抱して居ると、根性が曲つてよ

く無い。酒は百薬の長だ、御神酒あがらぬ神は無いから、お前たちも神さまにな

りたくば、ちつとも遠慮は要らぬ。自然に湧く酒だから遠慮なしに飲んで來い」

と云ひ捨てて、この場を立ち去る。後見送つて、

「おいおい、久々神は酒を飲むなと、喧しう吐かすが、いま來た久木神さまは流

石に苦勞人じやなあ。根性が歪ンではいかぬから、飲みたい丈け飲ンで来いと云ひよつたぞ。お許しが出たのだ。天下御免だ。飲ンで来うかい」

「よからう、よからう」

と、大勢は先を争うて、酒の湧き出る瀧壺指して走り行く。

来て見れば酒の泉の瀧壺は、千引の岩にてすつかり包まれ、處々に人の口位な孔が上面に開いてをる。

「やいやい皆の奴、久木神も腹が悪いじやないか。こんな巨大な岩で、何時の間にもやら、ぴつたりと蓋をして置きよつて、飲みたけりや飲ンで来いなんて、俺らを馬鹿にするじやないか」

「さうだな、しかし其處に孔が開いて居るじやないか。その孔から口を突込んだらどうだい」

「おー、それもさうだ。皆の奴ここから飲まう飲まう」

一同は岩蓋の上に取り縋つて、その孔より舌を突き出して見てゐるが、おい甘さうな酒は澤山あるが、舌が届かぬワイ。もう一分といふ所だ」

「貴様舌が短いのだ、どれどれ俺が飲んで見てやらう」

「貴様は何時も舌の長い奴だ。舌長に物を吐かすから、こんな時にや重寶だ。やつて見よ」

「エヘン」

と咳拂ひしながら、岩の孔から舌を突込んで見たが、是も届かない。交る交るやつて見たが、どうしても酒の所までは、間隔があつて嘗めることが出来ない。しかしその孔からは何とも云へぬ馨しい酒の匂ひがして居るので、各自に口を當て匂ひを嗅いだ。喉は各自にごろごろ唸り出して、腹の中の焼石は残らず酒壺に向つてジユンジユンと音を立てて、落ち込みにける。

それよりこの郷の人間は、酒の匂ひを嗅ぐさへも嫌になり、神の教をよく守り、飯依彦神の指揮に従ひて、名にし負ふ龍宮島の樂しき生活を送りたりける。

（大正一一・一・三一 舊一・四 井上留五郎録）

第二章 龍宮の寶〔三二二〕

日の出神は飯依彦をして、龍宮城の國魂、眞澄姫の御魂を宮柱太敷立て、鎮め祭らしめ、ここに祝姫、面那藝、天久比奢母智、國久比奢母智を伴ひ、順風に帆を揚げ西南を指して進み行く勇ましさ。飯依彦を始め久久司、久木司は埠頭に立つて、この船を名残惜し氣に見送つた。飯依彦は白扇をひらいて歌ひながら此の一行を見送りぬ。

高天原に宮柱 千木高知りて永久に

鎮まり居ます伊奘諾の 神の命や木花姫の

貴の命の御教を 造り固めて黄金の

山の麓に現れませる 三五教の大神の

教を四方に敷島の 心も清き宣傳使

世は常暗となるとても 御稜威輝く大空の

日の出神や祝姫

外三柱の神人が

常世の國へ鹿島立

見送りまつる我心

風も凧げ凧げまた雨も

降らずに波も平けく

いと安らけく出でませよ

神徳の波に照らされて

心の暗も晴れ渡り

名さへ目出度き飯依彦の

命と貴き名を負ひて

依さし玉ひし龍宮の

常磐堅磐の島守は

心も眞澄の姫神の

宮に仕へて三五の

清き教を遠近に

心を盡し身を盡し

仕へまつらせ日の出神

名残は盡きぬ波の上

いと安らけく出でませよ

うら安らけく渡りませ

と挨拶にかへて歌ふ。今まで田依彦と云はれし時にはその身魂も下劣にして、一つの歌を歌ふにも野趣を帯び居たるが、ここに飯依彦と云ふ神名をたまひ、この

島の守神たる御魂の眞澄姫神の神徳に感じて、かくも優長なる歌を歌ふことを得たるは身魂の向上したる證據なるべし。

久久司は又もや歌を歌ふ。

時は待たねばならぬもの 時が来た来た時彦の

好きな酒まで止める時 時のお蔭で時彦も

天から下つた生神のお目に留まつて久久司

飯依彦に従うて 眞澄の姫によく仕へ

きつとこの島守ります 後に心は沖の船

馳せ行く帆柱打ち眺め 隠るまでも拜みます

どうぞ御無事でお達者で この海御渡り遊ばせよ

また逢ふ時もありませう 逢うたその時や百年目

二人の仲は芳彦の 離れぬ私は釘鋸

必ず案じて下さるな 尊き日の出神様よ

その他の尊い宣傳使

これでお別れ致します

と扇をひらいて歌ひ、舞ひ、この船を見送りぬ。久木司は、

「私は歌は出来ませぬ、踊つてお別れいたします」

と口の奥にて何か小聲に囁きながら、大地を踏み轟かせ、汗をしばつて手振足振

面白く踊り狂ひぬ。船中の人々も見送る數多の神人も一度にどつと哄笑したり。

船は容赦なく纜を解いて櫓の音ぎいぎいと響かせながら、追々岸を遠ざかり行く。

船頭は舳に立ちて唄ふ。

「ここは龍宮の大海原よ、可惜寶は海の底」

と海上の風に慣れたる聲を張り上げて繰り返し繰り返し唄ふ。日の出神は、

「オイ船頭、今お前の唄つた歌は、あたら寶は海の底といったなあ、それや又ど

ういふ譯か聞かして呉れないか」

「ハイ左様でございます。この頃のやうな春の海では判りませぬが、やがて秋が

来ると海の底が「ハツキリ」と見えます。それはそれは綺麗な金や銀が海の底一

面に山のやうになつて居ます。恰度この下邊りは最も多い處です」

「お前たちはその綺麗な寶をどうして採らぬのか」

「エイ滅相もない。この海の底には結構な寶も澤山ありますが、恐いものも澤山

あります。太い太い龍神さまが、金や銀の鱗をぴかぴかさして誰れも採らないやう

に守つてゐらつしやる。この海の底に居るものは、鯛でも、蝦でも、蛸でも皆金

や銀の色をしてゐます。蝦一匹でも釣つたが最後、龍宮様が怒つてそれはそれは

豪いこと海が荒れます。それで誰も雑魚一匹この邊では捕りませぬ。大きな聲で

物いつても此處では龍宮様に怒られます。龍宮さまの好きなのは只歌ばかりです。

歌ならどんな大きな聲で唄つても構やせぬが、妙な話をしたり、欲な話でもしや

うものなら、それはそれは恐ろしい目に遭はされます」

「さうかい。龍神といふ奴よほど歌の好きな奴と見えるな」

「もしもしそんな失禮な事をおつしやつたら龍神さまに怒られますよ。龍神様は

よほど暢氣な御神ぢやと云ひ直して下さいませ」

と云ひながら顔の色を變へて、ぶるぶる慄ひゐる。

「何心配するにや及ばぬ。俺がこれから龍神に一つ談判して、その寶を見せて貰はう。もし龍神殿、乙姫の眷屬殿、我は日の出神ぢや、寶を一遍見せて呉れよ」と云ひも終らず、たちまち海面は四方八方にまん圓き渦を巻ききたりぬ。船頭は驚いてますます慄ひ上りゐる。「ブク」ツと音がすると共に大きな金塊が波の上に浮き出て、次で右にも左にも、前にも後にも數限りのなき金銀、眞珠、瑪瑙、瑠璃、碑磔などの立派な寶玉は、水面に浮き上り、實に何とも知れぬ美觀なりける。日の出神は、
「もうよろしい、乙姫殿に宜敷云うて下さい」
と言葉終ると共に浮き出たる諸々の寶は又もやぶくぶくと音をさせて海底に残らず潜みける。船客一同は手を拍つてその美觀を褒めたり。船は悠々として西南に向つて進み行く。

(大正一一・一・三一 舊一・四 加藤明子録)

第二三章 色良い男（三二三）

船頭は又もや立つて船歌を唄ひ始めたり。

『金は世界の寶と聞けど、ここの寶は手に合はぬ』

と歌ひながら進み行く。船頭は日の出神に向ひ、

『漸く龍宮島の區域は離れました。これから先は何んな話をしても構ひませぬ。

どうぞ珍らしい話を聞かして下さい。長い海の上、嘸御退屈でせうから、充分面

白い話をして下さいませ』

と、荒つぽい船頭に似ず日の出神に向つては、力限り丁寧な言葉を列べ立てたり。

而て一般の船客に向ひ、

『おい、皆の御客さまよ、是から何んな話をしてもよいわ。もう龍宮島の上は越

えた。面白い歌でも唄はつしやれ』

船客の中から、

『あゝヤレヤレ、口に蟲が湧くかと思つた。これからチツと喋らして貰はうかい。

おい船頭衆、何言つても好いかい」

「生命の洗濯ぢや、面白い事を話さつしやい」

「何うも立派な寶が浮いたね。一つ俺も欲しかった。彼れ一つ有つたら、一生涯

親子兄弟が「呑めよ騒げよ一寸先は暗よ」と云つて、ウラル彦さまのやうに暮さ

れるのに、一つ位くれたつて好ささうなものだに、龍宮の乙姫といふ餓鬼や、よ

つぽど欲な奴ぢやナア」

「欲な奴は皆、龍宮の乙姫見たやうな奴だと云はうがな、欲有る奴ぢやから偉い

のだ。「ヨク」無い奴は即ち悪いのだよ。「よく」よく思案をしてみれば、金が

仇の世の中か」

「何を吐かすのだい。貴様の云ふ事は、チツとも分りやしないよ」

「分らぬ筈だよ。深い深い海の底に隠してあるもの、分つたら貴様のやうな

欲心坊が、みな持つて歸ンで了ふ。それで乙姫様が分らぬやうにして御座るのぢ

や」

「益々分らぬことを言ふ奴だなあ」

「そんなことは牛の爪だい、先から分つてらあ」

「そんな【けなり】さうな話はやめてくれ。何だか羨ましくなつてきた。それよりも酒を呑んで喧嘩でもして見ようかい。俺が呑まぬ役の狸彦とか、狐彦とかになるさ。貴様らは徳利彦と、酔拂彦になつて歌を唄つて酒を呑むのだ。さうすると俺の狸彦が、貴様の頭をポカンとやるのだ。さうすると日の出神さまが、貴様は狸かいとおつしやるのだ。さうすると夕々々、夕々々、夕々々で御座いますと云ふのだ。然り而して日の出神さまが、其處に居るのは徳利彦か、酔拂彦かと御訊ね遊ばすのだ。そこで俺がト、ト、トツクリと分りませぬと囃ますのだ。さうすると今度は日の出神さまが、そこに居るのは酔拂彦かと仰有るのだ。さうすると俺がヨ、ヨ、ヨ、ヨウ酔うてゐますと囃ますのだ。さうすると日の出神さまが、御感心遊ばしてな、俺にはまた色好い男とか、何とかいふ神名を下さるなり、貴様にはク、ク、ク、ク、黒狸とか、ク、ク、ク、ク、黒狐とかいふ名を賜つて、龍宮島の神さまにして下さるのだ」

「やい、貴様は色好い男なんて吐かしよつて、俺を黒狐の黒狸と、何だい馬鹿に

するな。それぞれ日の出神さまが、大きな目を剥いて睨んでゐらつしやるぞ。蝸牛蟲のやうに、すつこめすつこめ」

と他愛なく馬鹿口を叩いて酒をチビリチビリと呑んでゐる。船頭は、

「オイ、御客様、常世の國に行くつもりだつたが、お前達が仕様もない話をするものだから、さつぱり風が變つて了つたよ。これは如何しても一旦は、筑紫の島へ押流されにや仕方が無い。これもお前達の身から出た錆だ。必ず船頭を悪いと思つてくれるなよ」

「船頭、吾々の前途を見届けるのは、船頭の役ぢやないか。飯は船中の蝨のやうに SEND SEND がかかつて喰ふなり、そんなことで船商買は務まら【SEND SEND】だアハ、ハ、ハ、」

霧を【すかし】て遙向方に、波に浮べる【コンもり】とした島かげ現はれたり。船頭は、

「やあ、たうとう筑紫の島が見えました」

日の出神は立ち上り、筑紫の島に向つて、またもや歌を唄ひたまう。

(大正一一・一・三一 舊一・四 外山豊二録)

第五篇 亞弗利加

第二四章 筑紫上陸 (三二四)

日の出神は唄ひ玉ふ。

天津御空も海原も
鎮まりぬます冠島
寶の島を後にして

眞澄の姫の永遠に
名さへ目出度き龍宮の
科戸の風の吹くままに

流れ流れて今ここに 筑紫の島の島影を
 幽かに眺め皇神の 深き仕組も不知火の
 わが身の魂の愚さよ 心つくしの益良雄が
 深き仕組を駿河なる 富士の御山に千木高く
 鎮まりぬます木の花姫の 神の御言を畏みて
 鹽の八百路を渡りつつ 心の空も純世姫
 神の命の永遠に 鎮まりぬますこの島は
 天津御神の造らしし 寶の島と聞ゆなる
 珍の島根を目のあたり 越えて又もやこの島の
 寶を探る樂さは 黒白も分かぬ闇の世を
 天津日の出の東天に 現はれ給ひし如くなり
 現はれ給ひし如くなり

〇
 オイ、今の歌を聞いたか。この晝中に目の玉の闇だとか、暗がりだとか仰有つ

たじやらう。東ひがしの空そらから、お日ひさまが出でるとか聞きいたじやらう、一寸ちよつと可笑をかしいじやないか。日に天てん様さまは西にしの空そらに傾かたむいてあつしやるのに、苟いやしくも人ひとを教をしへる宣せん傳でん使しともあるものが何なんであんな譯わけの分わからぬ事ことを言いふのだらうね」

「貴き様さまはそれだから困こまるのよ。何なんでもかでもチヨツピリと聞きき「はつり」よつて、知らぬ者ものの半はん分ぶんも知しらぬくせに、知しつた者もののやうにナゼそんな脱だつ線せんした講かう釋しやくをするのだ。貴き様さまと一いつ緒しよに連つらなつてゐると、俺おれアもう情なさけない。あまりわけが分わからなさ過ぎすぎア」

「分わからぬ分わからぬて、何なにが分わからぬ。分わからぬとは貴き様さまのことじやないか。嬢かかアや子のあゝある「ざま」をしよつて、五十ごじふの尻けつを作つくつて居をり乍ながら、貴き様さまのこの「おさん」のへしよつて、嬢かかアに見みつけられ、それがために嬢かかアは悋りん氣きの角つのを振ふるひ立てて、死しぬの生いきるの暇ひまをくれのと、毎まい日に日ひ日に犬いぬも食くはぬ喧けん譁わをおつ始はじめ、近きん所じよの大おほ迷めい惑わくだつたよ。酋しゆ長ちやうの木も兵へい衛ゑさまが心しん配ぱいして、いろいと道だう理りを説とき諭さとして嚙かんで飲のむやうにおつしやつても、貴き様さまは死しんでも彼あいつ奴つとは別わかれぬとか、分わからぬとか吐ぬかしたぢやないか。ソレに俺おれが分わからぬもあつたものかい」

「サアサア船が着きましたよ。お客さま、また此處で十日ばかり風を待たな、常世の國へは行けやしない。グツグツしとると、この船は何處へ行くか分りやしないぞ。早う立たぬかい」

「八釜しう言わない。立てらりやせぬわ」

「立てないつて貴様何して居るのだい」

「貴様ら先へ上れ、俺は後から上る」

「腹の悪い奴だナ。皆上つた後で何か忘れ物でもあつたら、猫【ババ】でもキメ

込まうと思ひよつて【ケツ】が呆れらア」

「その【ケツ】だよ」

「貴様【ケツ】て何だい。ははあ坐つたままで、糞を放れよつたのだな。ハ、ー

それで讀めた。じつとしてをれ。バタバタすると臭いぞ。臭い野郎だナ」

船頭は心せはし氣に、

「おい、早く立たぬか」

「はいはい、今立ちます」

□ そのババたれ腰は何だい

□ 本當にタレたのだい

船頭は眞赤になりながら、

□ すつくり掃除せい。掃除せにや上がらせぬぞ。糞放奴が

日の出神は二人の宣傳使と共に上陸し、
又もや宣傳歌を歌ひながら、
後に後をも見
ずに奥深く進み行く。

(大正一一・一・三一 舊一・四 櫻井重雄録)

第二十五章 建日別〔三二五〕

大海原を撫で渡る
常世の波の重波の

科戸の風の吹き廻し
寄せ来る儘に思ひきや

筑紫島なる亞弗利加の
廣き陸地に着きにけり

暗世を照らす天津日の
光を浴びて照妙の

衣を捨てて蓑笠の
身装も脚もいと軽く

崎嶇たる山に登り來る
ここに一條の急潭は

怪しき巖と相打ちて
激怒突喊飛ぶ沫の

萬斛の咳咤を注いで
怪岩の面を打てば

巖はその奇しき醜き
面を背けて水は狂奔する

奇絶壯絶勝景の
谷間の小徑に差懸る

春とはいへど蒸暑き
日に亞弗利加の山の奥

暫時木蔭に佇みて
この光景を三柱の

名さへ芽出度き宣傳使
飛瀑の聲と相俟つて

壯快極まる宣傳歌
天地の塵を拂拭し

山野を清むる如くなり。

三柱の宣傳使は、この谷川の奇勝を眺め、日の出神は、

「あゝ實に天下の絶景だ。吾々も宣傳使となつて、天下を横行闊歩して來たが、

未だ嘗て見ざる壯快な景色である。山といひ、谷川といひ、實に吾々の心境を洗

ふやうな心持がするね」

祝姫「左様でござります。長い間波の上の生活を續けて、少々勿體ないこと乍ら

飽き氣味になつてゐましたが、世界はよくしたものですな。かう云ふやうな天下

の奇勝を見ることの出来るのも、全く神様の御引合はせ。旅は憂いもの、辛いも

のと申せども、宣傳使でなくては到底かう云ふ絶景を見ることは出来ない。吾々

は神様に感謝を捧げねばなりませんまい」

面那藝「あゝ時に何だか谷底に流れの音か、猛獸の呻き聲か、人の叫び聲か、

「はつきり」分りませぬが妙な響がするではありませぬか」

日の出神は、衝と立つて耳を澄しながら、

「は、如何にも何だか合點のゆかぬ唸鳴り聲ですな。何は免もあれ、私はその

聲を目標に調べて來ませう。貴使は此處に暫く待つてみて下さい」

二柱は口を揃へて、

「いや、吾々も御伴いたしませう」

日出神「然らば私が一步先に参ります。貴下は見え隠れに跟いて来て下さい。萬一の事があれば合圖を致しますから、こちらが合圖をするまで、出て来てはなりませぬぞ」

と云ひながら、日の出神は谷深く聲を搜ねて進み行く。

行くこと二三町斗り、此處には見上ぐるばかりの大岩石が谷間に屹立し、五六尺もある大なる巖窟が、彼方にも此方にも、天然に穿たれあり。髪の毛の赤い、顔の炭ほど黒いやや赤銅色を帯びた數多の男が、幅の分厚い唇を鳥の嘴のやうに突出した奴數十人安座をかいて、一人の色の蒼白い少しく眼の悪い男を中に置いて何か頻に擲揃つてゐる。日の出神は、木蔭に身を忍ばせこの様子を聞き入つた。「やい、貴様は三五教の宣傳使とか、何とか吐かしよつて、この島に案内も無く肩の凝るやうな歌を歌つて参り、俺らの一族を滅茶々にしよるのか。此處を何とか心得てをる。勿體なくも常世の國の常世神王様の御領分だぞ。それに貴様は大

きな面を提よつて、この世が變るの、善と惡とを立別けるのと、大きな喇叭を吹きよつて何のこともない。もうこれ限り宣傳使を止めて、俺らの奴隷になればよし。ならならぬで是から成敗をしてやる。返答せい」

一人の男は、少しも屈せず四邊に響く聲を張上げて、

「神が表に現はれて 善と惡とを立別る」

「こら、【しぶとい】奴だ。未だ吐かすのか。おい、皆の奴、石塊を持つて来い。

此奴の口を塞いでやらうぢやないか」

「おい、宣傳使、此處は畏れ多くも常世國に現はれました伊奘册命様が、常世神

王といふ偉い神様を御使ひになつて、その御家來の荒熊別といふ力の強い御威勢

の高い神様が、御守り遊ばす結構な國だぞ。此處の人間は毎日々々、神様の御蔭

で、一つも働かず無花果の實を食つたり、橘や、橙その他の結構なものを頂いて、

梨の實の酒を醸つて「呑めよ騒げよ一寸先や暗よ、暗の後には月が出る」と日々

勇んで暮す天國だ。それに何ぞや、七六ヶ敷い劫託を列べよつて、立替るも立別

るもあつたものかい。さあ、これから皆寄つて此奴を荒料理して食つて了つてや

らうかい」

「やい、そんな無茶をするない。此奴は剛情我慢の奴だが、併しあの細い目から恐ろしい光を出して居るぞ。何でも天から降つて来た神さまの化物かも知れやしない。うつかり手出をしたら、罰が當るぞよ」

「氣の弱いことを言ふな。吾々は伊奘諾神様の立派な氏子だ。天から降つたか、地から湧いたか知らぬが、こんなものの一疋位にびくびくするない」
一人の男、聲を張上げて、

「神がこの世に現はれて 善と悪とを立別ける

天地四方の國々や 島の八十島八洲國

教を開く宣傳使 神の恵みも大島や

小島の別の神司 眼は少し悪けれど

汝の眼に映らない 心の眼は日月の

光に擬ふ小島別 わけも知らずに言さやく

醜しこの曲津まがつの集あつまれる

虎狼とらほかみや鬼大蛇おにをろち

熊襲くまその國くにの山やまの奥おく

山路やまぢを別わけて進すすみ來くる

われは汝なんぢの助たすけ神がみ

世よは常暗とこやみの熊襲國くまそくに

残のこる隈くまなく照てらさむと

綾あやの高天たかまを立出たちいでて

心こころのたけの建日たけひ別わか

神かみの命みことと現あらはれて

この國魂くにたまと天津日あまつひの

神かみの命みことのよさしなり

神かみの命みことのよさしなり

荒あらぶる神かみよ醜人しこびとよ

善ぜんと惡あくとを立別たてわける

誠まことの神かみの神勅みことり」

と歌うたひ始はじむるや、一同いちどうは耳みみを塞ふさぎ、目めを閉とぢ、

「やあ、こいつは堪たまらぬ」

と大地だいちにかぶりつく。この時ときまたもや、森林しんりんの中なかより宣傳歌せんでんかが聞きえきたりぬ。

(大正一一・二・一 舊一・五 外山豊二録)

第二十六章 アオウエイ〔三二六〕

小島別は尚も進むで宣傳歌を歌ふ。數多の人々は息を凝し一言一句その歌に胸を刺さるる如く、苦しみ呻き冷汗淋漓として雨の如く、瀧の如くに流し、焦暑さと宣傳歌に責められて、頭はますます「ガンガン」と痛み出したり。小島別は大喝一聲、

「赦す」

と聲をかくれば、諸人はその聲を聞くと共に頭痛はぴたりと止まり、忽ち各自は大地に両手を突き、犬突這となりて謝罪の意を表したりける。

小島別は眼を擦りながら、諄々として三五教の教理を説きければ、いづれの人々も感に打たれて恐れ入り、宣傳使の顔を穴のあくほど眺め入りぬ。このとき巖窟の奥より何とも云へぬ呻き聲聞こえきたる。人々は耳を聳立て眼を見張り、期せずして巖窟の方に向き直れば、奥深き暗き巖窟の中より茫然として白き怪しき影が、蚊帳を透して見るが如く「ぼんやり」と現はれ、不思議な聲にて、

「アハ、ハ、ハ。オホ、ホ。ウフ、フ。エ、エ。ヘ、ヘ。イヒ、ヒ。アハ、ハ、ハ。オホ、ホ。ウフ、フ。エ、エ。ヘ、ヘ。イヒ、ヒ。」

腰ぬけ野郎、屁古垂野郎、「ばばたれ」野郎、「ひよつとこ」野郎、弱蟲、糞蟲、雪隠蟲、吃驚蟲ども、「とつくり」と聞け。ここは何と心得てゐるか。勿體なくも常世國に現はれ玉へる、國の御柱大御神伊弉册命のその家來、常世神王の隠れ場所と造られし、一大祕密の天仙郷、この八つの巖窟は、八頭八尾の大蛇の隠れ場所ぞ。その眷屬の貴様たちは、たつた一人の宣傳使小島別の盲どももの舌の先にちよるまかされ、木の葉に風の當りしごとく、「びりびり」致す腰抜け野郎、馬鹿ツ、馬鹿々々々ツ」

と唸鳴り立てたれば、數多の黒坊はこの聲に二度吃驚、

「ヒヤツ！ こいつは耐らぬ」

と亦もや大地にべたりと倒れる。小島別は巖窟に向ひ兩手を組み「惟神靈幸倍坐世」と唱へながら、

「我々は、畏れ多くも天教山に現はれ給へる撞御柱大御神、天御柱大御神、木花姫の神教を開かせたまふ黄金山下の三五教の守神、埴安彦神の宣傳使小島別なる

ぞ。何者ならば断りもなく筑紫の島に打ち渡り、この巖窟に巢を構へ、惡逆無道の限りを盡し、天命つひに免れ難く、この巖窟に忍び入るこそ汝惡神の運の盡き。早く汝が素性を名乗り、惡を悔ひ善に立ちかへり、撞御柱大神に心の底より謝罪せよ。否むに於ては我に天授の寶劍あり。サア如何ぢや。抜いて見せうか抜かず
に置かうか。醜の曲津見返答致せ

巖窟の中より亦もや、

アハ、ハ、ハ、阿呆につける藥はないワイ、オホ、ホ、臆病者の空威張り奴、ウフ、フ、迂闊者の世迷ひ言、エへ、へ、得體の知れぬ宣傳使、イヒ、ヒ、行きつきばつたりの流浪人、吾は熊襲の大曲津神、曲つた事は大の好物、汝が頭の【ど】天邊から鹽でもつけて嚙ぶつて喰はうか、股から引き裂いて炙つて喰はうか、八岐の大蛇の大棟梁、蛇々雲彦とは吾事なるぞ。返答聽かう、小島別の宣傳使

と四邊に響く大音聲に唸鳴りつけたれども、小島別は莞爾として、アハ、ハ、ア、熊襲の國の枉津神、味をやり居るワイ。正義に刃向ふ刃は無いぞ。

善と悪とを立別る神の使の宣傳使だ。眞澄の鏡に照されて、赤恥搔き頭を搔いて
吠面かわくな。かく申す某は、天教山に名も高き神伊奘諾大神の遣はせ玉へる、
心も膽も天下無雙の太柱、太い奴とは俺の事、喰ふなら見事喰つて見よ。古手な
事をして泡を喰ふな」

巖窟の中より、

「アハ、ハハ、ハハ、仇阿呆らしいワイ。オホ、ホハ、ホハ、脅喝文句のお目出度さ。ウフ、フー
迂闊者の迂闊事、熱に浮かされて「うさ」事を吐くな。エヘ、ヘヘ、豪い元氣だの
う、閻魔も裸足で逃げやうかい。イヒ、ヒヒ、ヒヒ、勢ばかり強うても心の弱味は見え透
いた。イヒ、ヒヒ、ヒヒ、憐愍いものだ。いま俺の手にかかつて寂滅爲樂頓生菩提、一寸先
の見えぬ盲ども、これを思へば憐愍うて涙が溢れる。アハ、ハハ、ハハ、悪の身魂の年の
明きとは貴様の事、悪の榮える例はないぞ。イヒ、ヒヒ、ヒヒ、いつまで身魂が磨けぬか。
オホ、ホハ、ホハ、己の事は棚に上げ、人を悪い悪いと慢心いたして其權幕は何の事だい。
ウフ、フー、フー、動きの取れぬ今日の首尾、迂闊出て来た偽宣傳使。エヘ、ヘヘ、枝の、
末の、貧乏神、腰抜け野郎の分際で、常世の國に使ひして、言靈別に騙されて、

龍宮城に歸つて何の態。イヒ、ヒー何時まで経ても改心せぬか、心の岩戸は何時開く、一度に開く梅の花、善に見えても悪がある。悪に見えても善がある。善と慈悲との假面を被り、吾物顔に天下を横行闊歩する小島別の偽宣傳使。この世の中、の穀潰し、生て益なき娑婆塞ぎ、地獄の釜のどん底に落ちてやらうか小島別、常世姫に玉拔かれ、言靈別に力の限り根限り、邪魔をひろいだ盲者の張本、何の面提げて臆面もなく三五教の宣傳使。アハ、ハー、ほんに世界は廣いものだなあ、オホ、ホー、ウフ、フー、エへ、へー、イヒ、ヒー、

と又も笑ひ出したり。

小島別は胸に鎚打たる心地、ハツと胸を衝いて思案に暮れゐたりける。

(大正一一・二・一 舊一・五 加藤明子録)

(第一九章) 第二六章 昭和一〇・二・二三 於徳山市松政旅館 王仁校正)

第二十七章

蓄音器〔三二七〕

小島別はこの巖窟の中より出る聲に、合點ゆかぬといふ身振りをしながら、以前の元氣に引かへて、蟲のやうな聲を搾り出し、

「さう仰有る貴方様は果して何れの神に坐しますや、御名を名告らせ給へ」
巖窟の中より大聲にて又も、

「アハ、、、あかぬあかぬまだ改心はできぬ。オホ、、、恐ろしい澁太奴ぢやな、ウフ、、、浮か浮かするな、この世は惡魔の巢窟ぞ、エへ、、、豪さうに威張つて歩く宣傳使、頭の先から足許まで好く氣をつけよ。イヒ、、、威張散らして龍宮の小島別の宣傳使、カ、、、必ず神を鯉節にいたすなよ、コ、、、小島別の盲ども、ク、、、腐つた魂の宣傳使、臭い物に蓋して歩く小島別、ケ、、、見當の取れぬ神の仕組、好く味はうておくがよい、キ、、、氣違ひじみた小島別、眞の神が氣をつける内に改心いたすが好いぞ、サ、、、さらりと迷ひを覺ませ小島別、天の探女の仲間入をいたすな、ソ、、、損と思へば手も出さぬ、我身の徳と思つたら牛の骨でも手を出さず、欲心坊の小島別、ス、、、好きぢや嫌ひと人に區別を立てる宣傳使。セ、、、脊に腹は替へら

れぬと甘い言葉に遁を打つて薄志弱行の張本人、シ、、、、知らぬ事をば知つたやうに法螺吹き歩く宣傳使」

小島別は縮上り、

「何れの神様か知りませぬが、もう改心いたします、これで許らえて下さいませ」
「夕、、、、」

「もう澤山です、どうぞ御免を蒙ります、骨身にこたへますワ」
穴の中より、

澤山でない、まだまだあるぞ、七十五聲の有らむかぎり教へてやらねば目が覺めぬ、ト、、、、當惑顔の宣傳使栃麵棒の小島別、トツクリ思案をするが好い、トテも逃れぬ此場の仕儀、トコヨの國に遣つてしもうか、トテも改心は覺束ないぞ、ツ、、、、月夜に釜を抜かれた様につまらぬ面した小島別、掴まえ所の無いやうな道にはづれた宣傳使、テ、、、、手柄顔して世の中を廻つて歩く宣傳使、チ、、、、智慧も力もない癖に、チツトの手柄を笠に被て、力の自慢の宣傳使。ナ、、、、長い間の慢神でお道のために艱難苦勞、救ひのためとは何の囃語、情

ないぞよ、思へば思へば涙がこぼれる小島別、ノ、ノ、ノ、ノ、喉から血を吐く神の胸、
よう汲みとらぬ宣傳使、又、ノ、ノ、ノ、ぬかるな氣をつけ小島別、ネ、ノ、ノ、ノ、熱心ら
しく見せかけて此世を誑かる小島別、二、ノ、ノ、ノ、日天様に叱られて、目さへ不自
由な小島別』

何れの神様が存じませぬがもう澤山でございます、これで御赦しを願ひます』
岩窟の中より一層大きな聲で、

ハ、ノ、ノ、ノ、恥かしいか、腹が立つか、神の言葉に齒節はたつまい、ホ、ノ、ノ、ノ、
ほうけ面して常世の國より龍宮城へ、肩怒らして歸つて来た小島別の信天翁、
フ、ノ、ノ、ノ、【ぶる】ぶる振ふ頭をかくしあやまり入つた宣傳使、へ、ノ、ノ、ノ、屁つ
ぴり腰の小島別、へなへな腰の宣傳使、ヒ、ノ、ノ、ノ、日暮に企みた梟鳥、夜食には
づれて小難かしい面をさらした小島別』

もうもう澤山でございます、解りました、貴神はウ、ノ、ノ、ウシト、ノ、ノ、トラ』
岩窟の中より、

マ、ノ、ノ、ノ、待て待て、まだある　まだある　まだあるぞ、曲津の正體ひきむい

て呉れる、盲目の宣傳使、老碌爺の小島別、ム、ム、ム、無理と思ふか小島別、蟲
が好くまい此方の言葉、無理と思ふか無理ではないぞ、昔昔の其の昔し、古き神
世の昔しより此世を守る無限絶對の生神、この方の姿は見えたか。メ、メ、メ、盲目
の分際で神の姿は解るまい。ミ、ミ、ミ、見えぬは道理目の帳、かき上げて神の光
を身に宿せ、ヤヤ、ヤヤ、大和魂と申せども、汝の魂は曇り切りたる【やまこ】騙、
知らず識らずの間に世人を迷はし騙す【やまこ】の立派な宣傳使、ヨ、ヨ、ヨ、世
の中に鬼は居ないと申して歩く腰拔の宣傳使、鬼は在るぞよ、この鬼神の姿が見
えぬか、ユ、ユ、ユ、幽霊の如きフナフナ腰で神の大道を開くとは片腹痛い、エ
エ、エ、縁の糸に繋がれて、斯程に曇つた魂さへ、神から綱をかけられて助けて
もらうた小島別、イ、イ、イ、何時まで言うても同じ事、今日かぎり宣傳使の役を
サツパリ返上せよ、言分あるか、違背があるか、何れになりと返答聞かう
「ハイハイどうも仕方ありません、平あやまりにあやまります、臍の緒切つて
から、こんな薄い目に逢うた事はありません、どうなりと神様の思召しにして
下さい」

「ラ、、、、、亂心賊子とは貴様のこと、これしきの小言に膽を潰し難を避け、易きにつかむといたす卑劣極まる宣傳使、リ、、、、理屈ばかり竝べたて月日をくらす小島別、ル、、、、累卵の危きこの世を振捨て、我身の安全を謀る卑怯未練の宣傳使、レ、、、、連木で腹を切る様なその場逃れの言譯いたす狡猾至極の小島別、ロ、、、、碌でもない嚙言世界にひろむる小島別、ワ、、、、我身の目的ばかり日に夜に企む小島別」

「モモ、何ンぼ神様でもあまりでございます。神様は善言美詞を御使ひ遊ばす筈だのに、あなたは亂言暴語を仰有いますが……」

「イヒ、、、、痛い痛い耳が痛からう、ウフ、、、、うっかり聞いて後悔するな、浮世の暗に彷徨ふ汝、狼狽者の宣傳使、エへ、、、、」

「モモもうこらへて下さいませ」

巖窟の中より、

「えぐいと思ふか俺の言葉、エヒ、、、、命が惜しいか小島別、忌々しいか、意見が合はぬか、鼫の最後屁、以後は必ず慎めよ。ガ、、、、我が折れねば餓鬼道

に落してやるが、ギ、ギ、ギ、義理も人情も辨へ知らぬ宣傳使なら止めて置け、
グ、グ、グ、愚にもつかない世迷言、愚圖愚圖いたすと日が暮るぞ、ゲ、ゲ、ゲ、元
氣の無さそなその面附、ゴ、ゴ、ゴ、劫託竝べたその報い、ザ、ザ、ザ、醜體さらさ
れて恥をかく、ジ、ジ、ジ、自業自得だ小島別、ズ、ズ、ズ、圖抜けた馬鹿の分際で、
づうづうしくも天下を廻る宣傳使、ゼ、ゼ、ゼ、善と惡とを辨へよ、善に見へても
惡もあり、惡と見えても善がある、善と惡との眞釣り合ひ、ゾ、ゾ、ゾ、存外澁太
い宣傳使、これでも改心いたさぬか」

「モシモシもう改心いたします。あまりと言へば餘りの雑言、御無禮ではござい
ませぬか」

「ダ、ダ、ダ、黙つて聞いてをれ、神を【だし】に致したその報い、チ、チ、チ、地
震、雷、火の車、好くも駄法螺を吹きをつたナ。ツ、ツ、ツ、圖抜けた間抜けの宣
傳使。デ、デ、デ、デンデン蟲の角生し、理屈を争ふ小癩面、ド、ド、ド、」
「ド、ド、ドウも恐れ入りました、どうも恐れ入りました。何卒これで御赦し下さい
ませ、どうもかうも頭が痛くて堪りませぬ」

巖窟の中より、

「胴欲と思ふか、何處の何國へ行つたとして、度胸の据らぬ宣傳使、どうして道教が開けやうか、バ、バ、バ、馬鹿を盡すも程がある、馬鹿に與ふる藥はないぞ、米搗き〔バツタ〕の腰のやうに稚櫻姫の目の前で腰をぺこぺこ何の態」

「モシモシ、岩の神様、もう澤山でございます。昔の棚卸までなさいまして、大勢の前でございます、私の顔は丸潰れ、チツトは大慈大悲の御心に、この世を造りし神直日、心も廣き大直日、ただ何事も人の世は、直靈に見直せ聞き直せ、身の過は宣り直せぢやございませぬか」

岩窟の中より、

「チ、チ、チツクリ聞かぬか、チレツタイか、地震の孫め、ビ、ビ、貧乏動ぎもさせぬぞよ、ブ、ブ、佛頂面の宣傳使、武運の盡きた小島別、べ、べ、便所の掃除が性に合ふ、尻の締りのつかぬ宣傳使、ボ、ボ、呆た面してボロボロ涙、パ、パ、パツパー服するがよい」

「ハイハイ有難う、やれやれアアもうこれで濟みたか、長い岩のやうな堅い御説

教を曲津か何が云ふのか知らぬが、ほんたうに豪い目に會はして、どつさり油を搾りよつた。しかし俺は夢でも見て居やせぬかな、一寸頬べたを捻つて見よう。ア、矢張り痛いな、一體全體岩の前で何のことだい。岩ぬは言ふに彌まざるが、この岩はほんたうに怪體な巖窟だ、まるで天然の安い蓄音器見た様だワイ。オイ蓄音器先生、ヤイ俺は天下晴れての宣傳使だぞ、俺でもお前の言ふやうな事は何でも言へるわい。なんぼなと言へ」

「ピ、ピ、ピ、ピ、ピ、ピ」

「ヨ、ンだ鶉でも居るのかな、オイ鶉の谷渡り、いくらでもピ、と噂れ、天下晴れての宣傳使だぞ、俺が黙つて聞いてやつて居れば、調子に乗りよつて殆ど言靈の七十五聲を竝べよつた、仕舞に往生しよつて何の醜態だい、腹下りが雪隠に行つたやうにピ、ピ」

このとき巖窟は百雷の一時に轟く如き大音響を立てて唸り出したれば、小島別は心碎け魂消ゆる許りに驚きて大地にぺたりと倒れける。

(大正一一・二・一 舊一・五 谷村真友録)

第二十八章 不思議の窟（三二八）

巖窟内の唸り聲は刻々強烈となり、百千萬の虎狼の一時に吼え猛るが如く、四邊の山々も木草も凡て一切のものを戦慄せしめたり。小島別は殆ど失神の状態にて、大地に仰向けに倒れたるまま、手足をビクビク慄はせ居たりける。日の出神は、

「オーイ、オーイ」

と合圖をすれば、この聲に應じて何處よりともなく祝姫の宣使と面那藝の宣使は現はれきたり、ここに三柱は小島別の倒れたる巖窟の前に立ち現はれ、日の出神は歌を歌ひ、面那藝の宣使は石と石とを両手に持ち拍子を取り、祝姫は日蔭葛を禪に掛け、常磐の松を左手に携へ右の手に白扇を廣げ舞ひ始めたり。

祝姫の歌、

「天と地との火と水の

呼吸を合せて國治立の

神の命の造らしし

心筑紫の神の島

大海原を取圍み

浦安國は豊の國

熊襲の國は神の園

常磐堅磐に築立てし

天の岩戸は是なるか

國治立の大神は

心の汚き八十神の

曲神の企みの舌の根に

懸らせ玉ひて天津神

日の大神の戒めを

受けさせ玉ひて根の國に

退はれませど皇神は

何も岩戸の奥深く

隠れ玉ひて世を忍び

天地四方の神人の

身魂を永遠に守ります

その勳功は千代八千代

常磐の巖の彌堅く

穿ちの巖の彌深く

忍ばせ玉ふこれの巖

忍ばせ玉ふこれの巖

岩戸を開く久方の

天津日の出の神言を

堅磐常磐に宣る神は

日の出神と祝姫

面那藝彦の三柱ぞ

浮船うきぶね伏ふせて雄を々をしくも踏ふみ轟とどろかす巖いはの前まへ

神かみの小島こじまの宣傳せんでん使し建日たけひの別わけと現あらはれて

天てんの三柱みはしら大神おほかみの任まけのまにまに上のほり來くる

されど心こころは常暗とこやみの未まだ晴はれやらぬ胸むねの闇やみ

心こころの岩戸いはとは締め切きりて開ひらかむよしも無なきふしに

惠めぐみも深ふかき國くに治立はるたちの神かみの命みことの分わけけ魂みたま

建日たけひの別わけの大神おほかみは天あまの岩戸いはとを開ひらかむと

導みちびきたまふ親心おやこころ神かみの心こころを不知しらぬ火ひの

小島こじまの別わけの宣傳せんでん使し千々ちぢの神言かみこと蒙かうむりて

心こころに懸かかる千萬ちよろづの雲霧くもぎり拂はらひ晴はれ渡わたる

御空みそらに清きよく茜あかねさす日ひの大神おほかみの御惠みめぐみに

常世とこよの暗やみも晴はれぬべし赦ゆるさせ玉たまへ建日たけひ別わけ

熊襲くまその國くにの守まもり神かみ人の心こころも清すがすが々と

誠まことの道みちに服從まつろひて心安うらやすらけく純世すみよ世よ姫ひめの

神の命の御魂をば　　これの巖窟に三柱
千木高知りて齋かひつ　　天津祝詞の太祝詞
宣るも尊き巖の前　　日の出神の言靈を
建日の別も諾なひて　　御心和め玉へかし

と涼しき聲を張上げ調子よく歌ひながら、汗を流し歸神して舞ひ狂ひける。面那
藝神は石と石とを打ち合せて面白く拍子をとりにしが、さしも猛烈なりし巖窟の大
音響は夢のごとくに止まりにける。小島別はムツクと立上がり細き目を開きなが
ら三柱の神を眺めて驚き、夢か現か幻か、合點の行かぬこの場の光景と、自ら頬
を抓めり指を噛み、
『ア、矢張り夢では無かつたかナア』

日の出神は、
『オー貴下は小島別の宣傳使、最前よりの貴下の様子、如何にも怪しく何事なら
むと、木蔭に佇み聞きをれば此巖窟の唸り聲、如何なせしやその顛末を詳細に語

られよ」

と尋ねられ、小島別は三柱の宣傳使に黙禮しながら、

「イヤモウ、大變でしたよ。私は神界に仕へてより、何一つ功名もいたさず、智慧暗き身の悲しさ、大慈大悲の大神の御心を誤解し普く天下を宣傳して、やうやうこの亞弗利加の島に参りましたのは一月以前のことです。國人の話に依れば、此處には立派な巖窟ありて、時々唸りを立てるといふ事。私も一つ修業の爲と思ひ、嶮しき山坂を越へ谷を渡りて、漸くこの巖窟に辿り着きし間もなく、色々の國人がこれこの通り参拜いたして、頻りに何事か祈つてをる。耳を澄して聞けば、常世神王の教を奉ずる人間計り、これでは成らぬと背水の陣を張りて、命を的に三五教の宣傳歌を歌ひ始めました。數多の人々は私の宣傳歌を非常に嫌つて四方八方より迫害せむとする。なに、吾々は天地の教を説く神の使の宣傳使だ。たとへ火の中水の底も、潜りて助けるは吾々の天職と、有らゆる勇氣を出して漸く彼らを改心させ、ホツト一息吐く間もなく此巖窟の奥の方より異様の姿臆と現はれ、「アハ、ハ、ハ、オホ、ホ、ホ」と嘲弄はれ、あらむかぎりの吾々

の弱點を竝べ立てられ、イヤハヤモウ埒もなくきつく油を搾られました。吾々は未だ身魂が磨けて居りませぬ。いよいよ一つ決心をして、今までの取違を改めねばなりません。

と大略を物語りける。日の出神は嚴然として宣るやう、

「ここは尊き神様の御隠家、建日別とは假りの御神名、やがて御本名を名乗り玉ふ時も來たるべし。貴下は此處へ永らく鎮まりて、この巖窟の前に宮を建て、純世姫命の御魂を祭り、熊襲の國の人民を守つて下さい、吾々はこの山を越えて肥國に行かねばなりませんから」

これを聞くより小島別は、

「如何なる神の御引合せか、思ひ掛なき尊き日の出神様に御目に掛り、こんな嬉しきことはありませぬ。仰せに従ひ大神様の岩戸の神の御名を戴き、これより建日別と改め永遠に守護をいたします。どうぞ御安心下さいませ」

と答へける。日の出神は満足の色を現はし、この場を後に三柱の宣傳使を伴ひ、
又もや宣傳歌を歌ひながら、この谷間をドンドン登り行く。

第六篇 肥の國へ

第二十九章 山上の眺(三二九)

行けど行けど限り知られぬ足曳の、山路を辿る宣傳使、激潭飛瀑の谷川を、右に左に飛び越えて、夜を日に繼いで進み行く。ここに三人の宣傳使、さしもに高き山の尾に、腰打かけて四方山の景色を眺めて雑談に耽りゐる。日の出神は、
曲津神と云ふものは、何處から何處まで、よくも仕組をしたものだな。こんな未開の筑紫の島の山奥まで、眷族を遣はして、どこ迄も天下を席卷せむとする執

念深き仕組には、吾々は實に感服の至りだ。悪が八分に善が二分の世の中、吾々もつかうかとしては居れない。ヤヤ、あの北の方に怪しい煙が立つではないか」

祝姫「如何にも妙な煙が立ちますな、紫の麗しい何ともいへぬ煙の色。あそこには何でも尊い神様が居らつしやるのでせう。斯うして高山の上から四方を見はらせば實に世界一目に見るやうな雄大な心地が致しまして、實に壯快ですな」

日出神「いかにも壯快だ、人間は山へ上るに限る。かうして展開された四方の山や海を眼下に見下す心地よさは、丁度天教山から自轉倒島を見下すやうだね。

ヤ、あの煙を見られよ、ますます麗しき五色の彩になつたぢやないか」

面那藝「彼處は肥の國でせうかな」

日出神「さうだらう、何でもこの熊襲山の山脈を境に肥の國があつて、そこには建日向別が守つてゐる筈だ。しかしながら常世神王の毒牙に罹つて、彼國の神人は又もや悪化してゐるかも判らない。一つ行つて宣傳をやつて見やうかな」

面那藝「それも結構ですが、良い加減に歸りませぬと、常世の國へ船は出て了ひはしますまいかな。こんな島に置いとけばりを喰つては堪りませぬぜ」

ひのでのかみ 日出神「何、構ふことがあるものか、何事も惟神だ。船はあれ計りじやない、また次の船が来るよ。折角神様の御計らひで常世の國へ行く積りが、こんな處へ押し流されたのだから、何か深い神界の御都合があるのだらう。我々は翌日の事は心配しなくてもよい。今と云ふこの瞬間に善を思ひ、善を言ひ、善を行つたらよいのだ。我々はその刹那々々を清く正しく勤めて行けばよい。取越苦勞も過越苦勞も、何にもならない。一息後のこの世は、もはや過去となつて吾々のものではない。また一息先といへども、それは未來だ。人間の分際で取越苦勞をしたり、過越苦勞をしたつて何にもならない。マア何事も神様に任したがよからうよ」

はぶりひめ 祝姫「貴神の仰せの通り、何事も惟神に任せませう」

つらなぎ 面那藝「如何にもさうです、然らばぼつぼつ参りませう」

さんにん 三人の宣傳使は、又もや宣傳歌を歌ひながら、五色の雲の立昇る山を目當に疲れた足を進ませ嶮しき山を下りゆく。

やま 山の尾を傳ひ、谷に下り、また山に上り谷に下りつ進み行く折しも、何處ともなく人聲聞え來たるにぞ、三人は人里近しと立停まつてその聲を聞き入りぬ。

谷間には、數十人の以前の如き黒い顔の人間が、何事か囁きながら谷間の奇石
怪岩を「いぢつて」居る。

甲「おい、詰らぬじやないか。毎日日こんな重たい石を擔がされて、腹は空
なり、着物は破れるなり、掠り疵はするなり、掠り疵はまだ宜いが、鈍公の様に
岩に壓へられて、身體が紙の様になつて死んで了つちや、たまつたものぢやない
ぜ。皆氣を付けぬと、何時石に壓へられて、また鈍公のやうな目に逢ふかも知れ
ないぞ。氣を付けよ」

乙「氣を付けるも良いが、貴様らは神さまを知つてゐるかい。神さまさへ信神す
れば、怪我なんかしやしないよ。あの鈍公の野郎はな、俺が三五教の宣傳使の教
を聞いて、「貴様も神様を信仰しないと、今日は「えらい」怪我をするぞ、貴様
の顔には不審しい曇りが現はれて居る」と氣をつけてやつたのに、鈍公の野郎
「なに、神さまだ、そんなものが何處にあるかい。神さまがあるなら俺に逢はし
てくれ、一目でも神の姿を見せて呉れたら本當にする。屁でさへも、姿見えでも
音なりとするだらう。それに音もせねば聲もなし、姿も見えず、そんな便りない

ありもせぬ神が信神できるかい。俺のここには、立派な、ものも【おつしやる】、手傳うても下さる結構な嬢大明神といふ現實の神様が鎮座ましますのだよ。それに何ぞや、屁でもない神さまを信神せなぞと、雲を掴むやうなことを云ひよつて、人を馬鹿にするない、俺の目は光つて居るぞ、節穴じゃないぞ」と劫託を吐き散らして、鼻唄を唄ひよつて、石運に行きよつた。さうすると彼の大きな岩奴が、鈍公の方に【ごろり】と轉けたと思ふが最後、【きやつ】と一聲この世の別れ、忌やな冥土へ死出の旅、氣の毒なりける次第なりだ。貴様も、ちつと神さまを信神せぬと、また鈍公の二の舞だぞ」

斯く囁く折しも、三柱の宣傳使は宣傳歌を歌ひながら谷間に向かつて下りきたる。

(大正一一・二・一 舊一・五 井上留五郎録)

暗き谷間は辿れども
心は明き宣傳使

狭き山道通へども
心は廣き宣傳使

常夜の暗を晴らし行く
日の出神の宣傳使

四方に塞がる村雲を
氣吹き祝りの宣傳使

連なる憂を薙ぎ拂ふ
面那藝彦の宣傳使

八島の國を開き行く
八島の別の宣傳使

とどまる都も近づきて
心も勇む宣傳使

と、歌ひながら谷道を下り来る。谷底には石運に餘念なき數十の人夫ありける。

傳「オイ八公、貴様の親分が來たぜ。ソレ、今そこを好い氣な顔して鼻唄歌つて、

宣傳使、宣傳使と仰有つてお通り遊ばすだらう。早く行つて拜んで來い。石運ど

ころぢやあるまい」

八「やかましよう言ふない。チヤンと肥の國の都へ行つて、八島別の宣傳使と一緒

に俺等のお出ましを、鶴のやうに首を長くして、八は來ぬか、まだ來ぬかと指折

り數へて時の經つのを待つてみて下さるのだ。この仕事しごとが濟すみたら、俺おれは家うちへ歸かへる。さうすると、立派りっぱな乗物のりものをもつて、サア八さま、宣傳使せんでんしがお待まち受うけで御座ございます。八さまに來きて貰もらはぬと宣傳使せんでんしも「ねつから」やりきれない。八さまでなければ夜も明あけぬ、日も暮くれぬ。鳥とりが啼なかぬ日ひがあつても、八さまの顔かほの見みえぬ日ひがあつたら、この世よに生いきとる甲斐かひが無ないと仰おつしや有あるのだ」

傳でん「馬鹿ばか、何吐なにぬかしよるのだ。惚のろけよつて、貴様きさまはスベタ嬢かかアの眞黒まつくろけの黒助くろすけの炭たど團玉んだまの鳥からすの親分おやぶんみたいな嬢かかアのお「せん」に惚とほけよつて、お「せん」と宣傳使せんでんしとを間違まちがへたりして居ゐるのだ、オイ確しつがりせぬかい」

とポカンと横面よこづらを撲なぐりつける。

八はち「喧嘩けんくわか、よし來こい」

と捻ねぢ鉢巻はちまきをしながら、手ての掌ひらに唾つばきして、四股しこを踏ふむ。今いまや兩方りやうほうから掴つかみ合あはうとする時とき、

「待まてツ」

と大喝だいかつする者ものあり。この言靈ことたまに、傳でんと八はちは吃驚びつくりして、思おもはず谷底たにそこへペタリと「へ

た」ばりける。

八「オイ傳公、立たぬかい。喧譁しやうと吐したぢやないか。立て立て」

傳「泰然自若動かざること巖の如しだ。大丈夫正にこの慨なかる可からざらむや

だ」

八「何を吐しよるのだい。腰を抜かしよつて、ビクとも動けねえのだらう。どう

だ謝つたか、腰抜け野郎奴」

傳「最前のは戲談だ。どうぞ俺をおぶつて歸つて呉れ、腰が立たぬわい。あまり

大きな聲で雷が落ちたやうに唼鳴りよるのだからなア」

八「それや天狗さまだよ。貴様何時も鼻が高いから、天狗さまが鼻を折つてやら

うとなすつたのだ」

鼻を撫でて見て、

傳「まだそれでも鼻はあるぞ。鼻は大丈夫だが、腰の骨が折れよつたらしい。天

狗奴勘違ひしよつたな」

上の方から、

日出神「オイ、そこにゐる數多の人々、このやうに澤山の石を運んで、一體何を
するののか」

二三人人口を揃へて、

「これはな、八島別さまが肥の國の都へお出になつて、城を築き遊ばすその爲に、
吾々は朝から晩までエライ目に會うとるのだ。困つた奴が肥の國へ天降つて來よ
つてな、本當に堪つたものぢやありやしない」

日出神「ウンさうか、それで解つた。御苦勞だがその肥の國の都へ案内して呉れ
ないか」

二三人「ハイハイ御案内申上げます。貴方は見れば蓑笠をお召しになつて、「み
すば」らしいお姿をして御座るが、どこやらに貴方のお言葉に何とも言へぬ力が
ある。最前唸らしやつた大きな聲で、傳公は腰を抜かすなり、吾々一同は膽を潰
して了ひました。天狗さまの親方だらう。いつぺんあの八島別の奴、あまり吾々
を酷き使ひよるから、貴方様のその大きな聲を「もつと」もつと大きうして、八
島別を唸鳴つて腰を抜いてやつて下さい。あんな奴が居つては、肥の國の人民も

氣樂きらくに遊あそんで暮くらすことはできやしない。サアサア御案内ごあんないいたします
と、先さきに立たつて坂道さかみちを二三人にさんの黒い男くろをとこが案内あんないする。
(大正一一・二・一 舊一・五 櫻井重雄録)

第三章 虎轉別とらてんわけ〔三三一〕

久方ひさかたの天津御空あまつみそらに聳そそり立たつ 仰あふぐも高たかき天教てんけうの
山やまに鎮しづまる木この花姫はなひめの 神かみのみことの世よを救すくふ
清きよき教をしへを四よ方の國くにの 國くにの八十やそく國にも百八十もやその
八島やしまの別わけの宣傳使せんでんし 堅かき磐は常とき磐はに鎮しづまりし
肥ひの神國かみくにの常磐城ときはじやう 折をりから起おこる鬨ときの聲こゑ
八島やしまの別わけは怪あやしみて 戸とを押し開ひらき眺ながむれば

東^{ひがし}や西^{にし}や北^{きた}南^{みなみ} 蟻^{あり}の這^はひでる隙^{すき}もなく
押^おし寄^よせきたる諸^{もろ}人^{びと}の 勢^{いきほ}猛^{ひたけ}き人^{ひと}の波^{なみ}
心^{こころ}も荒^あらき國^{くに}人^{びと}の 醜^{しこ}の荒^{すさ}びぞ凄^{すさま}じき。

數^{すう}萬^{まん}の群^{ぐん}集^{しふ}の中^{なか}より勝^{すぐ}れて背^せの高^{たか}い色^{いろ}の赭^{あか}黒^{くろ}い、目^めの玉^{たま}の大^{おほ}きい鰐^{わに}口^{ぐち}の男^{をとこ}は、
四^し五^ごの醜^{しこ}男^をを引^ひき連^つれて、拳^{こぶし}を固^{かた}め大^{おほ}手^てを振^ふりながら、八^や島^{しま}別^{わけ}の門^{もん}前^{ぜん}に立^たち現^{あら}は
れ、

「オーイ、オーイ、この門^{もん}開^あけ
と雷^{かみなり}のごとく唝^ど鳴^なり立^たてゐる。門^{もん}番^{ばん}は、

何^{なに}物^{もの}ならば勿^{もつ}體^{たい}なくも、天^{てん}教^{けう}山^{ざん}より天^{あま}降^{くだ}り給^{たま}うた八^や島^{しま}別^{わけ}様^{さま}の御^ご威^ゐ勢^{せい}を恐^{おそ}れず、
この門^{もん}開^あけとは無^ぶ禮^{れい}千^{せん}萬^{ばん}、汝^{なんぢ}ら如^{ごと}き亂^{らん}暴^{ぼう}者^{もの}の申^{まを}すことを聞^きく耳^{みみ}持^もたぬ。トツトと
歸^{かへ}れ」

大^{だい}の男^{をとこ}、才^{さい}槌^{づち}のごとき拳^{こぶし}を固^{かた}め、
恐^{こは}くてよう開^あけぬか、穴^{あな}蟲^{むし}、【がつと】蟲^{むし}、まだも違^{ちが}うたら土^{もぐら}鼠^{もぐら}、塵^{ごもく}埃^くに潜^{ひそ}む

蚯蚓蟲、ごてごて云はずに早く開け」

門番「明けの鴉の力アカアと、あたやかましい、開けなら開けで開けもしようが、開けてビツクリ玉手箱、魂の宿替せぬ様に、性念魂をしつかり据ゑてゐるがよからう」

門番は不承無精に門の戸をガラガラと音させながら左右にサツト開けば、屋根葺の手傳のやうな體中の眞黒黒助、熊のお化か烏の親方か、頭か顔か一寸見分のつかぬ五人連、口を揃へて目を釣り上げながら、

「俺は肥の國の數萬の人間に選ばれて談判にきた虎轉別だ。一時も早く八島別の前に案内いたせ」

門番「何だい黒ン坊、二つとない命が惜くなければ會はしてやらう、吃驚するな。さあ俺について来い」

と奥殿さして進み行く。

門番「モシモシ受付のお方、ドエライ奴が参りました。眞黒黒助の熊轉だとか、虎猫だとか、怪體な奴が八島別に會はしてくれと申します、どうぞお取次を願ひ

ます
』

『コラ門番、いらぬ事をいふな、虎様を八島別に會はせばよいのだ』

暫くすると奥の間より、容姿端麗なる四五の美人現はれ來り、しとやかに、

『コレハコレハ虎轉別様、ようこそお出下さいました。すぐに奥にお通り下さいませ』

と云ひつつニヤリと笑つて兩手を取り、奥へ導き入る。

虎轉別は絶世の美人に、鰐の鱗のやうな手を握られ、章魚の様にグニヤグニヤになつて涎を垂らしながら奥深く伴はれ行く。何とも知れぬ酒の香がしてゐるので、虎轉別は立ち止まり、鼻を犬のやうにピコつかせながら山の如く積み重ねたる酒樽の方に眼を配りゐる。

女性は虎轉別に向ひ、

『もしもし虎轉さま、お酒はこの通り澤山に置いてあります。八島別さまは神通力を以て、あなたのお越し遊ばすことを前以て御承知なので、酒を澤山に珍客に十分飲ましてあげといふ事でした。サアサア妾がお酌をします。御遠慮なくお召

上がり下さい」

と言ひながら怪しき秋波を虎轉別に注げば、虎轉別は猫のやうにゴロゴロと喉を

鳴らせ、今までの勢は何處へやら行つてしまひ、

「八島別さまは話せるわい、氣が利いてるな。しかし氣の毒だが折角ここまで用意して下さつたのだから無下にお辭退するも氣の毒だ。頂くのも氣の毒だが、頂かぬも氣の毒だ。同じ氣の毒ならトツクと頂かう」

女「それが宜しうございませう」

虎轉別は忽ち相好を崩してその場に安坐をかいてベツタリと坐り込み、四人の供人もこの男を中心に鶴翼の陣を張りて左右にヅラリと竝ぶ。この三人の美人の名は春姫、夏姫、秋姫といふ。春姫は白扇をひるげ、長袖を振つて舞ひ始め、夏姫は磬を打つて調子をととり、秋姫は大の杯になみなみと注いで、虎轉別を始め四人の供人に代るがはる酒を勧める。虎轉別は御機嫌斜ならず、八島別の館に在るを打ち忘れ、銅鑼聲を張り上げて首を左右に振りながら、唄ひ始めたり。

☐ ここは筑紫の神國と 人はいへども常世國

常世神王のその使 虎轉別の御領分

鬼でも蛇でも閻魔でも 掴みて喰らふこの方の

威勢も知らずに何の態 八島の別の宣傳使

天教の山から降つてきて この肥の國に城造り

その名も建の日向別 譯の分らぬ有散事を

ほざいて世人を迷はせる 俺にはそれが氣に喰はぬ

そこで俺奴が國人を 澤山集めて谷々の

岩を運ばせ城築き 八島の別の常永に

鎮まる城だと誑かりて その礎も大方に

築き始めた我が企み いよいよ成功した上は

虎轉別は城の中 弓矢を調へ準備して

八島の別の宣傳使 ただ一撃にやる企み

企みはうまいぞあゝ旨い 甘いといつたらこの酒ぢや

酒ほど甘いものはない

酒を飲まして虎轉を

亡ぼす企みが面白い

酒さへ飲まして呉れたなら

俺はどうでも宵の口

酔つてクダまきや尾も白い

頭も白い古狐

化けた虎轉化の司

金毛九尾の御眷族

あゝ面白いおもしろい

と酒に酔ひ潰れて自分の企みを残らず白状しけるぞ面白かりける。

(大正一一・二・一 舊一・五 吉原亨録)

第三二章 水晶玉〔三三二〕

然として高く聳え居たり。數多の群集は、ウロー、ウローと叫びながら十重二十
日の出神以下二人の宣傳使は、肥の國の都に漸う辿り着きぬ。八島別の館は魏

重へに取りと巻きまき、先さきに立たつたる案内あんないの甲乙丙かふおつへいは後振返り日あとふりかへひの出神でのかみに向むかひ、

『モシモシ、山やまの奥おくの大神だいてんぐさま様、私等わたしらはこれからご免めんを蒙かうむります。一つひと嘸鳴どなつて皆みなの奴やつに一泡吹ひとあわふかさして見みせて下くださいませぬか』

日出神ひのでのかみ『よし、よし、あゝ遠方えんぱうの所ところをお前達まへたちも忙いそがしいのに御苦勞ごくらうであつた。俺おれは

唯ただに使つかはぬ、これをお禮れいにその方ほうらに與あたへる』

と懷中ふところより取り出だしたるは立派りつぱな水晶すゐしやうの玉たまなりける。

甲かふ『これは一體いつたい何なんで御座ございますか、立派りつぱなもので生うまれてから見みた事こともありませぬ。これは如何どうして喰くふので御座ございませう』

日出神ひのでのかみ『これは喰くふものぢやない、立派りつぱな寶たからだ。これさへ持もつて居をれば世界せかいの事こと

は何なんでも解わかる。さうして病人びやうにんでもあつたらこれこれで撫なでてやつたら忽たちまち全快ぜんくわいする、

死しんだ者ものでも蘇よみがへる、起死回生きしくわいせいの玉たまだよ』

三人さんにん『それは有難ありがたうございます。三人さんにんの中なかに三みつまで、氣きの利きいた天狗てんぐさまだ。

これさへあれば大丈だいぢやうぶ夫ぶだ。一つひと歸かへつて皆みなの者ものに見みせびらかして威張あばつてやらうか

い』

ひのでのかみ 日出神「オイ、この玉は威張ると消えてしまふぞ、心を眞直に持つて人を助ける心になれ。一寸しても今迄のやうに「ぶり」ぶり怒つてはいかないぞ。誠一つを貫き通す、水晶玉だ、よいか」

三人「それは結構な寶を頂きました。併しながら、三人ながら同じ物を持つて居てもあまり尊くもありません。一つより無いものが天下の寶でございますから、一つは頂戴いたします、さうしてその代りに乙には貴神の隠れ蓑をやつて下さい。丙には隠れ笠をやつて下さらば、誠に有難うございます」

ひのでのかみ 日出神「隠れ蓑、隠れ笠を貰つて何にする心算か」

乙「下さるのならば申上ります。甲は水晶の玉で八島別の館の中を透き通して見ますなり、私は隠れ笠と蓑を着て館の中に忍び込み、八島別の素首を引き抜き、虎轉別様に送ります。さうすると虎轉別様は、お前は世界に比類なき大手柄者だと云つて、きつと私等をお側付として毎日甘酒を飲まして下さいませう、それが何より私の望みです」

ひのでのかみ 日出神「我々は虎轉別といふ悪い奴を往生させに行くのだ。虎轉別の助太刀をし

やうと云ふやうな不量見な奴には、もう何もやらない、その水晶玉もかやせ
甲「私はこの玉のやうに水晶魂になります。乙や丙がああやうな譯の分らぬ事を
云つたのです。私と彼との心はお月様と鼈ほど違つて居ます。この玉はどうぞ私
に下さいませ」

日出神「それならやらう。心を眞直にもて、そして玉の曇らぬやうにせい」
と言ひ捨てて八島別の館を指してどんどんと進み入る。

(大正一一・二・一 舊一・五 加藤明子録)

(第二十七章) 第三二章 昭和一〇・二・二四 於呉市徳田屋旅館 王仁校正)

第七篇

日出神

第三三章 回顧〔三三三〕

月日の駒は矢の如く、瑞靈に縁ある、壬戌の正月の、神の御稜威を照すてふ、
心の帳も七五三の内、睦月五日となりにけり。思へば去年の今日の日は、難波の
水の都より、思ひがけなき「わざひと」に、導かれつつ烏羽玉の、闇より暗き根
の國の、門を潛りしその夕、大正日々副社長、高木鐵男氏門前に、送り來りし夜
見の庭、月西天に輝けど、心は曇る暗の夜の、牢獄の中に囚はれし、思ひ出深き
夕なり。神の恵の幸はひて、奇しき神世の物語、清く流るる和知川の、邊に近き
松雲閣、一の巻より説き始め、外山、谷口、櫻井、加藤、四人の御子を命毛の、
筆を揮はせ綴り行く、心の駒は逸れども、進み兼ねたる口車、やうやう茲に三百
三十三節の、歩も慣れぬ神の道、辿り辿りて説き明す、これの靈界物語、言葉の
綾や錦織る、秋の最中に筆執りて、心も清き白雪の、地は一面の銀世界、總ての
枉を清めたる、錦水亭の奥深く、惱みの身をば横たへて、世人のために言擧ぐる、
日の出神の御活動、世の黒雲を吹き拂ひ、日出る國の礎を、堅磐常磐に經緯の、

神の教を敷島や、煙草に心慰めつ、熊襲の國の醜人に、光眩ゆき水晶の、三つの御魂を與へたる、實にも目出度き物語、花咲く春の三月三日、菖蒲も薫る五月空、いつかは晴れむ胸の闇、黑白も分かぬ闇の夜の、光となるぞ苦しけれ、證となるぞ尊けれ。夢か現か夢ならば、いつかは醒めよ現身の、この世を思ふ赤心の、紅に染めなす紅葉の、妻戀ふ鹿の奥山の、しかと往事を極めむと、先を争ひ來る人の、魂の證と教子が、先を争ひ筆を執る、神の守護も彌深き、これの靈界物語、語り盡せぬ言靈の、清きは神の心かな。嗚呼この神心神心、世人の心片時も、鏡に寫れ眞澄空、空行く雲の定めなき、昨日に變る今日の雪、神を力に教を杖に、身は高砂の尉と姥、尉と姥との御教を、千歳の松の末長く、守れよ守れ百の人、三千年がその間、守り育てし園の桃、天津御神に奉る、神の化身の西王母が、心の花の開く時、心の花の薫る時。

世を思ふ心は胸に三千歳の
神の教を開く今日かな

第三四章 時の氏神〔三三四〕

日の出神は二人の宣傳使を伴ひ、數萬の群集を押し分けて、
又もや宣傳歌を歌ひながら人波分けて進み行く。群集は三人の姿を見て口々に囁き合ふ。

甲 〇 オイ、八島別とか云ふ、天から降つた様な豪い力の強い神さまが、この肥の國へ降つて來たと思へば、又もや妙な姿をした神さまが遣つて來たぞ、一寸見た處は見容らしいが、アノ聲を聞くと俺等は何ンとなく恐ろしくつて身體が縮み上るやうだ。一人でさへも肥の國の人間は持餘して恐れ入つてゐるのに、三人も遣つて來るとはコラまたどうしたものだい

乙 〇 心配するな、天道は人を殺さずと云ふ事があるよ

丙 〇 乙、貴様は天道天道て一體ソラ何ンだい、テンと分らぬではないか。一つ後

をつけて行つたら如何だらうか」

甲「それもさうだな。素知らぬ顔にて何處に行きよるか、踵いて行つてやらうよ」

ここに三人の宣傳使の後に、見えつ隠れつ踵いて行く。日の出神は館の門前に

立止まり、

「吾こそは黄金山の三五教の宣傳使日の出神の一行なり。この門を速かに開けら

れよ」

と呼ばれば、門番は「ハイ」と答へて直ちに門を左右に開きぬ。

「御苦勞でござる。八島別は在館か」

門番「ハイ、在らつしやいます。貴下は音に名高き、日の出神様でありましたか、

好い處へ来て下さいました。奥は大變でございます」

「大變とは何んだ」

「大變も大變、さつぱり天地がヒツクリ覆るやうな、館の内は大騒動がオツ始ま

りました。虎轉別と云ふこの國の豪い大將が、何時も八島別さまに向つて、酢に

付け味噌につけ小言を申すなり、反對を致すなり、それはそれは大變な悪い奴で

御座います、たつた今も無理にこの門を開かして、奥へ四五人の家來を連れて進んでゆきました。さうして結構な酒を喰ひ酔つた揚句は、そこら中を荒れて荒れて荒廻し、戸を叩き破るやら敷物を引裂くやら、女連を「とつ」捉まへてキヤアキヤア云はすやら、終ひには八島別さまを「とつ」捉まへて、大きな握り拳で拳骨を喰はすやら、それはそれは豪い亂暴、門番の私もあまりの事で腹が立ち、疝癩玉も舞上つて、胸のあたりに「ぐつ」と詰つてしまひました。それに八島別さまは、虎轉別の支度ままに爲して、拳骨まで喰はされても些も抵抗なさらぬので、段々と付け上り、有るに有られぬ亂暴狼藉、私ザザ、残念で堪りませぬ。何卒貴下が日の出神さまなら、一時も早く虎轉別をふん縛つて、敵を討つて下さい、御頼みです」

と手を合して拜む。日の出神は又もや宣傳歌を歌ひながら、悠然として奥深く進み行く。一行の姿を見るより、三人の若き美人は袖に取り縋り、

「何れの御方かは知りませぬが、よくまあ来て下さいました。奥は大變でござい

ます」

とおのなみだしゑ
と各々涙聲にて訴ふる。三人は軽く打領きながら、女の後を逐うて、奥深く進み入る。

八尋殿の中央に、虎轉別は眞裸となり安座をかき、仁王の如き拳を頭上高く振上げ眼を怒らし居る。日の出神は鎮魂の姿勢を取つて、ウンと一聲叫び給へば、虎轉別は如何にしけむ、腕を振上げたまま木像の如くに、身體硬直して、ビクとも動けず、ただ兩眼のみギロギロと廻轉さすのみなり。奥殿よりは八島別、亂れたる髪を撫で上げながら、靜々と出で來り、日の出神一行に向ひ、慇懃に挨拶を述べたるに、日の出神も叮嚀に答禮し八島別に向つて、

貴下の内には見事な木像がありますな。何處からお求めになりましたか。なかなか立派な細工ですネ、ほとんど虎轉別の生寫し、よくも刻むだものですなあ
八島別はフト氣が付き傍を見れば今まで荒れ狂ひ居たりし虎轉別は、腕を振上げたまま固まり居るを見て、八島別は微笑みながら、

イヤ、これは左程貴重なものではありませんせぬ、ホンの仕入細工のヤクザ物、貴下の御意に召しますなら、御土産に進上いたします。貴下は叩きなりと、崩しな

りと、碎くなりと御勝手に爲さいませ」

「それなら頂戴致しませう。貰つた上は私の物、しかし木像は奇妙に目玉が動き
ますね。眼計りギロギロと動いて居るのは見つともない。こんな怪體な眼は抉り
出して動かぬ品のよい眼を入れ替へてもよろしいか」

「さあさあ、貴下の御自由に」

四人の供人は是れまた恐怖心に驅られて、同じく平太張つたまま、力チ力チに
なつてゐる。

日出神「いやここにも乾兒がをりますねー。これも一緒に頂戴いたしませうか」

八島別「さあさあ、御安い事」

虎轉別は心も心ならず、如何成り行く事ならむと胸を跳らせたるが、遂には、
涙をポロリポロリと零し出したりける。

日出神「やあ、縁起の悪い、涙を零しかけました。打ち斬つて仕舞ひませうか」
と云ひ乍ら、兩刃の劍をスラリと抜いて、虎轉別の眼の前に突付けたまひける。

(大正一一・二・一 舊一・五 高木鐵男録)

第三五章 木像に説教（三三五）

日の出神は一同に向ひ、

何れもこの場にあつまり給へ。今某がこの木像の眼を刮り抜いてお目にかけてむ

との一言を聞くより、木像はますます烈しく眼玉を廻轉し初めたり。木像の前に

は、八島別、春姫、夏姫、秋姫を始め、日の出神、面那藝、祝姫その他十數人の

佳人がズラりと列びけり。

日の出神は木像に向ひ、

「え、皆の方々、これより此の木像に一つお嫌ひな祝詞を唱へて進ませう。序

に木像さまのお嫌ひな宣傳歌を歌ひませう。皆さま、私について合唱して下さい

と言ひながら、天津祝詞を奏上し、宣傳歌を各々口を揃へて歌ひ終れば、五體の

木像は兩眼より涙を瀧の如く流し居たり。

ここに日の出神は、木像様のお經だと言ひつつ歌を歌ひ、祝姫を始め春姫、夏

姫、秋姫をして歌につれて踊らしめける。

ひのでのかみ 日出神
とらてんわけ 虎狼の吼え猛る

くまそ 熊襲の國の國境

ひ 肥の國都に名も高き

とらてんわけ 虎轉別の神さまは

ちから 力が餘つて瘤だらけ

さけ 酒が好きで酔ひ潰れ

よ 酔うた揚句は鉢を破り

と 戸を蹴破つて荒れ狂ひ

らんぼう 亂暴極まるお振舞

ふるまひ 酒を飲み過ぎて

からだ 體は木像となりかはり

めだま 眼玉ばかりをギョロギョロと

む 剥いて御座るがいぢらしや

す 好きなお酒をどつさり

あが 上つた報いは忽ちに

とらてん 虎轉さまの何よりも

きら 嫌ひな嫌ひな宣傳歌

ひと まつ嫌ひな太祝詞

たむ 手向けて上げたら眼に涙

たき 瀧と流して泣いたあと

きつと 嬉しいことがある

とらてんわけ 虎轉別の神さまよ

あら 荒い心を立替へて

かみ 神の心になりかはり

ひ 肥の國人を懇ろに

をさ 治めてやれよ虎轉別よ

あななひけう 三五教の吾々は

まへ お前を憎いと思はない

元をただせば皆神の御子と生れた兄弟よ

天にも地にも世の中に他人があつて堪らうか

善と悪とを立別る神が表に現はれた

只何事も人の世は直日に見直し聞き直す

神の教の宣傳使少しは心を柔げよ

片意地張るとこの通り體は石のやうになり

二進も三進も動けまい神の教を聞き分けて

誠の心に立ち歸れ虎轉別の神さまよ

それに従ふ供人よ

と歌ひたまへば、木像はますます涙を零し出しける。

日の出神は涼しき聲を張りあげて、

一二三四五六七八九十百千萬

と神文を唱へたるに、虎轉別の木像は俄にグニヤグニヤとなつて舊の自由の身體

に復ふくしたり。忽たちまち虎轉別とらてんわけは日ひの出神でのかみに向むかつて飛とび附ついたまま、又またもや拳骨げんこつを振ふり上げてポカンと打うちかかる刹那せつな、再ふたび身しん體たいは強直きやうちよくしてまた木像もくざうの如ごとくなりける。日出神ひのでのかみ「あなたの家いへには、妙めうな木像もくざうがありますな。時とき々どき暴あばれますのか、よう腕うでを振ふり上げる木像もくざうですな」
八島別やしまわけ「ハイハイ、最前さいぜんも最前さいぜんとて、よく振ふり上げましたよ。實じつに面白おもしろい人形にんぎやうですワ」

日ひの出神でのかみは又またもや一ひと二ふた三み四よの神歌しんかを歌うたふ。木像もくざうはまた舊もとの通とほり身しん體たい自じ由いうに復ふくしたり。

虎轉別とらてんわけ「いや、どうも恐おそれ入いりました。何卒どうぞ許ゆるして下ください。今け日ふ限かぎり改心かいしんをいたします」

と男泣をとこなきに泣なき立たてける。

一同いちどうは顔見合かほみあはせてニヤリと笑わらふ。虎轉別とらてんわけの今こん後ごは如何いかなるならむか。

(大正一一・二・一 舊一・五 櫻井重雄録)

第三六章 豊日別（三三六）

日の出神、八島別宣使は、虎轉別の心よりの改心を喜び、神前に御饌御酒種々の物を供へ足はし、祝詞を奏上し互に心を打明けて兄弟の如く睦び合ひける。虎轉別は、日の出神に向ひ、

「お蔭を以て我が身に憑依せる八岐の大蛇の悪霊は、貴下の神力に依つて残らず脱出しました。今となつては何となく精神清々しく身も軽き心地が致します。今まで私は悪神の虜となり、數多の國人を唆かし、畏れ多くも神の教を宣べ傳ふ宣傳使を責め惱めむとしたる重々深き我身の罪、何卒見直し宣り直して下さいませ」と涙と共に詫入るにぞ、日の出神は憐れを催ほして、

「人間は總て神様の分靈であります。生れつき悪人は一人も無い。唯心の弛みより種々の悪魔に左右されて、悪行を爲すのであつて、決して肉體の所作ではない。肉體は皆その悪神に使はれるのであるから、そこで神様は直日に見直し、聞き直し、宣り直し給ふのである。又その悪魔と雖も、心を改むればきつと御許しにな

るのである。況して神の分靈たる人間の貴方、必ず御心配あるな』

と懇に教理を説き諭せば、虎轉別は且つ喜び且つ覺り、

『あゝ辱なき御言葉、私は斯うしては居られませぬ。數多の群衆に向つて、今までの曲事を宣り直さねばなりません。斯う申す間も心が急ぐ。暫時御許し下され

よ』

と云ひながら、韋駄天走到りに門を立ち出で、十重二十重に群がる群衆に向つて、聲を張上げ、

神が表に現はれて 善と惡とを立別る

この世を造りし神直日 心も廣き大直日

ただ何事も人の世は 直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直せ 虎轉別の曲事は

今宣り直す神直日 今宣り直す大直日

これに群がる人々よ われに做つて宣り直し

悪しき心を立替へよ 荒らき言葉を立直せ

一二三四五六七八九十百千萬

と歌へば、群衆は口々に藪から棒の虎轉別の言靈に、アフンとして口を開き、
「ヤ、ヤイ何だい。一體薩張【こん】だ。テンツクテンだ、テンテラテンだ、テ
ンブクだ、天狗だ、天界だ、回天だ。【てん】と譯が分らぬぢやないか」
虎轉別は、なほも言葉を繼いで、

「悪の中にも善がある 善と思ふても悪がある」

俺は今まで悪だった 八島別宣使さまや

日の出神の御教に 悪が復つて善となり

今は心も清々し 善に復れよ皆の者

悪を放せよ皆の者」

と大音聲だいおんじやうに呼よばはりければ、今いままで猛たけり切きつて此館このやかたを攻せめ圍かこんでゐた群衆ぐんしゆうは、この言葉ことばに拍子へうし抜けぬがし口々くちくちに呶つぶやきながら、各々おのおの家路いへぢに歸かへり行く。ここに八島別やしまわけは、純世姫命すみよひめのみことの神靈しんれいを祀まつり、肥ひの國くにの守護神しゆごじんとなり、建日別たけひわけとなり、また虎轉別とらてんわけは心こころを改あらためて、豊とよの國くにの守護職しゆごしやくとなり、豊日別とよひわけとなりにける。

(大正一一・二・一 舊一・五 外山豊二録)

第三十七章 老利留油らうりるいう (二三七)

神かみの光ひかりを輝かがやかす この四柱よはしらの宣傳使せんでんし

日ひの出神でのかみを始はじめとし 心こころも豊ゆたかに治をさまれる

豊日とよひの別わけの宣傳使せんでんし 醜しこの曲津まがつも祝はふり姫ひめ

面那藝彦つらなぎひこと諸共もろともに 國くにの八十國やそくに八島別やしまわけ

神の命に立別れ 漸くここを建日向

別に別れて進み行く 豊葦原の豊の國

長閑な春日を負ひ乍ら 脚に任せて山坂を

岩の根木の根踏みさくみ 深き谷間を打渡り

豊けき豊の神國の名を負ひませる白日別

筑紫の國に渡らむと 勇み行くこそ雄々しけれ。

霧立昇る霧島の山の尾の上に、四柱は腰うち下し草の上に【どつか】と臀を据

ゑて、流る汗を拭ひ乍ら、四方の景色を眺めて、無邪氣な話に耽りける。

豊日別「あゝ實に高山から見た景色は雄大ですな。四方山に包まれ、一方には荒

浪に時々襲はれる肥の國に鳥無郷の蝙蝠を氣取つて、權利だ、義務だ、得だ損だ

と狭つこましきことを言つて争つたり、譯の解らぬ人間を相手に晝夜心を腐らし、

心配をしながら虎轉別の惡魔だとか、鬼だとか云はれて居るよりも、斯うして貴

下等と一緒に元の心に生れ變つて、自由自在に山野を跋渉するのは、實に何とも

云へぬ天恵ですワ。夫れに就て私は、豊の國の豊日別となつて守護を致さねばなりませぬが、豊の國は一體何の方面に當るのでせうか」

面那藝宣使は四方を見廻しながら、眼下に展開せる大沙漠を指さし、

「豊の國はこの西南に當る赤白く見える處ですよ」

豊日別「よを、何だ、草も木も一本も生えて居ないぢやありませんか。彼れは沙漠ではありますまいか」

面那藝「大沙漠ですよ。そこに草木を植付け五穀を稔らせ、豊かな豊の國とするの

が貴下の役目ですよ」

豊日別「天恵どころか、非常な天刑です。何うしたら草木が繁茂し、人間が繁殖

して立派な國土になりませうかな」

日出神「豊日別さまの頭の禿に毛が生えたら彼の沙漠にも草木が生えるだらう。

夫れを生さうと思へば大變な辛い目をしなくちやならぬ」

「この禿た頭に毛が生えますか」

日出神「痛い目をすれば生える。生やして上げようか」

豊日別とよひわけ「少々痛い目をしたつて天下の爲になることなら構ひませぬ」

日の出神ひのでのかみは「つと」立上り傍の樹木の中に姿を隠したるが、暫らくありて青々とした樹の枝を握り歸り來たり、傍の岩の上にその樹の枝を積み、手頃の石を以て「おさん」が砧を打つやうに打ち始めたるに、追々と打たれて枝も葉も容量低になり、水氣が滴り出しける。日の出神は黒き被面布にくるくると包み、一生懸命に力を籠めて搾り、出た汁は、岩の上の少しく凹みし所に油となつて充されける。

日出神ひのでのかみ「さあ、是から毛を生やして上げやう。些は痛いが、辛抱できますか」
と云ひながら、豊日別の頭を傍の荒き砂を掴みて、ゴシゴシと擦りけるに、豊日別は、

「イ、、、、」

日出神ひのでのかみ「宣傳使たる者が痛いなぞと弱音を吹いてはならぬ、そこが男だ、氣張りなさい」

「イ、、、、、好い氣分ですワ」

日の出神ひのかみは益々ますますガシガシと擦るこす。薄皮うすかはは剥けるむ、血ちは滲むにじ。

「イ、、、、至いたつて好いいい氣分きぶんですワイ」

日出神ひのかみ「よし、これからもう一つ好いいい氣分きぶんにして上げやう」

と今いま搾しぼつた岩いはの上うへの油あぶらを掬すくうて、ビシャビシャと塗ぬりつける。

豊日別とよひわけは顔かほを顰しかめ、

又またもや、

「イ、、、、イ、、、、」

と泣聲なきこゑになつて來きてゐる。

日出神ひのかみ「また貴方あなたは弱音よわねを吹ふくな」

豊日別とよひわけ「イ、、、、イ、、、、好いいい加減かげんです。成なることなら、もう好いいい加減かげんに止やめ

て、ホ、、、、欲ほしいことない」

と涙なみだをボロボロと零こぼして氣張きばりゐる。

日出神ひのかみ「さあ、これでよし」

と再びふたたび芝生しばふの上うへに腰こしを下おろしたりける。豊日別とよひわけは頭あたまを押おさへ、目めを塞ふさぎ、息いきを詰つめて

蹲踞しゃがみゐる。暫時しばらくすると痛いたみが止とまり、豊日別とよひわけはやつと安あん心しんして顔かほの紐ひもを解とく。

ひのでのかみ 日出神 「如何でした。好い氣分でせう。人間は一度は大峠を越さねばならぬ。大峠を越すのは随分苦しいものだ」

とよひわけ 豊日別 「いや、この大峠まで上つて來たが、さう苦しいとは思はなかつたのに、しかし大峠どころの騒ぎぢやありませんよ。随分痛い、ドッコイ至つて結構な目に會ひました」

ひのでのかみ 日出神 「頭に手を上げて御覽なさい」

とよひわけ 豊日別は、頭を撫で、

「やあ、生えた生えた。すつかり生えた。有り難う」

にほか と 俄に飛び上り喜ぶ。これは老利留といふ木の油なりける。

「さあさあ行かう」

とひ の 日の出神は先頭に立つ。豊日別は禿頭に毛の生えたのを大いに喜び、

「さあ、これで若くなりました」

と肩を怒らせながら、ドンドンと峠を下り行く。四人の歌ふ宣傳歌は谷々に響き渡りぬ。

第三十八章 雲天焼〔三三八〕

春の山邊は緑の顔を天に晒して打ち笑ひ、芳しき花は黄紫赤白と處々に咲き亂れて木の間を綴り、百鳥は長閑な聲を張り上げてこの世を謳ふ。春山の霞を別けて下り来る心も清き宣傳使、身装も輕き蓑笠の、鎧冑を取り付けて、草鞋脚絆の小手脛當、勢込んで進みくる。潺々として流れも清き谷川の傍に腰打ち掛け、雑談に耽る四五人の杣人ありけり。

甲「オイ、貴様ら聞いたか、この間から良の方に當つて、五色の雲が立ち昇つたらう。アレヤ、一體何んだと思つて居るか」

乙「乞食の雲つて何んだい、それや貴様らの親類だらう。乞食の雲助が立ち昇つた、良で無うても此の山道には、何日も雲が籠を昇いだり乞食が徘徊するじやな

いか

甲 馬鹿、貴様はド聾だな。五色の雲が立ち昇つたのだと云ふのだよ

と乙の耳の傍に口を寄せて大聲に呶鳴る。

「そんな大きな聲を爲なくてもよう聞えて居るのだ。乞食と雲助が何うしたと云

ふのだい

甲 八、八、八、面白面白、金挺子だね、こんな聾に話をして居ると日が暮れ

てしまふわ。オイ八公、五色の雲の理由を聞かして呉れ

八は威丈高に成り、

「何んでも肥の國に虎轉別とか、雲天焼とか、妙な名の惡神がをつてな。焼島別

とかいふ宣傳使の館に火を點けよつたが、その煙が天へ舞ひ昇つて、空の雲が焼

けて、それで雲天焼と云ふのだよ。さうして結構な宣傳使の館が、スツカリ焼

て島つた別といふのだ。何れ焼けて島つた別は居る所がないので、この峠を越し

て出て來るかも知れないぞ。又あんな奴が豊の國に逃げて來よつて、肩の凝るや

うな歌を歌ひよると、豊の國にも腰抜けばかりは居やしないから、第二の雲天焼

が現はれるに定つてゐる、物騒な事だワイ」

乙「その雲天焼とかいふ奴はこの廣い豊の國には何れ居るだらうね」

八公「居らいでかい、居らいで耐らうかい。俺がその雲天焼に成るのだもの」

乙「貴様雲天焼に成つて何うするのだい」

八公「そんな奴が来よつたら焼糞になつて焼いて「こます」のだ」

乙「それや貴様、焼糞に成つたら雲天焼ではないよ。糞天焼だよ」

と、馬鹿口を叩いてをる。そこへ微に聞えて来た宣傳歌の聲。

八公「ヤア、怖いぞ肩の凝る聲が聞え出した。長居は恐れだ、逃げる逃げる」

乙「態見やがれ、大法螺計り吹きよつて、宣傳歌の聲か水の音か風の響か分りも

せぬのに、日の暮まぎれに茅の穂を見て幽霊だと思つて腰を抜かした奴のやうに、

見つとも無いじゃないか」

八公「喧しう言ふない。頭が痛いわ、逃げる逃げる」

乙「は一目散に驅け出さうとする。」

八公「一寸待つてくれ俺も一緒に連れて逃げぬかい」

乙 貴様足が有るだらう。貴様勝手に歩かぬかい

八公 何うやら俺は胸が据つたと見えてビクともできぬわい

乙 貴様臆病者奴、腰を抜かしよつたな

宣傳歌は益々近く聞え來たる。

神が表に現はれて 善と惡とを立別る

日の出神や三柱が 今下り行く豊の國

四方の草木も神風に 靡き伏しけむ醜草は

神の御息に散り果てむ 散りたる後に實を結ぶ

神の教の豊の國 豊日の別と現はれて

四方に擴むる宣傳歌

と近邊を響かせながら一聲々と近寄り來る。四五人の杣人は頭を抱へ呼吸を詰めて谷道に横たはりブルブル震へゐる。中に一人の勝れて大の男泰然自若として

首くびを傾かたむけ、その宣傳歌せんでんかを愉快氣ゆくわいげに聽きき入りぬ。
聲こゑは刻々こくこくに近ちかづくと共に益々ますます高く聞きえ出し、大だいの男をとこは立上り聲こゑする方ほうに向むかつて
歌うたひ始はじめたり。

此處ここは亞弗利加アフリカ豐とよの國くに 廣ひろい沙漠さばくの連つらなりし

不毛ふまうの土地とちぞ荒野原あれのはら 神かみの御國みくにの宣傳使せんでんし

何なにほど力ちからが有あるとても 荒あらの野のが原はらの荒風あらかぜに

吹ふかれて體からだは砂すなまぶれ 頭あたまの髮かみはテカテカと

光ひかりの強つよい禿頭はげあたま 何どんな神かみなと出でてうせよ

豐日とよひの別わけの神かみの國くに 豐日とよひの別わけの神國かみくには

荒あぶる神かみや曲津神まがつかみ 曲まがつた心こころの八公はちこうや

虎公とらこうのやうな奴やつが居をる

八公はちこう 〇ヤイ何なにを言いふのだい、宣傳使せんでんしが來くると思おもつて貴様きさま一人ひとりが助たすかり度たいと思おもふ

のか、俺の悪口まで歌ひよつて怪しからぬ奴だ。覚えて居る

大男「八公、熊公、ここ迄ござれ、ドッコイシヨドッコイシヨ」

と、舌を出し、手を振りながら、八公を嘲弄しつつ、宣傳使の聲のする方に向つて走り行く。

日出神「お前は豊の國の者か」

大男「ハイ私は豊の國の熊といふ野郎です。能う来て下さいました。しかし、こ

の國は七分どほり沙漠で毎日日日風が吹きます。それはそれは「えらい」砂煙で

目も鼻も開けて居る事は出来ませぬ。それで彼方此方の木草の繁つた山を撰んで、

木の實を食つたり兔や猪を生捕て生活をして居る惨目な國であります。駱駝は澤

山に居りますが、彼奴馬鹿な奴で大きな圖體をしよつて何も役に立たず、時々虎

や狼に追はれて吾々人間の居る處へ妙な聲を出して押寄せて来るなり、その時に

は吾々の歩く場も無いやうな目に會せませぬ。貴下はこの國に折角御出で下さつた

が、もう御歸りになつたが宜しからう。世界は廣いのにこんな悪い國に御出でに

なつたつて仕方が有りませぬ。肥の國の八島別のやうに又虎轉別とか云ふ悪者が

出てきて惨い目に會はされては御氣の毒ですから、もうこれ限りこの山を引き返して熊襲の國にでも御出でなさいませ。私は決して悪いことは申しませぬ。貴下の歌はつしやる宣傳歌は誠に結構ですが、この國の人間の耳には餘り立派過ぎて這入りませぬ」

と虎轉別の豊日別が現在眼の前に居るのも知らずに喋り立てる。

豊日別「俺はその悪者の虎轉別だよ。今は日の出神の御取計らひに依つて此の國の守護職と成つたのだ。お前らは豊の國の都へ吾々一同を案内いたせ」

大の男熟々と豊日別の顔を見て、

大男「イヤ、肥の國の虎轉別といふ奴は頭の禿げた悪者だといふ事なのに、それにお前さまは毛が生えて居るでは無いか、結構な宣傳使様だらう。それに何ぞや鬼のやうな人の嫌ふ惡の強い虎轉別じやなんて戲言にも程がある、本當の名を仰言つて下さい」

豊日別「そりや實際だ。何は免もあれ、豊の國の都へ案内してくれ」

大の男は、不承無精ながら先に立つて、豊の國の都へ、四人の宣傳使を導き行

く。八公はちこうその他たしごと四五のそまびと杣人は路傍みちばたに腰こしを抜ぬかしたるまま、
八公はちこう「オイオイ熊公くまこう貴様きさまどこへ行く。豊とよの都みやこにでもそんな奴やつを案内あんないしたら、この
國くには大變たいへんだぞ。俺おれ一人ひとりでも雲天くもてん焼やけに成なつてやるぞ」
と叫さけぶ。

熊公くまこう「八公はちこうの腰こし抜ぬけ、喧やかましう云いふない、善ぜんか悪あくか未まだ知しれやしない。馬うまには乗のつ
て見みい、人ひとには添そうて見みいだ。貴様きさまも早はやく腰こしを癒なほして後あとから俺おれの處ところを探たづねて來こい」
と云いひながら都みやこを指さしてドンドンと急いそぎ行く。

四人よにんの宣傳せんてん使しは又またもや宣傳せんてん歌かを歌うたひつつ進すすみ行く。

(大正一一・二・二 舊一・六 谷川常清録)

(第三三章 第三八章 昭和一〇・二・二五 於天恩郷透明殿 王仁校正)

第三九章 駱駝隊らくだたい (三三九)

霧島山の坂道を、西南に向つて下り來たりし四人の宣傳使は、大の男の熊公を先頭に足に任せて下り行く。

熊公「モシモシ、この方へモ一少し行けば大沙漠です。この沙漠をば越えぬ事は、豊の國の都には行けませぬ。幸ひ向ふの森林に澤山の駱駝が居ります。彼奴の背中に跨つて沙漠を横斷いたしませうか」

日出神「それは面白からう、便利だ。駱駝を七八頭引張つて來て呉れないか」
「畏まりました」

と熊公は駱駝の群に向つて驅け出しぬ。四人の宣傳使は路傍の草の上に腰うち掛け、息を休め居る。暫くありて駱駝を使ひ馴れたる熊公は、數十頭の駱駝を引張り來たり。

日出神「ヤア、澤山のものだなあ」

熊公「何れなつと、御氣に入つた奴に御召し下さい。外の奴は控へとして連れて行きます。沙漠の中は水が有りませぬから、水が無くなつたら、此奴の背中の團壘を破つて水を出して飲みつつ行くのです」

面那藝つらなぎ 調法てうはふなものだなあ〆

と感心かんしんする。日の出神ひのかみは翻然ひらりと駱駝らくだに跨りまたが、續つづいて三人さんにんの宣傳使せんでんしも熊公くまこうも同じく、駱駝らくだの上うへの人ひととなりぬ。

日出神ひのかみ 〆これは焦暑いらあつい、焦付こげつくやうな沙漠さばくを歩あるくより苦勞くらうはない。本當ほんたうに「ラク

ダ」

と無駄むだ口ぐちを喋りしゃべながら駱駝らくだを竝ならべて、春風涼はるかぜすずしき不毛ふまうの沙漠さばくを進すすみゆく。

折をりから旋風せんふう吹起ふきおこり、砂塵さぢんを捲まき上げ、四邊しへん暗澹あんたんとして咫尺しせきを辨べんぜざるに立到たちいたり、

加くはふるに折をり悪あしく向むかふ風かぜなれば、時々ときどき一行いっかうは駱駝らくだの頭あたまを廻めぐらして、風かぜを背せ中に受う

け息いきを休やすめける。暫しばひくありて猛烈まうれつなる旋風せんふうは、ピタリと止とまり、酷熱こくねつの春はるの太陽たいやうは

ガンガンと輝かがやき始はじめたり。熊公くまこうは先頭せんとうに立たち、歌うたひ始はじめたり。

〆日ひが出でた日ひが出でた沙漠さばくの空そらに 日ひが出でた日ひが出でた駱駝らくだに乗のつて

これが日ひの出での宣傳使せんでんし 頭あたまは暑あつい顔かほも暑あつい

厚あつい情なさけに絆ほだされて 水みづも漏もらさぬ熱あつい中なか

暑い肥の國立ち出でて

豊日の別の宣傳使

豊の都へ進み行く 照れよ照れ照れ日の出神よ

吹けよ吹け吹け科戸の風よ 起てよ起てたて砂煙

駱駝の足の續かむ限り 駱駝は【えらかる】己は【らくだ】

雨も降れ降れドツサリ降れよ 降つて湧いたる宣傳使

天の星から天降り 豊の御國の砂の原

進み行く身の雄々しさよ 豊の都はもう少し

少しと云つてもまだ百里 百里千里も何んのその

進めよ進め駱駝隊 進めよ進め駱駝隊

と四邊憚らず、出任せの歌を歌ひつつ進みゆく。數多の駱駝の背に載せたる果物

に、饑を凌ぎながら、日を重ねて漸く豊の都に着きにける。

大の男の熊公は、都間近くなりしより元氣を増し、駱駝の尻を無性矢鱈に打ち

ながら、一目散に都を指して獅子奮迅の勢にて驅込みぬ。次いで四人の宣傳使は、

吾れ劣らじと駱駝の尻に鞭打ちて、雲を霞と驅けり行く。豊の都の入口には、數多の群衆聲を揃へてウローウローと、熊公の歸還を祝しける。

この熊公は、豊の國の大酋長なり。本名を八十熊別といふ。八十熊別は神通力を持ちあたり。日の出神の宣傳使が、このアフリカの筑紫島に渡り、熊襲の國に上陸し肥の國を越え豊の國に下り來ることを前知し、この沙漠の難を救ふべく數多の駱駝を引連れ、霧島山の山麓迄この一行を迎へむために來たりしものなり。しかして熊と熊公と只人の名を名告り居たるなり。八十熊別は豊の都に着くや否や、國人は踊り狂うて無事の歸還を祝しける。國人の歡呼の聲に包まれて、八十熊別は四人の宣傳使と共に吾館に轡を連ねて、悠々と奥深く姿を隠しける。

あとに残りし群衆は、口々に言葉の花を咲かしめたりけり。

甲「オイ大酋長の八十熊別さまは、何う考へてあんな衰蟲見た様な、乞食の様な、色の白い奴や、赤い奴や、黒い奴をあゝの廣い沙漠を越えて引張つて來たのであらうか。チツト物好きにも程があるぢやないか。あんな奴を連れて來ようものなら、豊の國はさつぱり蹂躪られてしまひ、【ドド】の【ドン】詰りは、自分も敲き出

されてしまふかも知れやあしないぜ」

乙「八十熊別さま丈なら宜いが、俺たちも何處へ敲きやられるか知れやあしない。困つた事になつたものだのー」

丙「貴様たちに何が判るかい。アレ丈力の強い賢い立派な八十熊別さまに抜目があるものかい、燕雀何ンぞ大鵬の志を知らむやだ。燕や雀がチユーチユーと云つたつて「あく」ものかい」

乙「燕雀とは何ンぢや、俺らが燕雀なら、貴様たちは糞蟲だよ」

丙「何が糞蟲だい、糞が呆れらあ。燕雀の糞から湧きよつた、貴様が糞蟲だよ」

丁「貴様らは何ンにも知りはしない、この方の申す事を謹んで承はらう。この間

も艮の天に當つて、五色の雲が立ち昇つたのを、貴様らも見ただじやらう」

丙「オー見た見た、あれは一體なんだらうナア」

丁「黙つて俺の云ふ事を聞け。天に風雲の變あり人に病の苦しみありだ。何ンで

も世の中が變つて來るのよ。夫れで賢い八十熊別様は御覽遊ばして、何ンでも立

派な神様が艮の方に現はれてござると仰有つて、駱駝を引連れて御出遊ばしたの

ぢや。夫れ今大酋長様に踵いて来たあの神さまは、五色の雲の變化遊ばしたのに
違ひないのだ。愚圖々々吐かすと天罰が當るぞ」

甲「道理で、乞食の雲助が天から降つて来よつたのか、「てん」で別が分らぬわ
い。「やそ天やけ」とか「雲天焼」とか、何ンとか云ふ神が交つとると云ふ事じ

や」

丁「分らぬ奴ぢや、貴様らに話は出来ぬ。掴まへ處の無い事ばかり吐かしよつて」

甲「掴まへても居らぬのに話すも「はなさぬ」も有るものかい、馬鹿ツ！」

没分漢が寄つて集つて、勝手な下馬評を試みてゐる。八十熊別の館には、又も
や天を衝いて五色の雲立ち昇つた。群集はアツと叫んでその場に倒れ合掌するの
み。

(大正一一・二・二 舊一・六 高木鐵男録)

第八篇 一身四面

第四〇章 三人奇遇（三四〇）

熊公くまこうに連つれられて、四人よにんの宣傳使せんでんしは宏大くわうだいなる構かまへの館やかたに導みちびかれ、種々しゆじゆの馳走ちそうは堆高うづたかく竝ならべられぬ。數多あまたの侍女じぢよは盛装せいさうを凝こらして果物くだものの酒さけを取とり出だし、四人よにんの宣傳使せんでんしを響應きやうおうしたり。而しかして一行いつかうは宣傳歌せんでんかを盛さかんに歌うたひ始はじむる。數多あまたの侍女じぢよは松まつの小枝こえを手てに手てに携たづさへて、歌うたに連つれて淑しとやかに舞まふ。日ひの出神でのかみ一行いつかうは長途ちやうとの疲つかれをここに慰なぐさめ元氣げんきは頓とみに回復くわいふくしたりけり。日出神ひでのかみ 貴下きかは熊公くまこうと仰あふせになつたが、初はじめてお目めにかかつた時ときより、凡人ただびとならじと睨にらんでおきましたか、果はたして我わが推量すありやうに違たがはず此國このくにの大酋長だいしうぢやうなりしか、重かさねの重かさねのお心遣こころづかひ感謝かんしゃの至いたりに堪たへませぬ。我々われわれは神伊奘諾大神かむいざなぎのおほかみの落胤らくいんにして、日ひの出神でのかみと申まをすもの、世よの大立替おほたてかへに際さいし撞つきの大神おほかみは天あまの浮橋うきはしに立たち、それより天教てんけう

山に降り玉ひて八百萬の國魂の神を生ませ玉ひ、我々をして國魂神を間配らせ玉ふのであります。この後はどうか私の指揮に従つて貰ひたい」と嚴かに云ひ渡したり。

熊公「承知いたしました。私は熊公とは假の名、國治立命の落胤、高照彦と申すもの、大神の御退隱後は八十熊別と名を變へてこの亞弗利加の原野に都を造り、時を待ちつつあつたものであります。時節の到來か神の御引き合せにて貴き日の出神様との今日の對面」

と云ひながら嬉し涙をボロボロと流しける。日の出神はこの物語を聞いて感に打たれ獨語、

「あゝ神様は何處までも注意周到なものだナア。水も漏さぬ神の御仕組、何處の果に如何なる尊き神様が隠してあるか、分つたものでない」と俯むいて首を傾け、暫くは物をも云はず溜息を吐く。

日の出神は三人の宣傳使に向つて、
「皆の衆、今の命のお言葉を聞きましたか。世の中にはどんな偉い神様が落ちて

ござるか分りませぬ。皆さまも是からは、どんな落魄た神でも人間でも侮る事は出来ませぬよ。あゝ今日は何たる結構な日であるか、高照彦といふ立派な神様がこの世界に隠してあるといふ事は、天教山の木花姫より承はつて居りました。何とかしてその御方に一度お目に懸り度と忘れた暇とては無かつたのです。今日は嬉しくも、斯も貴き御方に出遇ひ、何とはなしに心強くなりました。末座に控へたる豊日別は立上り、扇を披いて松葉を左手に持ちながら、席上立つて自ら歌ひ且つ舞ひ始めたり。

久方の天津空より天降ります 神伊奘諾の大神の

珍のかくしの御子とます 光も清き日本の

日出る神の宣傳使 我は輝く肥の國の

守の神と現はれて 虎轉別と名告れども

その源をたづぬれば 神素盞鳴の大神の

隠し給ひし珍の御子 豊國別の神なるぞ

豊國別の神なるぞ

世の荒浪に隔てられ

醜の曲靈に取り憑かれ

身を持ち崩し虎轉別の

虎狼や獅子熊に

劣らぬばかり荒れ果し

心の空の村曇り

曇りを晴らす日の神の

御胤と現れし宣傳使

日の出神に救はれて

豊の御國の主宰神

任けのまにまに出で来る

心の空ぞ涼しけれ

と歌によそへてわが素性を明しける。日の出神も高照彦神も此奇遇に神恩の深きを感謝し、直に神籬を立て國治立大神、豊國姫大神、伊奘諾大神、撞の御柱大神を鎮祭し、天津祝詞を奏上し、一同歡びを盡して宴會を閉ぢたりにける。此より日の出神は澄世姫命の神靈を國魂として鎮祭し、豊日別をして豊の國の守護職となし、日の出神、高照彦神、外二人の宣傳使は筑紫を指して足に任せて勇み進み行く。

この島は身一つに面四つあり、豊國、肥國、熊襲國、筑紫國と區別され居るなり。しかしてこの四つの國を總稱して又筑紫の洲といふなり。
(大正一一・二・二 舊一・六 加藤明子録)

第四章 枯木の花〔三四一〕

時世時節と云ひながら 稜威も高き高照彦の
貴の命は畏くも 國治立の大神の
かくしの珍の神の御子 天より高く咲く花も
豊の御國に身を隠し 八十熊別と名を變へて
沙漠の包む豊國の 都に現はれ酋長の
いやしき司となり果てて 月日を松の時津風

花咲く春の今日の空 日の出神と諸共に

長の年月住馴れし 豊の都を後にして

天と地との神々に 赤き心を筑紫湯

御空を指して出でて行く 日の出神を先頭に

續く面那藝宣傳使 四方の雲霧祝姫

登る山路も高照彦の 貴の命と諸共に

聲も涼しく宣傳歌 四方の山々谷々に

木靈響かせ勇ましく 進みて来る一行は

筑紫の國の國境 玉野の里につきにける。

ここに四人の宣傳使は路傍の岩角に腰打ちかけ、息を休めながら空ゆく雲を眺めて、回顧談に耽りける。

高照彦、ア、昨日に變る今日の空、流れ行く雲を眺むれば、實に人間の身の上ほど變るものはない。回顧すれば吾こそはエルサレムの聖地に現はれ給うた國治立

命の珍の御子と生れ、少しの過ちより父神の勘氣を蒙り、この島に永らく神退ひに退はれ、身装も卑しき八十熊別となつて永い月日を送つて來た。聖地の大變を耳にし、一時も早くエルサレムに歸つて父の危難を救はむと心は千々に焦つてみたが、何を云うても勘氣を受けたこの體、父母の危難を居ながらに聞き流し、見流し、助け參らずその術さへも泣きの涙で月日を送る苦しき。世は段々と立替り世界は大洪水に浸され、その時吾は方舟を作つて、ヒマラヤ山に舞ひ戻り、目も届かぬ大沙漠を拓いて、やうやう今日まで過してきた。ア、時節は待たねばならぬもの、今日は如何なる吉日か、畏れ多くも神伊邪那岐の大神の珍の御子たる、日の出神に吾が素性を打ち明かし、實にも尊き天下の宣傳使となつて、今日のお供に仕へまつるは何と有難い事であらう。父の大神は常に仰せられた。この私をアフリカの沙漠に神退ひ給うた時に、二つの眼に涙を垂して「英雄涙を振つて馬稷を斬る、俺の胸は焼金をあてる様だ、何うして吾子の憎いものがあらう、かうなり行くも時世時節と諦めてくれ、ただ何事も時節を待てよ、時節が來れば煎豆に花の咲く事もある、枯木に花の咲く例もないではない、籠の鳥でも時節を待て

ば籠の破れる事もある。無慈悲な親ぢやと恨まずに、天地の規則は破られぬ、サツサと行つてくれ、老少不定、これが現世の見納めになるやも知れぬ」と仰有つた事を今思ひ出せば、何とも云へぬ心持がして来る。これを思へば今日の吾々のこの嬉しさを父の大神に、一度お目にかけて見たいものだ。父のこの世を知召す時代は神代といつて誰も彼も皆神の名を賜つたが、世界の立替以後大洪水の後のこの世は神の名は無くなつて、誰も彼も人といふ名になり、彼方、此方の頭するものばかりが司となつて、加美といふ名をつけることになつた。然し神代は亂れたといつても今日の様な惨たらしい世の中ではなかつた。人間の代になつてからは悪魔はますます天下を横行し、血腥い風は四方八方より吹き荒んでくる。これに付いてもこの世を治め給ふ伊邪那岐大神の大御心使ひが思ひやられ、杖柱と思つてゐた伊邪那美命は、この世に愛想をつかし、火の神の爲に夜見の國にお出ましになつたとかいふ事だ。ア、吾々は伊邪那岐の大神の珍の御子なる日の出神に引き出され、こんな有難いことはない。この御恩を酬ゆるために骨身を碎いても大神様のために盡さねばならぬ。ア、有難いありがたい、變れば變る世の中だ

ア
と長物語をしながら、兩眼から滴る涙を拭ふ。日の出神一行はこの詐らざる話に感激して、何れも袖をしぼりける。

(大正一一・二・二 舊一・六 吉原亨録)

第四二章 分水嶺(三四二)

高照彦の憂に沈む懷舊談に、耳を澄まして聞き入りみたる三人の宣傳使は、有爲轉變の空行く雲を打眺め、感慨無量の態なりしが、面那藝司は日の出神に向ひ、
「ただいま高照彦様のお話を聞きました、實に感心いたしました。これを思へば、我々はわづかな狭い白雪郷に酋長となつて、夢の如くにこの世を暮して來たが、高照彦様の御苦勞のことを思へば、殆ど九牛の一毛にも如かない苦勞だ。幸にも日の出神の宣傳使に三五教の結構な教を説き諭され、翻然として悔い改め、ここ

まで来るは来たものの、未だ未だ我々は苦勞が足りない。實際の事を白状いたしますが、明けても暮ても、白雪郷に残しておいた我が妻の面那美姫は何うして居るであらうか、譯の分らぬ虎や熊のやうな里人を、女の弱い細腕で酋長として何うして治めて行くであらうか。思へば思へば不愼なものだ。夫婦となるも深い因縁だのに、神の爲とは言ひ乍ら、海山越えて二人は悲しき生木の別れ、四鳥の悲しみ釣魚の歎きとは我々の境遇であらうと、明け暮愛着の涙を人知れずしぼつたのを思へば、實に情ない。何たる卑怯であらう。あゝ何たる未練な我であらう。生者必滅會者定離だ。愛別離苦の念に驅られるやうな事では、到底この世を救ふ清き宣傳使となることは出来ない。あゝ悪かつた。あゝあゝ神様、どうぞ私の弱き心に、貴神の強き力を與へて下さいませ」

と天に向つて合掌し、涙を流しける。

日の出神はうち頷き、

「あゝそれで宜しい。その心掛でなくては、とても宣傳使にはなれない。私も實の事を言へば、貴方の精神上の覺悟の點に於て、最う少し何處やら物足らぬ心持

がしてゐた。中途に神徳を外して了やせぬか、腰を折りやせぬかと、やや不安の念に驅られてゐたのだ。あゝ私もそれを聞いて本當に安心した。有爲轉變の世の中は、何事も惟神に任すより仕方がない。今といふこの瞬間は、善惡正邪の分水嶺だ。「過去を悔まず未來を恐れず」、神命のまにまに皆さま心を合せて進みませう」と言ひ切つて、先に立ち、又もや涼しき聲を張りあげて、

心つくしの益良雄が
波に漂ふアフリカの
心は矢竹にはやれども
足は草鞋に破られて
赤き心をたよりとし
踏み行く旅の面白さ
面四つありと聞くからは

神の命を蒙りて
筑紫の國へと進みゆく
弱り果てたる膝栗毛
血潮を染めなす紅葉の
豊葦原の瑞穂國
そも此の島は身一つに
残るはもはや一つ面

思ひは同じ宣傳使

宣る言靈も清くして

大海原を包みたる

深霧伊吹きに拂ひつつ

國の主宰の白日別

鎮まりぬます都まで

進めや進めいざ進め

進めや進めいざ進め

と勢よく驅け出しにける。

折しも、轟然たる大音響聞ゆると見る間に、東北の天に當つて黒煙濛々と立ち

昇り、大岩石は火彈となりて地上に落下し來りぬ。一行はこの爆音に思はず歩み

を止め、しばし途上に佇立して、その慘澹たる光景を遙にうち仰ぎける。

面那藝「モシモシ、あれは何處の山が破裂したのでせうか。吾々の前途を祝する

のでせうか、あるひは惡神が呪つてるのではありますまいか」

祝姫「いいえ、吾々は神様の御用のために斯うして天下を遍歴する者、天地の大

神様は我々の一行の門出を祝するため、煙火を上げて下さったのでせう。最前

も日の出神様が有爲轉變の世の中ぢやとおつしやつたのでせう」

面那藝「さうでせうかな。それにしても餘り大きな音でした。私は恥しい事だが、
膽玉が轉覆しかけましたよ」

日出神「アハ、ハ、ハ、ハ、一寸面那藝さま、度胸を【しつかり】せないところな
事ではない、今かうして吾々の通つてゐる大地が爆發するかも知れない。その時
には貴方は何うする心算だ」

面那藝「さあ刹那心ですな。善惡正邪の分水嶺、一寸先のことは分りませぬわ
日出神「さうでせう、さうでせう。しかしこの世の中はすべて神様の意の儘だ。

今破裂したのは、あれはエトナの火山だ。タコマ山の祭典の時に、爆發して以來、
今日まで鎮まつてゐたのだが、又もや突然爆發したのは吾々に對する天の警告だ
らう。龍宮城の言靈別の神はエトナ火山の爆發した一刹那、惡神に毒を盛られて
大變に苦しまれたといふことだ。吾々も注意せないと、筑紫の都へ行つて、何
な惡神の計略の罠に陥られるかも知れないから、氣を付けなくてはならぬ」

高照彦「さういふ時には吾々はどうしたらよろしいか」

日出神「別に何うするも斯うするもありませぬ。ただ天地を自由にし、風雨雷霆

を叱咤しつたするといふ神言かみことを、無駄むだ口ぐちを言いふ暇ひまがあつたら、奏上そうじやうさへすれば凡すべての災わざはひ
は拂はらはれて了しまふのです」
祝姫はふりひめ「今いまここで一同いちどう揃そろうて神言かみことを奏上そうじやうしては如何いかにでせう。大變たいへんに足あしも疲つかれました
なり、休息きうそくがてら神言かみことを奏上そうじやうしませうか」
日出神ひのでのかみ「休息きうそくがてらとは、それは何なんの事ことです。序ついでに神言かみことを上げるといふやうな事こと
は出来できない。休息きうそくは休息きうそく、神言かみこと奏上そうじやうは奏上そうじやうだ」
祝姫はふりひめ「いや、これは有あり難がたう、つい「うっかり」と取違とりちがひをいたしました」
高照彦たかてるひこ「それだから、女をんなの宣傳使せんでんしは頼たよりないと言いふのだ」
日出神ひのでのかみ「人の事ことはかまはひでも宜よろしい。宣傳使せんでんしの身みになつたホヤホヤで、人の事こと
を言いふどころですか。貴方あなたこそ私わたくしは頼たよりないと思おもつてゐる」
四人よにんの宣傳使せんでんしは道々みちみちいろいろの話はなしを進すすませながら、漸やうやくにして大野原おほのはらに出いで、
見みれば南方なんぽうに當あたつて、巍然ぎぜんたる白日しらひ別司わかつかの鎮しづまる館やかた現あらはれたりける。

(大正一一・二・二 舊一・六 櫻井重雄録)

第四三章 神の國〔三四三〕

日は西山に傾いて、埒に歸る群鴉、遠音に響く暮の鐘、ゴーンゴーンと鳴り渡
 る、四面暗澹として寂寥の氣に包まれたる筑紫の都の町外れ、前方に當つて數十
 人の口々に叫ぶ騒々しき物音聞えきたる。四人の宣傳使は何事ならむと、聲する
 方に足を早めて進み寄り、暗に紛れてジツとこの様子を伺ひひたり。見れば數多
 の篝火をドンドン焚いて數十人の人々、頭の光つた瓢箪面の男を中に置き、
 甲「ヤイ、貴様は蚊蜻蛉とか蚤取とか、蚊取とか吐かす禿頭の、瓢箪面を下げよ
 つて、自分の頭のやうな瓢箪を腰にブラブラと澤山にさげて、ウラル彦の宣傳歌
 を歌つて「飲めよ騒げよ一寸先や闇の夜、闇の後には月が出る」とは何をほざき
 よるのだい、これを見いこの空を。一の暗みの眞の闇夜ぢやないか、月が出るな
 ら出してみい。篝火を焚かな分らぬ様な闇の晩に、月が出るなんて、ヘン大方ウ
 ソ月が出るだらう。それ見い貴様の月は、頭に附いてゐながら分るまいが、篝が
 ついてゐるわ。貴様のド頭は月の様に光つてらあ、闇の後に月が出るとは自分の

禿頭の自慢だらう」

乙「此處を何と心得てる。白日別といふ立派な御方の鎮まり遊ばす都だぞ。勿體

無くも黄金山の麓に現はれ給うた三五教の神の教を守る神の國だ。宣り直せ、云

ひ直せ」

蚊取別「ハイハイ宣り直します。どうぞ許して下さいませ」

乙「宣り直すなら許してやらう、さあ早く宣り直さぬか」

蚊取別は慄ひ聲を出し妙な疝聲を張りあげて、

「飲むなよ、騒ぐなよ、一尺先は闇の夜、闇の夜さには月は出ぬ」

乙「馬鹿、何吐かしよるのだい。なほ悪い、もつと確り宣り直さぬか」

蚊取別は悲しさうな聲を出して、

「私は馬鹿な生れつきで俄に宣り直すと云つたつて口クな事は宣れませぬ。どう

で貴方がたのお氣に召す様な事はございませぬが、宣れとおつしやりや仕方が無

いが、命あつての物種だ。死ぬ代りに一生この歌を歌ひ通さうと思つてみた決心

を破つて、マ—一遍宣り直して見せませう「除けよ、妨げなよ一同の者よ、散れ

よ散つた後では酒を飲む「ハイハイ」

乙「こいつは益々馬鹿だな。俺が教へてやる、しつかり聞け、かう吐すのだ。」

「伸べよ、榮えよ、一寸咲いても神代、神の國には月が照る」よいか、サア云うたり、云うたり」

蚊取別は頭をなでながら、

「ハイハイ、ま一遍云うて下さいな、忘れました。ハイ」

「忘れると云ふことがあるか、武士の言葉に二言はないぞ、考へ出して宣り直せ」

「ノ、エー、ノ、エー、ハイハイ」

乙「早く云はぬか」

「ハイハイ、ノ、ベ、ヨ、酒樽、へ、へ」

「ドツコイ違ふぞ、酒樽なんて、直に酒の事を吐かしよる。伸べよ、榮えよと、

かう云ふのだい」

「力、力、勘忍して下さい、その代りに私の懺悔を致します。そんな六ヶ敷いこ

とは覺えられませぬ」

ソラ面白からう。一つ汝の履歴を云つて見い。ドウデ碌な事はあるまい

ドウデ私は碌でなし
常世の國の常世彦

常世の姫に見出され
常世會議に曳出され

喉に詰まつて一言も
口も利けない悲しさに

常世の城を放り出され
美山の彦の宣使さまに

拾ひあげられ鬼城山
ナイヤ河原の水汲みと

仕へて又も馬の世話
【うま】いこと云うて麻柱の

神の教の宣傳使
春日の姫や月照彦の

ドエライ神を馬に乗せ
道に大足彦の司

聾になつた宣傳使
砦の中に引込みて

美山の彦に御褒美を
頂戴しやうと思つたら

的外れてしくじつて
一度は降参したけれど

酒が飲みたい飲みたいと
喉の蟲奴が吐すので

思ひ切られぬ身の因果

これほど甘い酒の味

私は死んでも止めないと

再び心を翻し

ウラルの彦の宣傳歌

歌うて居たら何處となく

大中教の宣傳使

私の前に現はれて

貴様はよつぽど偉い奴

酒を飲め飲め酒なれば

いくらなりとも貢いでやらう

世界の奴を悉く

酒に酔はして泡吹かせ

魂を蕩かし身を碎き

天下萬民メチャメチャに

やつた所でウラル彦

ウラルの姫が現はれて

枉津の國としてしまふ

その使の宣傳使

蚊取別とは俺のこと

筑紫の國までやつて来て

酒を飲むなとは情ない

これがどうして止められよか

好きな酒をば止めるなら

一層死んだがましであらう

あらう事があるまい事か

譚の判らぬ下戸たちに

好きな酒をば止められて

私は立つ瀬がないわいのー 妻も子供も振捨てて
酒で苦勞をする私は 何と因果の生れつき
名酒ないではないかいな 酒も酒も世の中に
酒ほど甘いものあるか 四百種病の病より
辛い酒を止める事 止めてたまるか此酒を
飲まず嫌ひは止めにして 皆さま一つ飲ンで見よ
飲めよ騒げよ一寸先や闇の夜

「コラ又吐すか。おいおい皆の奴、あの禿頭をかち割つてやれ」
「はいはい悪うございました。私が悪いのではございません、皆飲んだ酒が悪い
のです。【サケ】、【サケ】困ったことになったものぢや」
群衆は蚊取別を中に置いて見せ物のやうに面白がつて嘲弄つて居る。闇の中か
ら、

伸のべよ榮さかえよ一寸ちよつと咲さいても神かみ世よ
 神かみの國くにには月つきが照てる
 月つきより明あかい大空おほぞらの 日ひの出で神かみが現あらはれて
 天津御空あまつみそらに高たか照てる彦ひこの 神かみの命みことの宣せん傳でん使し
 酒さけの惡あく魔まも祝は祝ふり姫ひめ 蚊かとり取とりの別わけが今いま茲ここで
 面つらを曝さらした面つら那な藝ぎの 司かみの命みことの宣せん傳でん使し
 一いち度どに開ひらく梅うめの花はな 花はなは紅くれなゐ葉はは緑みどり
 結むすぶ實みのりは神かみの國くに 結むすぶ實みのりは神かみの國くに

と闇やみを破やぶつて宣せん傳でん歌かは聞きえ來きたりける。

（大正一一・二・二 舊一・六 奥村芳夫録）

第四四章 福邊面（三四四）

思ひがけなき藪から棒の宣傳歌に、一同は肝を潰し、キヨロキヨロと四邊を見

廻したれど、それきり何の聲もなければ、群衆は又もや口々に喋りはじめけり。

今の聲は何だらうな。大變に涼しい、力のある、儼として犯す可からざる、莊重なる、立派なる、嚴格なる」

「オイ貴様、同じことばかり竝べよつて、譯の判らぬ奴だな。嚴格だの、莊重

だのと、何の事だい。貴様も蚊取別の仲間だナ」

「黙れツ。貴様のやうな不分漢に、判つてたまるか」

「おい、蚊取別が逃げるぞ逃げるぞ。皆氣を付けぬかい」

蚊取別は、この聲に驚きて振りかへり、止まつた蚊を敲くやうな手つきをして、

自分の顔を「ぴしやり」と打ち敲き、猫のやうに右の手を、口の邊りに「ちよこ

なん」と据ゑながら、左の手に、落つる涙を拭ひ、蚊の鳴くやうな聲を出して、

「皆のお方、どうぞ赦して下さいませ。その代りにこのお酒を飲まして上げます」

「馬鹿な奴ぢやな、酒が「いかん」と云うて吾々は、貴様と談判をして居るのだ。

吾々は同じ人間だ。酒とと女の嫌ひな奴は、三千世界にありやしないよ。そ

れでも吾々は三五教の教を守つて、好きな酒もよう飲まずに辛抱してゐるのだ。

ただ神様の御神酒を頂くばかりのことだ。貴様のやうに粟島さまの化物のやうに腰が重たいほど瓢箪を吊りよつて、世界を酒で亂さうとしても、筑紫の國に限つて、貴様らに亂される人間は一人もゐないのだ。

ソ、それはごもつとも、思ひは同じ酒の味、酒の嫌ひな人間が、廣い世界にあるものか、酒は生命の親ぢやぞい。

澁太い奴だ、こやつは酒に魂を腐らして「けつ」かる。何と云つても判らぬ奴だ。おい蚊取別、俺の前でその瓢箪を皆空にしてへ。

蚊取別は耳を少し左方に傾けながら、右の手に額をぴしやりと打ち、

貴方は今「かんとり」酒とおつしやつたが、瓢箪を火にかけて爛をする譯にも行かず、どうした拍子の瓢箪やら。

おいおい皆の者、此奴は酒に喰ひ酔うて俺らを肴にしよつて、いい氣になつて玩弄にしよるのだよ。俺らが蚊取別を虐めた積りで、却つて蚊取別に管を巻かれ虐められて居るのだよ。馬鹿々々しいぢやないか。一つ頭をこの杖で「かんと

り】別とやつてやるかい」

群衆は『よからう、よからう』

と、四方八方より棒千切を以て、蚊取別の頭を目がけて打ちかからうとするを、蚊取別は腰の瓢箪を両手に抱へ、頭の上に載せて、打つなら打てと云はぬ許りに、身構する。

群衆は我劣らじと打つてかかる。打たれて瓢箪は破れ、酒は四方に飛び散る。蚊取別は頭から酒を浴びて、俄に誕生のお釋迦さまになりてしまひける。

このとき暗を衝いて、又もや宣傳歌が聞えきたりぬ。

『常世の國に生れませる

少彦名の神様の

醸し給ひし神酒なれば

少しは飲めよ程ほどに

御神酒を飲むはよけれども

酒に飲まれな百の人

飲みたい酒も飲まずして

氣張つてをれば何時か又

心荒びて暗雲に

酒を飲まねばならうまい

神かみに供そなへた其そののち後に
神酒かみを飲のみまずに頂いたげよ
神酒かみを飲のみまずに頂いたげよ

と涼すずしき聲こゑ聞きえ來きたる。蚊かとり取り別わけはこの聲こゑを敏さとくも耳みみに入れ、

「やい、皆みなの奴やつ、今いまの歌うたを聞きいたか。貴様きさまらは大勢おほぜいだと思おもつて、俺おれを馬鹿ばかにした

が、俺おれも今いままで多勢たぜいに無勢ぶぜいだ。強つよい奴やつにア負まけて置おけと、「むかつく」腹はらをじつ

と堪こらへて疔癩かんしやく玉たまを抑おさへて居ゐたが、モ、もう俺おれは承知しょうちせぬぞ。今いまの歌うたを聞きいたか

い。御神酒おみきは飲のむな頂いたげと聞きえたであらう。飲のむのも頂いたぐのも同おなじことだ。さあ、

俺おれの味方みかたのウラル彦ひこの宣傳使せんでんしが現あらはれた以上いじやうは、もはや鬼おにに鐵棒かなぼうだ。なんぼなと

喋しやべれ、頭あたまを敲たたけ、敲たたいて後あとで後悔こうくわいするな」

と鼻息はないき荒あらく兩臂りやうひぢうを振ふつて威張ゐばり出だしける。

「やいやい、禿頭はげあたまの瓢箪面へうたんづらが俄にはかに【はしやぎ】よつたぞ。愚圖ぐづぐづ々々してゐると、

彼奴あいつの同類どうるみが暗くらがりから出でて來きて、どんな事ことをするか判わからない。逃にげる逃にげる」

群衆ぐんしうはこの聲こゑに驚おどろき、先さきを争あらしひ暗やみに紛まぎれて逃にげ散ちりにけり。

蚊取別はただ一人篝火の前に立ち塞がり大音聲を張りあげて、

「俺を誰だと思つて居るか。勿體なくも鬼城山に館を構へて、御威勢並びなき美

山彦の第一番の家來」

少し小聲で、

「家來のその家來の、も一つ家來の又家來蚊取別とは我事なるぞ。【ごく】にも

立たぬ雲蟲奴ら、雲を霞と逃げ失せたな」

と威張り散らしをる。又もや暗の中より、

「神が表に現はれて 善と悪とを立て別る

蚊取の別の曲神は 鬼城山をば抜けて出て

筑紫の國まで流されて 瓢箪面を曝しつつ

知らぬ他國の人々に 頭を張られ油を搾られ

その有様は何の事 三五教の宣傳使

面那藝彦とは吾事ぞ 面那藝彦とは吾事ぞ」

と大音聲だいおんじやうに歌交うたまじりに呼よばはりける。

蚊取別かとりわけはこの聲こゑを聞ききて俄にはかに酔よも醒さめ、頭あたまを抱かかへてその場ばに蹲踞しゃがみたりにける。

(大正一一・二・二 舊一・六 井上留五郎録)

第四五章 酒魂くしみたま〔三四五〕

一いつたん蹲踞しゃがみたる蚊取別かとりわけは群衆ぐんしゆうの散ちり失うせたるに、ほつと一息ひといきし、お山やまの大將たいしやう
俺おれひとり
俺一人おれひとりと云いはぬばかりに、薬罐頭やかんあたまを振立ふりたてて、篝火かがりびの前まへに臂ひぢを張はり威張あばりみたり。

そこへ悠然いっぜんとして現あらはれたる四人よにんの宣傳使せんでんしの一人ひとり日の出神でのかみは、蚊取別かとりわけの肩かたをソ
ツと敲たたきながら、

もしもし蚊取別かとりわけの宣傳使せんでんし、思おもはぬ所ところでお目めにかかりました。今木蔭いまこかげより承うけたまはれ
ばウラル彦ひこの宣傳歌せんでんかを歌うたつて歩あるかれるさうですな。それは誠まことに御苦勞ごくろうなことです。
常世とこよの國くにの會議くわいぎでお目めにかかりました私は大道別おほみちわけですよ、否いや偽にせの常世彦命とこよひこのみことです。

よ
」

聞くより蚊取別は後ふり向いて、ギロリと日の出神の顔を見詰め、尻を後へ突き出し、早くも逃腰になりゐる。

日出神「あなた澤山な瓢箪を持って居ますね」

高照彦「瓢箪だと思つたら、何んだ、光つた顔だな。瓢箪によつた似た宣傳使だ」

日出神「又貴方は他人の事をおつしやる。人の顔の批評は止めて下さい」

高照彦「ハハハイ」

蚊取別「ハア、私はあるから常世の國を放り出され、流れ流れてナイヤガラの瀧

の水上の鬼城山に、永の月日を送りましたが、悪い事を致しまして、たうとう鬼

城山も追ひ出され、それからウラル彦さまの宣傳歌を聞いて、飛び立つ許り勇み

立ち、今はこの通り瓢箪を提げて世界に宣傳をやつて居ります。貴方は矢張りウ

ラル彦の宣傳使ですか」

日出神「吾々は三五教の宣傳使だ」

蚊取別は宣傳使と聞いて、逃げ出さうとする。

ひのでのかみ 日出神「ままお待ちなさい。私も斯うやつて歩いて居るものの、表面は酒を飲む
な飲むなと教へてゐるが、その實世界の奴が酒を飲むと、吾々の飲む酒が無くな
つて困るので、世界の奴は「飲むな、飲むなら悪いぞ」と云つて止めて廻つて、
自分一人「こつそり」と飲んでゐるのだ。好きな酒を止めと云つたつて、どうし
ても止むものでない。世の中はな、かならず裏と表とがあるものだ。お前さまも
酒を飲むと云うて歩くのは結構だが、餘り世界の者に酒ばかり飲ますと、お
前さまの飲む酒が無くなつて了うぢやないか。ウラル彦さまは本當に博愛だな。
お前さまもその博愛に感心して宣傳して居るのだらう。さうして彼方や此方で頭
を敲かれたり、瓢箪を破られたり、天下の宣傳使も竝大抵の事ぢやありますまい、
御察し申す。貴方もここは一つ考へ直して、三五教の宣傳使になつて、自分獨り
美味しい酒を飲む氣はないか。世の中は何事も表があれば裏がある。晝があれば夜
があるものだ。一枚の紙にも裏表がある。なんぼウラル彦さまだとて、裏ばかり
では間に合ふまい。これからはウラル教を表にして、三五教を裏にして、表裏揃
うて吾々と一緒に宣傳に出て來ませぬか」

蚊取別「あー貴方はよく判つてゐる。これまで三五教の宣傳使に澤山逢うたが、それはそれは堅い堅い、石部金吉鐵兜、飲みたい酒も、神が怒るの何うのと云つて辛抱して、グウグウいふ喉を抑へて、唾を呑んで、目を剥いて氣張つてゐる苦しき。こんな事なら死んだが「まし」だ、酒無くて何の己が櫻かなだ。貴方のやうな教なら、ただ今より喜びて御伴をいたしませう。實のところ私もさうしたいのだけれど、何分に智慧が廻らぬものだから、眞正直にやつて來ました。本當によう判つた神さまですな。さうでなくては、世の中が渡れませぬ哩」と顔色を變へ、肩をゆすつて歡ぶ。

三人の宣傳使は合點ゆかず、日の出神の蓑を引張り、
「もしもし貴方のおつしやることは、ちつと違ひはしませぬか」

日出神「違ひはしませぬよ。細工は粒々仕上を見て下さい」
一同は怪訝な顔つき。

夜は深々と更けわたる、水も眠れる丑満の頃となり、日の出神は何事か祈願を籠めた。たちまちその場に何處ともなく、四邊を照す鏡の如き火の玉は降り來り

ぬ。

一同は驚きその火の玉を凝視めりたり。これぞ日の出神の奇魂が、今天より降り來れるなりき。見る見る大なる光りの甕となりぬ。なんとも言へぬ芳ばしき酒は、溢るる許り盛られりたり。蚊取別は鼻を「ぴこつかせ」、蚊取別「やあ、是は是は結構な御神酒、頂きませうか」と早くも甕に向つて飛び付かうとする。

日出神「マア、お待ちなさい。この酒は手をつけたり、杓で汲んでは神罰が當ります。天から與へて下さつた、結構な御神酒、靜かに口をつけて飲まなくては味がありません。」

蚊取別「こんな大きな甕に手も觸れず、杓もつけずに、どうして飲めますか」日出神「私が今飲ましてあげやう」蚊取別「有難う、どうぞ早く飲まして下さい」

日出神は又もや甕に向つて、何事か神文を唱へける。忽ち甕は横に平たくなり、その代りに丈は低くなりぬ。口をつけるには丁度よき加減となりけり。

蚊取別 『あゝ見とる間に、甕が地の中へ這入りよつたな。ちやうど私の體の丈に比べて、よい加減の所へ來たワ』

日出神 『さあ飲ましてあげませう』

と云ひながら、蚊取別の身體に靈縛を施した。蚊取別は首から下は、材木のやうに堅くなりぬ。

蚊取別は酒に心を奪られて、身體の強直した事も氣が付かず、首ばかり振り居たる。日の出神は蚊取別の二本の脚をグツと掴みて、甕の上に突き出したるに、

蚊取別は舌を出して、

蚊取別 『もしもし、も少し一寸許り下げて下さい、届きませぬ』

日出神 『よしよし』

と云つて七八分下げた。蚊取別は一生懸命に舌を出し、

蚊取別 『もう一分下げて下さらぬか、届きませぬ』

日出神 『よしよし』

蚊取別 『そら反對です、高うなりました。もちつと下まで』

日の出神は蚊取別を上げたり、下したり、どうしても酒の處へまで届かさざりけり。蚊取別は聲を搾り出して、

「あゝ鈍なお方だな、もちつと下げて下さいな」
斯くして半時ばかりも時間を經にける。蚊取別は、

「かゝゝ」

と咳拂ひをすると共に、焼石が三箇飛び出し、ジユンジユンと音を立てて甕の中に落ち込みし途端に、甕は煙のごとく消え失せにけり。

そこら一面もとの暗夜となり、空には閃く星の影、地には暗を透して蚊取別の頭薄く光りゐるのみなりける。

これより蚊取別は、すつかり酒が嫌ひになつて了ひ、しかして三五教を信ずる事となり、面那藝司の供となりて諸方を遍歴し、知らぬまに生神となりにける。

(大正一一・二・二 舊一・六 井上留五郎録)

第四六章 白日別（三四六）

夜は仄々と明けかかる。國家興々と鳴く鶏の、聲に日の出宣傳使、東天紅を兆して雲を披きて昇りくる、清新の晨の空気を吸ひ乍ら、露路を分けて、日は白々と白日別司の館に進み行く。

蚊取別は數多の瓢箪を腰にガラガラ云はせながら、跛を引きつつ頭を空中に上げたり下げたり、息もセキセキ四人の後に跟いて来る。その姿の可笑しさは、飯蛸魚が芋畑から立つて逃げる姿その儘なりける。

日の出神の一行は、白日別の館に近付き、門を叩いて打てども打てども、何の答へもなければ、日の出神は蚊取別に向つて、

「汝はこの塀を越え、中より門を開け」と命じたまへば、蚊取別は、

「これ程高い塀を私のやうな跛が、何うして越せませうか」
日出神「越せるとも、越せる工夫がある。斯うするのだ」

と云ひ乍ら、腰の瓢箪の詰を抜いて、

日出神「お前はもう酒は嫌ひになつたのであるから、もう酒はいらない、捨てて遣らう、未練は無いか」

蚊取別「ハイ、未練も焼酎も有りませぬ、竝酒ばかりです。もう放かしても一寸も惜しいとは思ひませぬ。しかし是れで一生酒と縁切れぢやと思ふと、名残惜い様な気がいたします。放かすは放かしますが、一寸嘗めてみても宜しいか」

日出神「卑しい奴ぢや、思ひ切りの悪い男ぢやなあ」

と云ひながら、瓢箪の詰を抜いて残らず大地に棄てて仕舞つた。そして澤山の瓢箪の口より、一々日の出神は力限りに息を吹込み玉へば、瓢箪は見る見る膨張して、風船玉のやうに薄くなり、蚊取別は自然に「フウ」と舞ひ颺りたり。

蚊取別「モシモシ颺ります、どうしたら宜しいか」

日出神「その瓢箪を一つ一つ放かすのだ。薄くなつて居るから爪で破れ」

蚊取別は爪の先でパチパチと破つた。一度に瓢箪は破れて、圖顛倒と屋敷の中に落ちた。門内にはドスン、「アイタタ」の聲聞えみたり。

ひのでのかみ
日出神 〇 おい、早く門を開けぬか

かとりわけ
蚊取別 〇 「あかぬ」あかぬ薩張あかぬ。抜けた抜けた

つらなぎ
面那藝 〇 何が抜けたのだい

かとりわけ
蚊取別 〇 腰だ、腰だ

つらなぎ
面那藝 〇 間に合はぬ奴だナア。腰を抜かしよつて

いと云ひながら翻然と體をかわし、「もんどり」打つて門内に飛込んだ、忽ち門は

さいう
左右にサツと開かれた。

つらなぎ
面那藝 〇 皆さま御待たせ致しました、さあお這入り下さい

よにん
四人の宣傳使はドシドシ奥へ進み行く。

かとりわけ
蚊取別 〇 あゝもしもし、私を如何して下さいます。私を、私を

と叫びをる。祝姫は氣の毒がり、後に引返して蚊取別の手を取り抱き起さうとし

かとりわけ
蚊取別は何うしても腰を上げぬ。

はぶりひめ
祝姫 〇 何故起きないのですか

かとりわけ
蚊取別 〇 はい、私は嬢よりも子よりも、好きな酒がすっかり嫌ひになりました。

かうなると思ひ出すのは、國に残した女房の事。あゝあゝ、もうこの頃は死んだか生きたか、何分太平洋を越えて永い歲月、何ンば女房が有つたとてまさかの間には合ひませぬ、察する處貴方は獨身らしい、何うぞ私に輿入れして下さい。そして腰が立ちますよ」

祝姫「オホホ、まだ貴方は酒に酔うて居るのですか。何ほど男旱の世の中でも、云うと濟まぬが、貴方の様な黒いお方の女房に誰がなりますか。臆て烏が婿に取りませう。私はたとへ烏に身を任しても、貴方のやうな瓢箪面には眞平御免ですよ。阿呆らしい、サアサア早く御立ちなさい。日の出神さまに睨まれたら忝りませぬよ」

蚊取別「アア、成るは厭なり、思ふは成らず、私の好く人また他人も好く。アア氣の揉める事だワイ」

祝姫「知りませぬ」

と「ツン」として、足を早めてさつさと奥に行かうとする。蚊取別は蓑を握つて、もしもし、さう素氣無くしたものでは有りませぬ。旅は道伴れ世は情」

祝姫はむりひめ「エ、情け無いなさ」

と禿頭はげあたまを「ぴしやつ」と叩たたいて一目散いちもくさんに走り行はしく。蚊取別かとりわけは腰こしを抜ぬかした儘まま、

「オーイ、オーイ」

と叫さけびゐる。

日の出神ひのかみの一行いつかうは、館やかたの内うちを隈くまなく探さがし見みたが、猫一匹ねこいつびきもゐない。不思議ふしぎぢやと其處邊中そこらぢうを開あけて見みたるに、國魂くにたまの神純世姫かみすみよひめの御魂みたまは奥殿おくでんに鄭重ていぢゆうに鎮祭ちんさいされてあり。さうして一切いっさいの器具きぐは、秩序ちつじよよく整頓せいとんしてある。一同いちどうは神殿しんでんに向むかつて天津あまつ祝詞のりとを奏上そつじやうしたるが、神殿しんでんには何一なにひとつ供物くもつは無なかりける。一枚いちまいの紙片しへんに何事なにごとか記しるしあり。日の出神ひのかみは恭まことしく神殿しんでんに進すすみ、これを手てに戴いたき拜讀はいどくしたるに、神かみに奏上そつじやうする祝詞のりとと思おもひの外ほか、次つぎの様やうなことが記しるされありける。

一、私わたくしは白日別しらひわけと申まをす、筑紫つくしの國くにの大酋長だいしゅうちやうであります。一昨夜いつさくやの夢ゆめに、國治立くにはるたちの命みことの珍うづの御子みこと、神伊邪那岐命かむいぎなぎのみことの珍うづの御子みこが、この筑紫つくしの島しまにお降くだりになるから、汝なんぢら一族いちぞくは、この國くにと館やかたを明あけ渡わたし、一時いちじも早はやく高砂たかさこの島しまに立たち去さりて、その島しまの守護職しゆごしよくとなれ。跡あとは高照彦神鎮たかてるひのかみしづまり給たまへば、筑紫つくしの國くにも、葦原あしはらの瑞穂みづほの國くにも穩おたや

かに治まるべしとの、夢の御告げでありましたから、私は夜の間に一族を引連れてこの島を立退きました。跡は宜しくお願い致します。

日の出神様

高照彦様

外御一同様

と記しありぬ。日の出神はこの遺書に依り、高照彦を筑紫の國の守護職となし、名も白日別と改めしめ、天運の到るを待つ事としたまひぬ。

此より日の出神は常世の國へ、面那藝司は天教山へ、祝姫は黄金山に向つて進む事となり、三柱は此處に惜しき袂を別ちたりける。

(大正一一・二・二 舊一・六 高木鐵男録)

第四七章 鯉の一跳 (三四七)

金山彦の生れまして、この世も曇る瀬戸の海、地中海の波を蹴立てて東南指して波上を滑る帆前船あり。頃しも夏の眞最中、三伏の暑熱に船の諸人は汗を流し息も苦しげに波に揺られて、彼方の隅にも、こちらの隅にも苦しみ乍ら、ゲエゲエと八百屋店を出すもの多く、無心の船は波を蹴立てて眞帆に順風を孕ませながら走りゐる。日は漸く西の山の端に没し、中天の月は洗ひ出した様な、清涼の光を海面に投げゐたり。

風は漸く凪いで、波は青豊を敷きたる如く穏かになり來り。従つて船の動揺も静まり、船客は追々と元氣を回復し、彼方にも此方にも雑話が始まりぬ。船の一隅よりスラリと立ち上り歌ひ出したるものあり。

烏羽玉の暗きこの世はよき事に 枉事いつき枉事に
よき事いつく世の習ひ 科戸の風の凪ぎ渡る
この海原に照る月は 仰げば高し蒼空の
限り知られぬうまし世の ミロクの御代の恵みかな

あゝさりながらさりながら
この船一つ砕けなば

何れの人もおしなべて
海の藻屑となりぬべし

あゝこの船よこの船よ
暗夜を渡す神の船

天津御空の月よりも
高く尊き神の恩

千尋の海の底よりも
深き恵みの神の徳

天と地との中空を
やすやす渡るこの御船

と歌ふ。諸人はこの歌に耳を傾け、一言も漏らさじと聞き入りぬ。船の一方よりは女の聲として、またもや歌が始まりける。

神の恵みに抱かれて
この海原を渡り行く

教の友船嬉しくも
眞澄の空のその如く

澄み渡りたる宣傳歌
高天の原も海原も

實に明らかく住の江の
御前の神の御守りに

筑紫の島を後にして よしとあしとの瀬戸の海
 今わたらしし皇神の 國治立の始めてし
 その言靈の祝姫 四方の村雲吹きはふり
 はふり清めて今此處に 歸り來るも神の恩
 深き縁の神の聲 耳に聞ゆる三五の
 道の教の宣傳歌 汝は何れの神なるぞ
 君は何れの神なるぞ 名告らせ給へすすすくに
 大峽小峽に伸び立てる 檜杉木の芽の如く
 の 宣らせ給へよ宣傳使 妾は神の命もて
 珍の都のエルサレム 黄金山のそのもとに
 現はれませる埴安彦の 救ひの神の御もとべに
 侍ふ者ぞいざさらば 名告らせ給へ宣傳使』

と聲も涼しく女宣傳使は問ひかけたり。月の光に照らされて、
 頭の馬鹿に光つた

男をとこ、船ふねの中程なかほどより立ち上りたが、

あゝよい月つきよ　よい月つきよ　いつも月夜つきよに米こめの飯めし

米食こめくふ蟲むしを乗のせて行ゆく　この友船ともふねは何處どこへ行ゆく

常世とこよの國くにか唐國からくにか　行衛ゆくゑも知らぬ戀こひの暗やみ

俺おいらの戀こひは命いのちがけ　命いのちを的まとに跟ついて來きた

祝はふりの姫ひめの宣傳使せんでんし　千々ちぢに心こころを筑紫つくしがた

言葉ことばつくして口説くどけども　蜂はちを拂はらふ様やうな無情つれなさに

諦あきらめようとは思おもへども　諦あきらめられぬ吾わが戀路こひぢ

戀こひし戀こひしの一筋ひとすぢに　祝はふりの姫ひめの後追あとおうて

此處ここまで來きたのが蚊取別かとりわけ　堅かたき心こころは何處どこまでも

唐國山もろこしやまの奥おくまでも　千尋ちひろの海うみの底そこまでも

祝はふりの姫ひめの後追あとおうて　何處どこ々々どこまでも附狙つけねらふ

祝はふりの姫ひめよ頑固かたくなな　心こころなほして戀こひ慕したふ

男心を酌みとれよ

男の身もて手弱女の

後尋ね行く戀の暗

一度は晴らしてくれの空

空行く鳥も今頃は

夫婦仲善く暮すのに

一つの船に乗りながら

名告りをせぬとは胸欲な

好きな酒まで止めにして

お前の後に附纏ふ

俺の心も酌み取れよ

跳ねるばかりが藝でない

男冥加に盡るぞよ

蚊取の別のこの面は

女の好かぬ顔なれど

世の諺にいふ通り

馬にや乗つて見よ男には

會つて見ようと云ふぢやないか

素知らぬ顔して白波の

上漕ぎわたる船の中

俺も一度は漕いで見たい

船の梶取り船人の

蚊取は別て上手もの

蚊ぢ取は別てうまいぞや

と、噺れ聲を振り絞つて戀路に迷ふ、恥も情もかまはばこそ、聲を限りに海面吹

き渡る風に向つて歌ふ。祝姫は蚊取別のこの歌を聞きてもどかしがり、穴でもあらば潜り込みたい心持になつて息を凝らして船底に噛つきみたりける。

(大正一一・二・二 舊一・六 吉原亨録)

第九篇 小波丸

第四八章 悲喜交々(三四八)

月照り渡る浪の上を客人を満載したる小波丸は、このロマンスを乗せて波に鼓を打たせつつ、東南に向つて進み行く。祝姫の歌に答ふべく以前の宣傳使は、亦もや立つて聲も涼しく歌ひ始めたり。

常世の波の重浪を

渡りて漸く筑紫島

虎狼や獅子熊の

猛り狂へる熊襲國

肥の國豊の國越えて

漸うここに北光の

三五教の宣傳使

目一箇神と謳はれて

錦の機を織りながら

千尋の海を打渡り

黄金の山に進み行く

思へば同じ教の船

同じ教を宣べ傳ふ

この世の曲を祝姫

蚊取の別に狙はれて

苦き思ひの汝が心

幾重にも量り參らせる

さはさり乍ら世の中は

戀はれ戀ふるも前の世の

盡せぬ縁と聞くからは

仇に捨てなよ祝姫

蚊取の別の顔は

しこの醜女に似たれども

汝が身を思ふ眞心は

生命かけての戀の闇

闇を晴らして助くるは

世人を救ふ大神の

心を現はす宣傳使

幸さいひなれ汝は獨ひとり身もの者
汝なれの身みの上うへ表面はつらの
如何どうなり行ゆくも人ひとの身みは
心こころの儘ままよ祝はふり姫ひめ
蚊かとり取りの姫ひめのそおも面て
されど心こころは腐くさり切きり
花はな光なてる彦ひこと手てを取とりて
頼たよる術すべなき獨ひとり身みの
汲くみて助たすけよ祝はふり姫ひめ
何いづれ一いち度どは夫つまを持もつ
花はなに迷まよふな實みを求もとめ
蚊かとり取りの別わけの妻さい女ぢよなる
花はなにも紛まがふ優やさ姿すがた
夫つまある身みをも打うち忘わすれ
今いまは常とこ世よの佗わび住ず居まゐ
男をとこ心こころの哀あはれさを
今いまは常とこ世よの佗わび住ず居まゐ

と歌うたひければ、祝はふり姫ひめは蛇へびよりも【げぢげぢ】よりも、何なによりも嫌いやなる蚊かとり取り別わけに戀れん
慕ほされ、力ちから限かぎりに遁にげ隠かくれつつありし矢や先さき、執し念ふねん深ぶかくも何いづこ處こよりも蚊かとり取り別わけ
がこの船ふねに乘のりゐて、いやな歌うたを歌うたひしに縮ちぢみ上あり、胸むな苦くるしく嘔おう吐とを催もよほす様やうな思おも
ひに惱なやみゐたりしが、力ちからと思おもふ宣せん傳でん使しの北きた光てる神のかみは、

蚊取別の燃え立つ思ひを叶へてやれ、それが宣傳使の世を救ふ役だ。幸ひ獨身だから」

と勧められたのには倒れぬ許りに驚きける。

祝姫は心の中に思ふ様、あゝこんな事なら何故もちと早く夫を持つて置なかつた。彼方からも此方からも夫にならう、女房に呉れいと、澤山の矢入れがあつた。その中には立派な男も澤山あつたのに、まあ世界は廣い周章てるには及ばぬ、大神様のため世界のために宣傳使となり、一つの功名を立てて立派な神司となつたその上では、どんな好い夫でも立派な男でも持てると思つたのは誤り、あまり玉撰びをして男の切ない思ひを無下に辭つた。その天罰が報うて來て、世界に二人と無いやうな醜い男を夫に持たねばならぬか、それとも、せめて智慧なりと人に優れ、心の高尚な男ならたとへ色が黒うても、「ひよつとこ」でも構ひはせぬが、選りに選つて世界の醜男に添はねばならぬか。あゝ情ない。如何しようぞや。とばかりに船底にしがみついて泣き伏しける。祝姫は決心の臍を固め、またもや立つて歌もて北光神に答へたり。

昨日きのふに變かはる今日けふの空そら 定め無なき世よと云いひ乍ながら

浮世うきよの義理ぎりに絡からまれて 嬉うれしい悲かなしい船ふねの上うへ

嬉うれしい悔くやしい波なみの上うへ 心こころの浪なみは騒さわげども

【なみなみ】ならぬ北光きたてるの 神かみの命みことの御教みをしへは

我身わがみの胸むねにひしひしと 釘くぎを打うたるる如ごとくなり

あゝ何事なにごとも人ひとの世よは 吾身わがみの儘ままにならぬもの

切せつない思おもひの戀男こひをとこ 切せつない思おもひの我心わがこころ

雪ゆきと炭すみほど變かはれども 切せつない思おもひは同おなじ事こと

身みの行ゆく末すゑも恐おそろしや 頑固かたくな心こころ振ふるり捨すてて

汝なれが命みことの愛いとくしみ 酬むくい奉まつらむ祝はふり姫ひめ

蚊取かとりの別わけの宣傳かみさま使まよ 必かならず無情つれなき女をんなぞと

憎にくみ玉たまはず末すゑ長ながく 千代ちよも八千代やちよも愚おろかなる

妾わらはを妻つまと愛いとくしみ 虎伏とらふす野邊のべも山奥やまおくも

互たがひに手てに手てを携たづなへて 睦むつびに睦むつぶ玉椿たまつばき

鴛鴦あしの契ちぎりを何時いつまで迄も

續つづかせ給たまへよ蚊取別かとりわけ 卍

と歌うたをもつて北光きたてるのかみならび神竝かとりわけに蚊取別しよつたくに承諾むねの旨こたを答こたへたりける。

茲ここに祝姫はふりひめは蚊取別かとりわけによく仕つかへ貞節ていせつなら竝なびなく、婦人ふじんの龜鑑きかんと謳うたはれて夫婦ふうふは共ともに東西とうざいに別わかれて神かみの教をしへを宣傳せんでんし、天あまの岩戸いはとの變へんに於おいて偉勳あいくんを立てた雲依彦くもよりひこは蚊取別かとりわけの後身こうしんにして、太玉姫ふとたまひめは祝姫はふりひめの後身こうしんなりける。

(大正一一・二・二 舊一・六 湯淺仁齋録)

第四九章 乘のり直なほせ(三四九)

折をりから吹ふき來くる眞夏まなつの夜風よかぜに面おもてを吹ふかせながら、船頭せんどうは舳へさきに立たつて、

龍宮りうぐう見たみさに瀬戸海せとうみ越こせば

向むかふに見みえるは一つ島ひとつしま

と歌ひ出した

船は小波の上を静かに迂り行く。空一面に疎の星が輝き、月は中空に水の滴るやうな顔をして海面を覗いてゐる。海の底には龍の盤紆るやうな月影沈んでゐる。この時前方より艀を漕ぎ舵を操りながら、グーイグーイ、ギークギークと音をさせて、此方に向つて進み来る一艘の船があつた。その船の舳に蓑笠を着し、被面布をつけた男が立つてゐる。北光神は、その船に向つて聲を張上げ、

心を盡し身を盡し 天地の神に麻柱の

道を立て抜く宣傳使 四方の國々巡り来て

やうやう此處に北光の 我は目一箇神なるぞ

名告らせ給へその船の 舳に立てる宣傳使

舳に立てる神人よ

と歌へば、その聲に應じて向ふの船より、

天津御神や國津神

木の花姫の御教を

四方の國々島々に

廣道別の宣傳使

汝は何れに坐しますか

我はこれより亞弗利加の

熊襲の國に渡るなり

熊襲の國は猛くとも

神の依さしの言靈に

四方の曲靈を悉く

言向和はせ天教の

山に坐します木の花姫の

神の命や黄金の

山の麓に現れませる

埴安神の御前に

奇しき功を立つるまで

浪路を渡る宣傳使

稜威も廣き廣道別の

神の使は我なるぞ

神の使は我なるぞ

と歌ふ聲も幽かになり行く。二人は互ひに立ち上がり、被面布を振つてその安全を祝し合ひける。船中の人々は亦もや雑談を始め出したたり。
甲 〇 もう、つい龍宮城が見えるぜ。おとなしくせぬと、龍宮さまが怒つて荒浪を

立てられたらまた昨日のやうに八百屋店を出して苦しまねばならぬから、小さい
聲で話しをしようかい」

乙「お前からこの龍宮の譚を知ってるか、今こそかうして船に乗つて瀬戸の海から
龍宮城まで樂に行けるが、昔は龍宮と瀬戸の海との真中に、それはそれは高い山
があつて、その山はシオン山というてな、何でもえらい玉が出たといふことだ。
それが大洪水のあつた時に、地震が揺つてその山が地の底に沈んで了ひ、龍宮と
瀬戸の海とが一つになつて了うたといふことだよ」

丙「そんな事かい、そんな事は祖父の代から誰でも聞いてゐる事だよ。もつと珍
しい話はないのかい」

乙「龍宮城には稚櫻姫といふ、それはそれは美しい神様があつて、そこに大八洲
彦命とか、大足彦とかいふ立派な神様が龍宮城とエルサレムの宮を守つて御座つ
た。さうすると常世の國の常世姫といふ偉い女性が龍宮を占領しようと思つて、
何遍も何遍も偉い神様の戦ひが始まつたといふことだのう。今の龍宮もエルサレ
ムの宮も昔の話と比べて見ると、本當に【みじめ】なものだ。ヨルダン河という

て大きな河があつたのが、その河も洪水の時に埋つて了ひ、今では小さい細い川となつて、汚い水が流れて居る。變れば變る世の中だ。これを思へば何んな偉い神様でも「あかぬ」ものだな。翔つ鳥も落ちる勢の稚櫻姫といふ神様も、大八洲彦といふ神様もさつぱり常世姫とかに「わや」にされて、今は吾々の行く事のできぬ富士とやらへ逃げて行かれたといふ事だよ」

丙「フーン、さうかい。さうすると我々も今豪さうに言つて居つてもどう變るやら分らぬな」

乙「知れた事よ、神様でも時世時節には敵はぬのもの、我々はなほ更の事だ。併しこの船には立派な宣傳使が乗つて居られるといふ事だが、一遍話を聞かして貰つたら如何だらう」

甲「イヤ最う宣傳使の歌も好い加減なものだよ。神が表に現はれて善と惡とを立別けるなんて、冷飯に湯氣が立つたやうな事を吐かすのだから、阿呆らしくて聞かれたものぢやない。そんな歌は大洪水前の事だ。大洪水のときは善の神様は天教山とか天橋とかに助けられ、悪い者は洪水に漂うたり、百足蟲の山や蟻の山に

揚げられて、善悪の立別がハツキリあつたさうだ。俺等の祖父の代の話だから詳しい事は知らぬが、今ごろにそんな事を歌ふ奴は、死んだ子の年を數へるやうなものだ。阿呆らしいぢやないか。これだけ開けた世の中が、さう易々と立替はつて堪るか。善と悪とを立別けるとか變るとかいふが、俺の處の村の久公のやうな悪人は段々と榮えて來るなり、新公のやうな善人は益々貧乏して、終ひには道具を賣つて親子夫婦が生別れして乞食に出たぢやないか。俺はそれを思うと神様を頼む氣にならぬがなア。宣傳使の歌なんて古めかしいわい、六日の菖蒲十日の菊だ。併しながら、憂晴しに聞くのは善いが、それを「ほんま」の事だと思つたら、量見が違ふぞ。宣傳使といふものは、方便を使つて吾々に悪い事をせぬやうにするのだが、今日のやうに悪が榮えて善が衰へるやうな暗がりの世の中に、何ほど宣傳使が唝鳴つたところで、屁の突張にもなつたものぢやないよ」

この時、船の一方より、

「神が表に現はれて

善と悪とを立別る」

と言ひながら、甲は立つて、

「やいやいやい宣傳使 それ来るそれ来る船が来る

お前のやうな痛い事 轉る奴はあの船に

一時も早く「乗り」直せ 早く「乗れ」乗れ「乗り」直せ

そら来たそら来た船が来た 乗らぬか乗らぬか宣傳使

貴様のお蔭で頭痛がする」

と呶鳴つてゐる。後の方より亦もや乙の宣傳使が立つて、

「神が表に現はれて 善と悪とを立別る」

甲「また出よつた。一體この船は何だい。もう船の旅は懲り懲りだ」

船頭「お客さま、船が着いた。早く上らつしやれ」

と叫ぶ。甲は頭を抱へて、いの一に船を飛出し、どこともなく姿を隠したり。
この男は果して何者ならむか。

(大正一一・二・二 舊一・六 櫻井重雄録)

第五〇章 三五 (三五〇)

如何した機みか龍宮城の海面に指しかかつた船は、エルサレムには着かずして
方向違ひの此方の岸に着きあたり。

此處は不思議にも月照彦神、足眞彦、少名彦、祝部、弘子彦の五柱が、ズラリ
と立ちあたり。さうして北光神、祝姫、蚊取別を靡いた。五柱の神司はものをも
云はず、ドンドンと崎嶇たる岩山を目がけて登り行く。三人は何心なく汗を流し
てその後を跟いて行く。先に立つたる五柱は恰も雲を走るが如き速力で岩山を登
つて行く。さうして五柱は時々後を振向きて三人を手招きする。三人は吾劣らじ

と汗塗になつて岩山を駆け登りける。

登りて見れば大小四十八箇の寶座が設けられてあり。さうして其處には種々の立派な男神、女神が鎮座して、苦、集、滅、道を説き、道法、禮節を開示して居る。五柱の神司は三人に向ひ、一々その寶座に案内をなし、さうして現、神、幽三界の實況を鏡のごとく寫して見せたりける。蚊取別は餘りの嬉しさに額をやたらに叩き、

「あゝ今日は何と云ふ結構な日柄であらう。好きな好きな世界で一番好きな、惚れた惚れきつた、可愛い可愛い一番可愛い、美しい美しい世界に無いやうな美しい祝姫の宣傳使と夫婦の約束を結んだ。あゝ嬉しい嬉しいほんとうに嬉しい。これほど嬉しいその上に結構な結構な五柱、立派な立派なほんとうに立派な、結構な神司に導かれて、高い高い天程高いこの山に導かれ、廣い廣い限りも無いほど廣い、三千世界の有様を綺麗な鏡に寫して見せて貰つて、阿呆な私も賢うなつた。眞實に誠に賢うなつた。女房喜べ、おつとどつこい祝姫よ。私はお前の夫ぢや程に、堅い堅いほんとうに堅い、この岩の上で堅い堅いほんとうに堅い、夫婦の約束結ばぢ

やないか、あゝ嬉しい嬉しい、どっこいしよどっこいしよ。たとへ天地が動いて
も、私とお前は先の世かけて、ミロクの世界までも變りはしままい、北光彦の宣傳
使、【がんち】イヤ片目の神の固めた仲ぢや。千代の礎萬代の固め、固い約束、
金輪奈落、心の底まで打ち解けて、天と地とに一人の男、天と地とに一人の女、
こんな目出度夫婦があるか、俺の頭は南瓜であるが、瓢箪面であらうとも、そん
な事には【かぼちや】居られない。祝へよ祝へ岩の上、祝へよ祝へ岩の上、踊つ
た踊つた祝姫よ。どっこいししよう、どっこいしよ。俺が踊るに何故踊らぬか、オ
ツト分つた神様の前ぢや、恥かしがるのも無理はない、祝へよ祝へよ岩の上、ど
っこいしよ どっこいしよ』
と踊り狂うて、千丈の岩の上からグワラグワラと岩と一緒に谷底へ引繰返つた。
その物音に驚いて目を開いて見れば豈に圖らむや十三夜の瑞月は天空に輝き、口
述著者の瑞月の身は高熊山の蟻岩の麓の松に脊をあてて坐り居たりける。惟神靈
幸倍坐世。

(大正一一・二・二 舊一・六 加藤明子録)

（第三九章）第五〇章 昭和一〇・二・二五 於天恩郷 王仁校正）

附録 第三回高熊山參拜紀行歌

王仁作

高熊山參拜者名簿（一）

（大正十一年四月十三日 舊三月十七日）

（一）

【出】の御魂の開け【口】 神の稜威も高熊の（出口王仁三郎）

清き靈地に詣でんと 大本信徒の一隊は

世繼【王】山を後にして 【仁愛】^{みろく}の神の教のまに

【三】月彌生の十五日 圓滿清【郎】澄渡る

月【野】御影を頼りとし 【崎】を争ひ【信】^{まめひと}徒が (野崎信行)

進み【行】くこそ雄々しけれ 世に【勝】れたる大【本】の (勝本安太

郎)

教は浦【安】國の果 【太】平洋をのり越えて

光は日々に【増】り行く 山【川】野原谷の底 (増川康)

【康】^{しづか}に榮ゆる神の道 誠の神の御心を (佐藤勝治)

【佐藤】る靈界物語 優【勝】劣敗今の世の

汚れを清め【治】め行く 皇大神は【石】^{いそ}の上 (石川保次郎)

古き神世の昔より 楔身たまひし五十鈴【川】

國家【保】護の神徳は 他教にまさりていち【次郎】く

東の海や【西】の洋 塞がり渡る【村】雲を (西村寛之助)

【寛】仁無比の言靈【之】 【助】に開き【初】めつつ (初田彦九郎)

教へ導く猿【田彦】 【九郎】するがの富士の山

仰げば【高】き雲の【橋】 【喜美】の恵は常永に (高橋喜美)

かがやき渡る雲の上 下津【石】根や【川】の底 (石川こずえ)

木々の【こずえ】に至るまで 輝やき和【田】る【中】津國 (田中龜太

郎)

【龜】の齡の充ち【太郎】 下津【岩】根の日の【本】は (岩本なみ)

【なみ】も靜かに治まりて 【村】雲四方に晴れ渡る (村橋金一郎)

【橋】は黄【金】の【一】筋に 老若男女の【牧】ばしら (牧近一郎)

遠き【近】きの隔てなく 【一】心不亂にさざれ【石】 (石川はつ)

清く流るる和知の【川】 水瀬【はつ】よく稜威【高】く (高野久)

御代【野】榮えは永【久】に 【岩城】の如く美治【よし】 (岩城よし)

露【西田】たる青葉蔭 お【津留】雫も【三】な【上】と (西田津留)

なりて水かさ【まさ】り行く 瑞の御魂の海潮が (三上まさ)

雨ふる郷の龜【岡】や 瑞祥閣に立籠り (岡基道)

五六七の【基】の神の【道】 【田】加熊山の岩【中】に (田中嘉太郎)

修業なしたる物【嘉太】り 上田喜三【郎】が生家より

【東】にあたる川原【條】 【内外】の區別辨まへず (東條内外)

夢中遊行月の夜に 西【山口】に進【三^み】行く (山口三藏)

【藏】さは暗し松の【森】 御【國】の【幹】を【造】らんと (森國幹)

造)

議り玉ひし御神慮を 堅く眞【森】て【種】々の (森種次)

苦勞艱難なめ【次】ぎつ 上中下なる【三段】の (三段崎俊介)

御縁【崎】はふ神の業 鬼も大蛇も戌の【俊】

神の【介】けに【石田】ふや 天馳せつかい富士の山 (石田要之介)

扇の【要之助】け以て 【西】の穴太の【村】外れ (西村ゆき)

【ゆき】未だ残る【奥】山の 草【村】わけて辿りつつ (奥村貞雄)

神の【貞】めの靈場に 尋ね行くこそ【雄】々しけれ

(一一)

【田】舎の【村】に生れたる 神に仕ふる神【兵】が (田村兵次郎)

その靈術も著【次郎】く 屹立したる【岩城】に (岩城達禪)

漸く【達】し悠然と 座【禪】姿の歸神術

雲【井】の【上】を泣渡る 山郭公血を吐いて (井上武仁)

【武】男と【仁】義の大御代に 【太田】る民の【幸】も【吉】く (太

田幸吉)

君の恵を仰ぎつつ 悪しき心を【桐山】に (桐山謙吉)

力をかくす【謙】讓の 徳の光りはさえも【吉】く 大和心の信徒が

【西尾】見當てに【金】峰山 手前の神山に【次】ぎて行く (西尾金次

郎)

治まる御代に【大崎】の 外國人に【勝】れたる (大崎勝夫)

誠に強き大丈【夫】は 數回【有田】の【九臯】氏 (有田九臯)

【瑞穂】榮ゆる玉の【井】の 村に生れし【上】田の子 (同瑞穂)

世は吉【祥】と【治】まりて 國威も四方に輝きし (井上祥治)

明治は三十一の年 春の初めに【齋藤】の (齋藤辨治)

借家を夜半に立出でて 咫尺も【辨】ぜぬ暗の夜を

神の大道に【治】めんと 稜威も【高木】神の山 (高木壽三郎)

經綸も長き三千【壽】の 【三】國一の不二の峰

【秀】妻の國も【平】けく 【遠】き神代の其ままに (秀平遠安喜)

波風【安】く治まりて 【喜】悅に充てる松【たけ】や (同たけ)

梅【野】花咲く門【口】を 【如月】九日子の刻に (野口如月)

小松【林】の御眷屬 【やゑ】の村雲搔別けて (林やゑ)

天の羽【車】轟かし 【小】さな宿【房】に降り來て (車小房)

顯幽二界の【溝】渠をば 上【下】の別なく取り放ち (溝下とみ)

巖【とみ】づとの神の教のり し【加藤】諭さん【吉】き【人】よ (加藤吉

人)

吾に続けと松岡の 貴きの道【柴田】どりつつ (柴田健次郎)

生れ付いたる【健】脚を 神使に【次】ぎて喜三【郎】 (藤岡しか)

【藤】蔓からむ神の【岡】 【しか】と踏みしめ【漆原】 (漆原一郎)

【一】心不亂に小【竹】の【中】 【かや】生ひしげる山路を (竹中か

や)

神の御杖に【すが】りつつ 【梅】咲き匂ふ宮垣内 (同すが・同梅)

あとに見捨てて登り行く 水音【高】く【澤】々と (高澤たか)

【たか】天原となり渡る 【川西】あれば【いさ】ましく (川西いさ)

榮え目出度き【松野】代の 聲も【しづ】かに【杉原】や (松野しづ)

【喜】び【重】ねて大本の 誠一つの信徒が (杉原喜重)

道の泉の【水口】を 尋ねて進む【惣】部隊 (水口惣夫)

老若男女【夫】婦連 【松野しげみ】の下蔭を (松野しげ)

心いそいそ【平】原の 【松】樹【丈】餘に伸びも【吉】く (平松丈吉)

野【山崎】々た【つね】行く 今日【初】ての鹿【島】立 (山崎つね)

二回目三回四回迄 登山を爲せる人もあり (初島政)

一回毎に【政】り行く 歩みも【吉田】の【黄金】に (吉田黄金)

彩どる野邊を眺めつつ 小【石】の轉ぶ【田】圃路 (石田ちよ)

かたへの林にた【ちよ】りて 【原】をふくらす辨當の【祐】 (原祐藏)

胃【藏】の蟲を歡ばせ 小雨の空に一行を (西尾藤之助)

【西尾】目指して先【藤之】 横芝勇士に手を曳かれ (同與一郎)

なやむ足元【與一】々と 【稻】む色なく【田】どり行く (稻田愛五

郎)

萬有一切【愛五郎】 谷と谷との【落合】の (落合平三郎)

少し【平】らな芝の上 【三】人五人と名【西尾】 (西尾たね)

【た】か【ね】を【井】きせき【上】りつつ 【あや】に畏こき神の山

(井上あや)

【牧】の柱のすぐすぐと 【慎】しみ敬ひ【平】坦な (牧慎平)

巖窟前の木下蔭 一同の胸も【秋月】の (秋月晴登)

【晴】れたる空を【登】る如　　【杉山】越えて【勇】ぎ【吉】く　　（杉山
勇吉）

【村】草分けて【上】方へ　　【八重野】陣をばしき乍ら　　（村上八重野）
【小】笹ヶ【原】を進み【きぬ】　　一【同】息を【やす】めつつ　　（小原
きぬ・同やす）

【青】年隊の行く後【江】　　【壽】らすら【次】々かけ登る　　（青江壽次）

（以下第九卷）

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語　第七卷　靈主體從　午の卷

終り